
「突然ですが、貴方は今から魔王です。」

零式

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「突然ですが、貴方は今から魔王です。」

【Nコード】

N56500

【作者名】

零式

【あらすじ】

普通の人間が、魔王職に就くようです。

第一話…「トリップ」(前書き)

(出落ち注意。)

しかし、彼の目の前に途轍もない光景が写っていた
何と、ボスの目の前に騎士二人が戦っているのだ！

”……これは夢なのか・・・？”

ガキーン！！

「ぐあっ！」

一人の騎士が敗れる。

その鎧は黒く、胸には黒龍が象られたペンダントを着けていた。

「これで終わりだ……」魔王ッ！！！！」

立っていた白銀の騎士が止めを差そうとした。

しかし……ッ！

グサッ！

「ぐふっ……！ 馬鹿……なッ！」

黒い騎士が最後の力を振り絞り、止めを差そうとした騎士の体を剣
で突き刺した。

刺された騎士は、そのまま倒れた。

黒い騎士は、地面を這いずりながらボスの近くに近寄る。

そして黒い騎士は胸にしていたペンダントを外し、ボスの手に渡し
てこう言った。

【この城を頼む。】

そう言い終わると……黒い騎士は息絶えてしまった。

”何なんだ……？ この光景は……現実……なのか……？”

ボスは再び意識が遠のく……

……意識が無くなる瞬間、一人の女性の声が聞こえた。

……私の名は『スラナ』
魔王様にお仕えする者です。

なのですが……。

これは一体、どういう状況なのでしょう？

？突然、大きな爆発音がする。

？何があつたのかと急いで駆けつける。

？到着すると、そこは惨劇だった。

？魔王様のお部屋は半壊、そして何時もと違う侵入者。

？倒れている魔王様を発見、救助するも時遅く他界。

？そして、魔王様の近くに一人の男が・・・

？その男の手には、魔王様が大事にしていた黒龍のペンダントが・・・

？そして、今に至る。

はい。

画面上では、お分かりにならないと思いますが……現在、私……。

その男に膝枕をしています。

誰なんでしょうか・・・？ この男・・・。
どう思います？ 画面の前の貴方。

そして、一分の時が経つ……………。

「1」……………」

（おや？ ようやく目覚めた様ですね。）

「コロンビア……」

(……………。)

「ていつ」

バシッ！

スラナの手刀が顔面にヒットする。

「ぶっ！！」

「いつ……いきなり何すんの!？」

ボスは、余りの衝撃に起き上がった。

「ようやく起きましたか。」

「……あれ？　ここ何処？　アンタ誰？」

ボスの頭の中では、まだ整理がついていなかった。

「それが、第一声が『コロンビア』と言った男が言う事ですか」
(コロンビア!？　そんな事言ったか!？　俺!？)

「ええ、バツチリ。」

「ちよっ……！　心の中読むなよ！」

「読めるんですから仕方ないでしょ？」

「えっ……とお……初対面で早速悪いんだけど……」

「ええ、これから重大な事をお告げしますので、よくお聞きください。」

「話が早いな。そんで？ 重大な事とは？」

『突然ですが、貴方は今から魔王です。』

「へえ」……………「はああッ！！？」

こうして・・・ボスと名も無い世界での魔王生活が幕を開けた。

果たしてボスは魔王として、ちゃんと出来るのか

そして、無事にサラ達の所へと帰る事が出来るのか

今、ハチャメチャで、ちょっとスタイリッシュな物語が始まる。

「…………マジで俺が魔王なの？」

「しつこい様ですが、マジで貴方は今から魔王です。」

「／（＾０＾）＼ナントコッタイ」

第一話：「トリップ」（後書き）

？あとかきだべさ？

どうもです。

私の名は零式と申します。

今回から、こんなしょぼい小説を投稿していきたいと思います。
（コラボ・勝手にキャラ使用・絵を描いてくれる人。大歓迎。）

それでは、キャラ設定の説明です。

【ボス】

性別：

年：20代前半

能力：（普段）フラグを見切る程度の能力・触手を操る能力。（本
気）敗北、死亡フラグを与える能力。

備考：普通の人間。

しかし、いざ本気（人間を止める）になれば、人外の実在となる。

今回、魔王の称号を（イヤイヤで）見事Getした。

その活躍に、こうご期待

【スラナ】

性別：

年：10代後半（女子高生ぐらい）

備考：魔王の執事で秘書。

能力等は、一切不明。

冷静な性格で、Coolにツツこむ事も・・・
まだまだ解らない事だらけの女である。

さて、続いては世界観について説明しましょう。
舞台は、名も無い大陸です。

【名も無き大陸】

どっかの世界のどっかの大陸。
そこでは、人間と魔族がいがみ合いをしている所。

初代魔王は、殆どの人間達を*してきた為、人間側も魔族狩りを行う。
う。

まあ、ボスはそんな所に運悪く落っこちてしまい、この状況をどうにかしなければならなくなった。
(ぶっちゃけ、何処のエゲ？)

ちなみに、初代魔王が何であんな事になっていたかと言うと・・・

？何時もどおりに魔族を使って人間達を根絶やしにしていました。

？そこに侵入者が・・・

？最悪、そいつの装備は対魔王用の装備でした。

？苦戦を強いられる魔王。

?ボス登場。

?後の祭り。

こんな感じ。

まあ、魔王さんも運が悪かったのSA

第二話：「初めての魔王」（前書き）

？登場人物？

・ボス：二代目魔王。普段は人間だが、その気になれば人間離れが出来る。

・スラナ：魔王の秘書。何時も冷静で、侵入者が入ってきてても冷静な対処が出来る。

？あらすじ？

突然、底なしの暗闇へ落ちていくボス。

そこに一つの光が……

ボスが目を覚ますと、そこには大きな戦いが行われていた。
そして、倒れこむ初代魔王。

止めを刺されかけるも、何とか相手を倒すことが出来た初代魔王だが……
まもなく息絶える寸前、ボスに黒い龍が彫られたペンダントを授け、そのまま逝ってしまう。

その後、魔王秘書であるスラナという女性がやってくるが……
時既に遅く、初代魔王は……

そして、起きたボスにスラナが言った言葉。

「突然ですが、貴方は今から魔王です。」

？舞台？

【ワーウルフの住処】

森の奥深くにある村。

そこでは、人間と狼のハーフ・・・ワーウルフ達が住んでいる。

今は、戦争によって・・・女性達だけが村を守っている。
そんな村へボスとスラナは向かいます。

あと、早くも新キャラ登場です。

・・・第二話：『初めての魔王。』

第二話：「初めての魔王」

「……？魔王城？……」

「何を落ち込んでいるのですか？魔王。」

スラナが何やら落ち込んでいるボスに質問する。

「魔王って言うな。」

「いやね……魔王になって二日経ったけど、未だに魔王って何すんのか解らなくてさ」

ボスは、深いため息をつく

「昨日、護衛の為の練習をしたじゃないですか」

ボスは昨日の事を思い出し、ちょっと嫌なことを思い出したと後悔する。

「いや……俺半分負けてたし、スラナ強すぎだろーおい……」

「まあ、初代魔王にお仕えし者ですから……」

【それは、昨日に遡る……。】

二人は、城の広い場所に居た。

「そんで？ 何すればいいの？」

「魔王、私と手合わせを」

「……はい？」

ボスは、スラナの発言に首を傾げた。

「魔王たる者、護衛策の一つや二つ無ければいけません。」

「おいおい、待て待て待てい！」

ボスは、必死に話を止める。

「はい、何でしょうか？」

「それは、ギャグで言ってる？ マジで言ってる？」

「マジです。」

（うわぁ……真顔で言ったよ……しかも、最後にキリッってやつだったよ……）

「それでは、参ります。」

スラナはボスに向かって走り出す。

「えっ！？ ちょっと！？ フライングですかい！？」

スラナの拳が、ボス目掛けて飛んでくる。

「あばばばばばばばばばば！…？」

しかしボスは、それを何とか回避することが出来た。

スラナの攻撃が当たった地面には、クレーターが出来ていた……。

それを見たボスの顔が酷く青ざめていた……

「ちよつ！その攻撃力おかしいだろ！」

「避けて下さいよ、じゃないと……本気で怪我しますよ？」

スラナの激しい猛攻撃が、次々とボスを襲いかかる。

「ちよつ！おまつ！」

ボスは、何とか必死に回避しながら逃げる。

しかし、さすがにボスは人間。

スタミナも減っていき、だんだんバテていってしまう……。

スラナは、それに容赦なく攻撃をしてくる。

スラナの拳が、ボスの目の前まで迫っていた。

(ちい・・・！)

ドオオオオオオオオオン！！！！

地面に物凄い衝撃と音が響く

（やりすぎたか・・・？）

スラナは、ボスの安否を確認しようとした。

「ふうゝ・・・」

ボスの声が聞こえる。

煙が晴れ、ボスの姿が映る。

その腕には、何本ものピアノ線状の触手が固まり、盾となっていた。

「魔王……その腕は……」

その光景に流石のスラナも驚きを隠せずにいた。

「ああ、これか？ こいつ等は、俺を守ってくれる”家族”だ。」

「家族……？」

「そつ、生きている上に意識があるんだから、家族と呼んでも構わないだろ？」

「成る程、普通の人間とは……一味違いますね。」

「そういう事、それじゃあ！　続きと行こうか！」

そして、二人は数分だけ戦った。

結果は、引き分け。

ボスの触手がスラナの首に

スラナの拳がボスの顔面に

両者とも、すれすれの位置で攻撃を止まり・・・勝負がついた。

「ふう……腕いてえ……」

ボスは、腕をブンブン振る。

（まさか……私と互角に戦える者だとは……）

スラナは、何かを考えながらボスを見る。

（この方は、やはり・・・）

「まったく……あの時はマジで人間止めないといけない状況だったぞ……」

「おや？　それはあの時は、まだ本気では無かったと？」

「アホか、幾ら力があるうと女性相手にマジになる男が何処に居る。」

「貴方です。」

スラナはボスに向かって指を差す。

「指を差すな、指を・・・」

「それより……何で、この城には誰も居ないんだよ。」

「普通は、メイドとか色々居るだろうに・・・」

ボスの言うとおり、この城には魔族も鼠一匹も居なかった。

「大変申し訳ないのですが、ここには誰も配属されていないのです」

「だから……何で？」

「それは……初代魔王様の言いつけだからなんです」

「あのぱつつぁんの？」

「はい、初代魔王は城を建てた時に、配下の魔物達に……」

（ぱつつぁんの事は否定しないのかよ……）

【この城に警備も召使いもいらぬ！我と秘書のスラナが居れば良い！】

「・・・っと、言っております。」

「スラナ……お前、その発言で身の危険を感知しなかったのか？」

「……やはり、貴方も解りますか？」

「ああ……やっぱり、ここはエロゲの世界だろ。」

「まあ、初代魔王はヘタレが不幸を招いたのでしょうか・・・城を建てた数日後にお亡くなりになりましたしね」

（へ、ヘタレ！？ ……ん？）

「……つーことは……この城って新築？」

「ええ、だから床もこんなに綺麗でしょ？」

その通りに、この城の床、そして飾りつけも全て新品の物ばかりだった。

「えええええ・・・ちよっとそれって悲しくない？ やっと建てたのに死ぬとか……」

「まあ……不運って事でしょうね。」

「亡くなる前日には階段から落ちてましたし」

「おっさん……」

そして……。

「でも、その初代魔王は亡くなったんだからさ……警備とか就けるよ……」

二人は、階段を下りながら話をする。

「それで魔王は、今から仲間集めに？」

「魔王言っな。」

「そうだな、せっかくの新築なんだから何人か新居させないとな……」

「了解しました。」

「では、誰を新居させますか？」

そう言って、スラナは背中に背負っていた鞆から分厚い名簿^{リスト}を取り出す。

（め……名簿！？ 分厚ッ！）

パラパラパラ……

スラナは名簿を捲る。

「そうですね……」ワウルフ”とかは、どうでしょうか？」

「ワウルフ？ 狼男か……」

「いいえ、狼女です。」

「えっ！？ 男はっ！？」

「無理です。」

「今現在、人間達との戦争中なので、殆どののワーウルフが出ています。」

「はぁ！？ 戦争！？ 聞いてないぞ！？」

「あつ・・・そういえば言ってますでしたね。」

「いや、それは初日に言おうよ！」

それは、1年前の事・・・。

魔王が支配する大陸に突然人間達がやってきた。

人間達は、次々と魔族を倒していき、その領域を自分達の住処とした。

それを怒った初代魔王は、沢山の魔族兵を従えて人間達と戦争を始めた。

現在、大陸の東・南が人間の領域。

そして、北・西が魔族の領域。

今も、両者のいがみ合いが続いている。

そして、初代魔王は、一度人間達との戦いにより大破した城を修復。

新しく生まれ変わるも、その城の主である魔王も人間の送り手により死去。

今現在、魔族を指揮し、支える事が出来るのが・・・

「貴方です。」

「うむ、よく解った。」

「何か聞きたい事は？」

「もしかしてだと思いが……その戦争に殆どの男達が戦場に？」

「詳しく言えば、両領域の境界線・・・”戦場の境界”センジョウ キョウカイに陣地を取っています。」

「つまり言うなら、戦場から少し離れた場所にテントを張って住んでいるって事か」

「そういう事です。」

「成る程、それで？ 女達は何をやっているんだ？」

「ロクな戦力にならないと判断した初代魔王は、戦争で負傷した者達の介護とかをしています。」

「つまり、女達にはメディックの役目があるって事か・・・」

「食料配達とかもやっていますよ」

「うーん……完璧に戦争だな……」

（まあ、銃火器を使わないだけでもマシか……いや、マシとかそういう問題じゃないけど）

「それで、どうします？　ワーウルフを城に新居させますか？」

「うーん……まあ、もしもの事があるからな……なるべく多くの魔族をこの城に新居させないと……」

「了解しました。」

「それでは、参りましょう」

「OK。」

「しかし……大丈夫なのか？　侵入者が来る位だから道中に敵でも出るんじゃない？」

「人間達には、こちらの領土に入る手段を幾つか持っておりますので、多分出くわすでしょうね。」

「マジかよ……」

「大丈夫でしょう、魔王はお強いのですから」

「言っけどよ……」

「大丈夫です、いざとなれば私がお守りします。」

「背中は何に任せるぞ?」

「御意に……。」

二人は、ワーウルフの住処を目指し、城を出た。

その道中。

数名程の団体さんと出くわすも、あっさりと撃破。

「なあ、スラナ……俺が強いのか、相手が弱いのか……どっちだと思っ?」

「改めて言いますが、魔王がお強いですよ。」

「そうか……?」

（しかし……このペンダント着けてから力が湧いてくるな……まあ、良いけど）

「着きましたよ。」

そして、二人は、ワーウルフの住処へと辿り着く。

ワーウルフの住処に着いた二人は、早速 城に住む事が出来るワーウルフを探す事にした。

スラナはワーウルフ達を集めて、ボスが新たな魔王という事を伝える。

「この方が、我等の新たなる魔王……」ボス”様です。」

「スラナ……様を付けるのは止める。」

「何かハズい上に、違和感がバリバリだ……」

「ふん！新しい魔王？笑わせるんじゃないよ！」

だが、ワーウルフの女達は全員否定していた。

「そいつは、人間じゃないか！」

「魔族も堕ちた物ね！」

女達は、ボスにいちやものを掛けるような喋り方をしていた。

そこにボスが前に出る。

「あー……御託は””どうでもいい” 現在の魔王城は、警備も
0で誰も居ないんだ」

「誰か、城に移住する者は居ないか？」

ボスは、さっきのワーウルフ達のブーイングそっちのけで、話を進
めてきた……

その顔は……豪く涼しく、何も恐れていない、何食わぬような顔付
きであった。

（やはり、この方は底知れぬカリスマ……そして猛獣の睨みを小物

の様に見ている、この眼差し……」

（しかし……何処から、こんなカリスマ性が……？）

ボスを見ていたスラナは、そんな事を考えていた。

「おい、あんた……人間のクセして、随分と根性あるじゃないか・
・」

「本当だね……」

「やるぞ、ゴルア。」

ワールフ達が、ボスに向かって睨み付ける。

「はいはい……顔面近づけんな、キモイ。」

「それで？ 誰か城に来る奴は居ないのか？」

「今なら、スペシャル丼をプレゼント。」

ボスは”そんな程度”な事を気にせず、話を進めた。

（ん……？）

ふと、ボスの視界に一つの檻が映る。

「おい、そこにある檻……」

「その中には、お前等の同族が入ってないか？ それっばい姿が見えるんだが……」

（えっ……？）

またしてもスラナは驚かされた。

自分には見えなかったボスの目には、はっきりと見えたのだ。
その檻の中に入っているのが……ボロボロになって横たわっている
”ワーウルフの女の子”だという事を……

「ふん、人間には関係ない事だよ。」

「何の関係ないだ、随分と衰弱しているじゃないか……」
「このままでは、息絶えてしまうぞ？」

「知ったこっちゃねえんだよ！ 人間！！」

とうとうブチ切れてしまったワーウルフ達。

「皆！ かまう事はないよツ！ やっちまいな！！」

ワーウルフ達が一齐にボスに向かって襲い掛かってきた。

「魔王ツ！！」

スラナが大きく叫ぶ。

「……ハア……すつトロいな……」

シュツ……！

それは一瞬の出来事だった……。

ボスは、一瞬でワーウルフ達の首に”ピアノ線状の触手”が巻きつけていたのだ……!

「ぐ……が……?」

ギリギリギリギリ……

ピアノ線状の触手が、ワーウルフ達の首を強く締め付ける。

(な……今、何が起こったというんだ?)

スラナは、ボスがした一瞬の出来事に……もはや驚きの顔しか浮かばなかった。

ボスは、そのまま檻へと向かい鍵を外そうとした。

だが……。

「ん? あれれ……?」

「おい、この檻の鍵は何処なんだ?」

ボスは、鍵の在り処を聞き出そうとした。

「ぐッ……! そんな……物……とつくの昔に処分したよ……!」

「ああ……そうかい……じゃあ、もう少し絞まれ。」

ボスの指示により、触手が喋ったワーウルフの首を更に強く締め上

げた。

「参ったなゝ・・・仕方ない、壊すか……頼む。」

触手は、ボスの言葉を理解した様に・・・ボスの片手に集まり、鎌の様な形になった。

ガキイイン！！

そして、そのまま檻にかかっていた鍵を破壊した。

ボスは、その檻からワーウルフの少女を抱きかかえながら取り出した。

触手は、自動的に弱っているワーウルフの少女をモーフのように包み込んだ。

（やはり……かなり衰弱しているな・・・息をするのがやっとだぞ……）

「もういいだろうスラナ、一旦城に帰るぞ。」

「よ、よろしいのですか？」

「構わん。」

「俺はこういう奴は嫌いだ、特に……」

「反吐が出るくらいの腐れ尼はな」

ボスの顔は、少女にこんな事をするワーウルフの同胞達を恨むよう

にワーウルフ達を睨んでいた。

「……かしこまりました。」

（この方は……やっぱり……）

そう言つて、ボスとスラナはワーウルフの少女を抱えながら、城へと戻っていった。

第二話：「初めての魔王」（後書き）

ちよいと後半を真面目に書いてみたりする・・・

？キャラ説明？

？ワーウルフの少女？

年齢：14歳位。（中学生ぐらいです）

性別：

備考：ワーウルフの少女。

他のワーウルフ達から虐められていたが……ボスの目に止まり、救われる。

何故、彼女が檻に閉じ込められていたのかは……次回で明らかになります。

とりあえずそんじゃあ、次回もお楽しみに～～～

第三話：「Wolf Fang V.S Wolf Claw（狼の牙V.S

？登場人物？

・ボス：二代目魔王。意外とカリスマ性があり、何事にも臆しない性格を持っている。

・スラナ：魔王秘書。初代魔王に身体を狙われていたが・・・（性的な意味で）襲われる前に初代魔王が死んでしまう。

・ワーウルフの少女：ボスに助けられた少女。年齢的に中学生くらいの身体をしている。

？あらすじ？

突然、異世界へトリップしてしまった”普通の人間”ボス。その上、いきなり魔王職への転職と勝手になってしまう。

新しく建て替えた魔王城を手に入れるも・・・
城には誰も居らず、警備も0の状態だった・・・。

ボスは、どうにかして城に住ます仲間を探そうとする。

魔王秘書のスラナは、ワーウルフが的確な人材だという事を勧める。

しかし……結果は駄目で、逆に全員から殺気を向けられてしまう。

すると……ボスの目に一つの檻が目に入った。

その中を遠くから確認すると・・・何とッ！　ボロボロで衰弱しているワーウルフの少女だった・・・！

それに怒ったボスは、こんな事をしたワーウルフ達を締め上げ、無事に少女を救出する・・・。

そして、ボスとスラナは新たに仲間となるワーウルフの少女を抱えて城へと帰還するのであった・・・。

？舞台？

【魔王城：王座】

魔王が座つてる・・・よく見る例の場所。

幾度か、そこで戦闘が繰り返されていた為・・・結構傷が残っていたりする。

だが、大抵の傷はスラナによって修復されている。（主に魔法とかで）

今回も色々と傷つくこと間違いなし。

lf Claw・・・第三話：『Wolf Fang V・S Wolf
（狼の牙V・S狼の爪） 前編』

？魔王城？

ボスは、ワーウルフの少女を空いている寝室へ寝かしてきた。

「さて……とりあえず、あの子は空いている寝室に寝かしたが……」
「どうして彼女だけが、あんな目に遭っていたんだ？」

「推測ですが、彼女に何らかの力があつたのでは？」

スラナは、資料を読みながら言う。

「力？ 戦争での苛立ちによる暴力ではなく？」

「ええ……幾ら戦争で苛立っていても、個人に絞つての暴力はありません」

「もしかしたら、あのワーウルフ共が恐れる何かを……彼女は持っていたのでしょうか」

「うーん……」力「ねえ……」

ボスは、その辺を歩き回りながら口に手を置いて撫でる。

？魔王城：寝室？

「ウツ……」

ワーウルフの少女は、起き上がった。

” ココハ……ドコ？……ワタシハ……ナニ……ヲ……？ ”

彼女の頭の中が、急激に回転する。

歯車の様にグルグルと回転して止まらない……。

” ハアハア……！ アグア……！ ”

少女の息がだんだん荒くなり苦しみます……。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

少女は、突然大声で叫ぶ。

その声は、二人の耳にしっかりと入った。

「何だ！？」

「この酷い高音の雄叫び……まさか……！」

二人は、声がした方向を見る。

タッタッタッタッタッ！

裸足で床を走る音が近づいてくる。

そして、次の瞬間！

「グアアアアアアアアアアッ！！！」

入り口から助けたワーウルフの少女が、ボス目掛けて飛んできて・
・その鋭い爪でボスを切り裂こうとした！

だが、しかし・・・！

シュパアッ！！

ボスの触手達が、ワーウルフの少女の体を縛る。

「やっぱり、その触手は便利ですね。」

「ああ、こいつ等は俺の意思で動いてくれるから助かる」
「さてと……」

ボスは、縛られているワーウルフの少女に近づく。

「魔王、危険ですよ」

「大丈夫だ、問題ない。」

ワーウルフの少女は、触手を引きちぎろうと必死にもがく。

「止めておけ、余計に触手が食い込むぞ？」

その言葉どおり、動かした腕にどんどん触手が食い込んでいく……。

「グガアアアア……！！」

絞まる触手に少女は苦しむ・・・。

ボスは、ため息をつきながら自分の頭をワシワシと搔く。

「やれやれ……少しだけ緩ましてやれ」

ボスに指示された触手は、食い込んでいた腕を少しだけ緩めた。

「それで、いかが致しますか？」

「そうだな……」

ボスは、ホイスターから・45口径ハンドガンを取り出し、ワールフの口の中に銃口を突きつける。

「魔王、何ですか？ それは……？」

「何だ、お前・・・銃を知らないのか？」

「いえ、最近に人間達が扱っている武器らしいという事は知っていますが・・・」

「まさか……マスケットとかを使用してるっていうなよ？ 結構な骨董品だぜ？」

ボスは、苦笑いで聞いた。

「マスケット？」

「・・・OK、説明しよう。」

【マスクett】

性能のみ説明すれば、弾丸を撃つ為に、火薬・そして弾丸を込める為の朔仗等サクジョウを使用する。

その為、手順が長く、リロード時間がかなり長い為、ハンティング位しか使用を見られない。（多分）

しかし、方法次第では、『どんな弾丸でも』発射する事が可能。
+ 様々なサブ装備も可能。

「さて……どうする？ このまま喉に穴を開けて欲しいか？」

ボスは、さらに少女の口に銃口を押し込む。

「ウグッ……フグググ……」

少女はあまりの苦しさと恐怖に目から涙が出る。

「おつと失礼、このまま唾液を全て吐き出すまで銃口を押し込もうか？」

「それとも……ここで、降参するか？」

ボスの顔は……冷酷な笑みを浮かべていた。

少女は、その笑みを見てゾクッとか何か恐ろしいものを感じた。

スラナもボスの顔を見て寒気を感じた。

「魔王……少しやりすぎでは？」

「ん？　こうでもしないと、この子が黙らないだろ？」

「しかし……泣いてますよ……？　その子。」

「構うものか、牙を向けてきたのは……」

「こいつなんだぞ？」

ボスはスラナの方を向いて言う。

スラナは、そのボスの目を見てゾツとした。

ボスの目には、絶望、恐怖、悲しみ、トラウマ……
その全てが混ざったかのような……ドス黒い何かを……彼女は”見た”

「……………」

ボスの目を見たスラナは黙り込む。

すると……ボスは少女の口に押し込んでいた銃口を抜きとった。

「ゲホッ！　ゲホッ！」

少女は思いつきり胃液を吐き出すかの如く咳き込む。

ボスは、ズボンから布を取り出し銃を拭く

「止めだ。」

「この方法じゃあ、こいつに”取り付いた物”が取り除けん」

「……えっ？」

少女の方から、ドス黒いオーラを感じる。

スラナは、視界から離れていた少女の方を見てみると……

先ほど恐ろしい事をされたというのに尚……ボスにたてつく様に睨む。

最初は……”当然あんな事をされたら、誰でも睨んだりする。そう思っていたが、それは間違いに変わる。”

明らかに……彼女の目の色が違っていた。

そして……息も荒く、何かに苦しむかの様な呼吸だった。

「さあ〜て……こうなったら戦って、そのドス黒いのを抜っちまわないと、いけないかい？」

こうして、ボス対ワーウルフの少女との戦いが始まった。

？あとかき？

どうも〱零式です。

何か・・・展開が凄い事になったなと自分でも思いました。

ちなみに、ボスがワールフの少女の口に銃口を入れるシーンには、ブラックラグーンOP曲（Red Fracti on）が流れました。

マスキットの解説も、ブラックラグーンより頂きました。

いや〱ブラクラ最高です、面白いですよ、マジで。

さてさて、今回は前編となっていました。

何故、前編なのか・・・？

理由はただ単なる一つの答え。

『結構長くなりそうだから、部分分けした方が・・・良くな？』

・・・そういう判断で、前編後編に分けました。

はい、自分勝手にサーセン・・・。

チャットでは「今晚中に更新します」とか、言うときながら全然投稿せず・・・私、寝てました。

（本当にごめんなさい。）

そして、色々あった結果がこれだよ。

もうね……己は阿呆かと、馬鹿かと……。

まあ・・・次回からは、こんな事がしょっちゅうありますので、ご注意ください。

（更新速度もかなり遅くなるかもしれませんのでご了承ください。）

それでは・・・。

？前回までのあらすじ？

ワーウルフの少女を救出したボスであったが、何故彼女が同族達に虐められていたのか・・・

その原因を考えていた最中、ワーウルフの少女が目覚める。

しかし・・・少女の頭の中には、ドス黒い闇がグルグルと彼女を蝕んでいた・・・。

そして、暴走してしまう少女・・・

少女は、ボスに襲い掛かるも、ボスの触手達により体を縛られる。

そして、ボスは・45口径ハンドガンの銃口を少女の口に押し込む。

一瞬、動揺してしまうスラナ。

だが・・・それには、ちゃんとした意味があった。

少女の体から放たれるドス黒い闇のオーラ。

そして、ボス対ワーウルフの少女との戦いが幕を開ける！

？登場人物？

・ボス：人間をやめ、人外存在となったボスは…とても恐ろしい。

・スラナ：今回は…ただ棒立ちしするだけの立場となる。

・ワーウルフの少女：ドス黒い闇に取り付かれてしまった少女。(

多分同族達に嫌われた原因はこれ。）

？舞台？

【魔王城：王座】

広い部屋。

そこでは沢山の魔族達が集まり話をする事ができ、魔王が何時も居る場所でもある。

戦いの場としては良好な場所であり、派手に暴れても大丈夫。

第四話：『Wolf Fang V・S Wolf Cl

a w （狼の牙 V・S 狼の爪） 後編』

第四話：「Wolf Fang V.S Wolf Claw（狼の牙V.S

~~~~~？魔王城？~~~~~

「さっさと来い、俺を喰らいたいんだろ？」

ボスは、黒い何かが憑いているワーウルフの少女を挑発する様に手をクイクイとする。

「フー……！ フー……！ グアアアアアアア……！」

少女は、その鋭い牙でボスの喉に噛み付こうとした。

しかし……やはりボスは甘くない。

サッ……と、見事に攻撃をかわし、腹部にパンチを一発当てる。

「グッ……ガッ……！」

幾ら力を付けていようが、体は子供……

パンチ一発でも、相当なダメージが入る。

ボスは少女に向かって指をチツチツ……と振る。

「グアウッ……！」

それでも少女は、ボスに向かって立ち向かう。

今度は、鋭い爪で引っかこうとした。

シュルルルルルル！！

だが……やっぱり、それも無駄だった。

爪で攻撃しようならば、ボスの腕に付いている触手達はその勢いを殺し、少女の体を捕らえてしまうからだ。

「残念でした〜？」

ボスは、再び腹部にパンチを与える。

「……………」

ボスと少女の戦いを見ていたスラナはボスの戦い方に不振に思った。

（何故だ・・・？ 何故、魔王は あの子の腹部しか攻撃しない？  
しかも、弱いパンチで……）

確かに……先ほどから、ボスは何度か少女の攻撃をかわしたり、  
防御するなどして有利な状況へ持っていつていると言っているのに対して  
……

全然、少女へ大きな攻撃をせず・・・ただ腹部だけを攻撃し続けている。

（幾ら子供だからって、あんな弱いパンチでは気絶しない上に逆に  
長期戦になってしまう……）



スラナは、ハッ！ と、何かに気がついた。

（まさか……！ 魔王は、それを狙って……！？）

スラナが、そう考えている最中。

ボスとワーウルフの少女の戦いは、ボスが一方的に有利な状況が続いていた。

少女は、あ後に幾度となく攻撃を繰り返すが……どちらも防御が避けられてしまい、腹部に攻撃を食らってしまう。

その為、だんだん疲労が溜まっており、息がさらに荒くなっていた・・・。

そう……ボスは、彼女が疲労で動けなくなるのを狙っていたのだ！

腹部へ軽いパンチを続けていたのは、

彼女のスタミナをなるべく減らし・・・尚且つ彼女へのダメージを避ける為だったのだ。

「おいおい、どうしたよ？ もう終わりかい？」

その言葉を耳にした少女は、ボスを睨みつけ……もう一度攻撃を仕掛ける。

「ハァ……狼ってーのは、頭が良い生物だと聞いていたが……」

ワーウルフの爪がボスの肩の寸前まで迫る……！

ドスッ！！

しかし、到達する前にボスの素早いストレートパンチが少女の腹部に直撃する！

ストレートパンチを食らった少女は、胃液を吐きそうな咳をして後ろに下がる・・・。

「こうも同じ事を繰り返す生き物だとはな・・・」

ボスは、手をパンパンと叩く（ハタク）

「もう少しさ・・・学習しないか？ 普通。」

その言葉が少女の怒りの頂点へと達させた。

「オオオオオオオオオオッ！！！」

少女は大きな雄たけびを上げ、さっきと違う目でボスを睨む。

「へえ・・・そういう目も出来るのか・・・ちよつと意外。」

「まあ、それは」その少女のじゃなくて・・・後ろに居る”あなたの物”だね。」

スラナは・・・ボスが言った その言葉を聞き逃さなかった。

「”あんた”・・・って事は、その少女は・・・？」

「ああ、”後ろに居る奴”・・・俺が以前倒した”寅午の残骸の欠片”だよ。」

「トラ・・・ウマ・・・？」

「俺が前に居た世界」に存在した悪魔さ……人の心に深い闇の傷を刻み込む。」

「俺も……その被害者の一人って訳さ」

「それで……その悪魔は？」

「殺したよ。俺と……もう一人の被害者と共にね」

「でも、残骸は……色々と残ってしまったらしいな。」

「それが……彼女の背後にいる……。」

「そう、本来の力は失っているが……取り付いた相手を狂暴化させる事が出来る様だな」

「ウウウウウ……アア……アアアアッ!!」

少女の体に黒いモノが侵食していくように蝕んでいく……。

「さて……そろそろケリを付けないと、取り付かれましたったこの子が危ないからな……」

「なるべく傷つける事無く、追い出すつもりだったが……」

「まあ、しゃあないよな？」

ボスの触手達が一つへ集まり、一本の刀が出来る……。

「某片翼の天使みたいに上手く振舞えないが……まあ、お相手願

う。」

”人間解除。人外に移行。”

ボスの頭の中で女性の声のようなモノが聞こえた。

ゴウウウウウ・・・！

ボスの周囲に強風と衝撃が吹き現れる。

「さて……判定の結果、お前は弱いと判明した。」

「よって、あんたの負けだよ。」

ドンッ！

ボスは一瞬で、その場から消え・・・少女の目の前に現れた！

しかも……その腕は刀を振り上げていた。

危険を察知した少女は素早く避けるように逃げる。

だが、しかし……！

「ストロイぞ？」

何と・・・！ 逃げた方向には、居るはずの無いボスの姿が・・・！？

ズバン！！

ワールフの少女は、ボスの放った斬撃により吹き飛んでしまう。

だが、その肉体は切られておらず……ただ刀に殴られたようだった。

「グガッ……！？」

トスッ……

吹き飛び、転がる少女の体に何かが当たる。

少女は、おそろおそろ見上げると……

そこには……血の様に赤く、天井の照明で不気味な程に黒く見えるボスの姿が……。

その姿を見てしまった少女はガタガタと震えながら後ろへと下がる。

トスッ……

再び……少女の背中に何かが当たる。

見てみると……

先ほど見た、赤い目と不気味な影が目映った。

「ヒィ…………！」

「…………臆したな？」

ニヤリッ…………

その影は……不気味な笑みを浮かべ、半透明に輝く刀を振り上げ…………

少女を斬った。

辺りは、静寂に包まれた。

スラナは戦いが終わったのを確認し、ボスの傍へと近づく

その足はガクガク震えていた。

「魔、魔王…………。」

「魔王言うな。…………何だ？」

「その子は…………彼女は、死んだのですか？」

「いいや、殺したのは後ろにいる残骸だ。実際には、この子は斬ってない」

「ほら、血が出てないだろ。」

「…………えっ？」

確かに……ボスの言つとおり、少女の体からは血が一滴も出ていなかった。

「ダチに………すげえ剣術の達人が居てな、そいつから教えてもらった技なんだ。」

”殺さずの斬”

その技は、刀の刃で斬つたというのに……相手の肉を切らず、その中にある何かを斬るという技である。

「まあ、名前なんかどうでもいいけど………」

「この技は便利だね、この子みたいに何かに取り付いた敵が現れたら、この技が一番効く」

「では………最初の一撃は………」

「ああ………あれは一撃で決めようとしたけど、失敗した例。」

「この技は色々と使いづらくてね………まあ、傷つける事はないが………たまに風圧で吹き飛ぶ事がある。」

「成る程………それで………」

「さて、幾ら寅午の残骸の欠片を消す為とはいえ、この子に傷をつけたのは事実だしな………」

「ちよつと面倒見てくるわ」

そっぴい倒れてゐる少女の体を背負う。

「はい。では・・・私は、戦闘後の処理を行います。」

ボスは、少女を寝かした寢室へと運ぶ。

~~~~~？魔王城：寢室？~~~~~

「う……う……」

「おっ、起きたか？」

「うわぁ！だ、誰！？」

「おいおい……」

（やっぱり……取り付かれていた記憶が無いな。）

「初対面の奴に、そんな態度は宜しくないぞ？」

「あつ……ご、ごめんなさい……」

ワウルフの少女は、しょんぼりとなる。

「ああ……良いって、そんなに落ち込まなくて……それより腹減ってないか？」

グ……

ちょうど良いタイミングで、お腹が鳴る。

「そ、そういえば・・・何も食べてない……………」

少女の頬が赤くなる。

「だろうと思って作つといた、食べな。」

ボスは、少女の前に食事を出す。

「わぁ！　ありがとうございます！」

「おっと！　その前に……………」

「な……………なんですか？」

「一つお願い事があるんだがね……………」

「はい！　何でもどうぞ！」

「じゃあ、単刀直入に言おう。」

「俺の仲間になってくれないか？」

「ほえ？」

ボスは、事情と自分が二代目魔王という事を伝えた。

「すみませんでした！ 魔王様とはつい知らず……」

ワーウルフの少女は、必死に謝る。

「ああ……良いって、俺も好きで魔王になったんじゃないし……」

（そもそも……何で、俺なんかが魔王に……）

ボスは、しみじみと前までの記憶を思い出す。

「どうしました？」

「いや、なんでもない。」

「それで、どうする？ 仲間になってくれるかい？」

「勿論！ どこまでも、ついて行きます！」

「よしっ！ それじゃあ、飯食って体力と元気を付けな！」

「はいッ！」

スラナは笑顔の二人を見て微笑みながら、その場を後にした……。

第四話：「Wolf Fang V.S Wolf Claw」(狼の牙V.S

？あとかき？

はい、どうも！

猫又Master feat. JESSYの「The Smile of You」(English ver.)」を聞きながら書いてると…

異様に最終回の感覚に陥った零式です。

いや〜・・・いいね、猫又さんは……最高。

さて、今回ですが……

ボスが、こええええええええ！！

後、寅午とは、プライベートで考えた作品のラスボスです。
(後々過去編に詳しく(?)紹介。)

かるーく、キャラ設定の説明を……。

【寅午】(トラウマ)

性別：不明

年齢：不詳

能力：全ての者の心に一生の恐怖トラウマを与える。

特徴：スーツ姿で、赤黒い髪と黒い目、いつも狐の様にニタニタしている

備考：全ての恐怖トラウマ。

その出現の原因は不明。

人間達の文明の発達と同時に生まれた者と思われる。

その行動は一切不明で、生き物という生き物を無差別に攻撃する。

神までもが頭を悩まされ、恐怖に侵食されてしまう。

しかし、数ヶ月前にボスと神を超えし者”アルカード”により完全に消滅する。

だが……しかし、今回の事件と共に……まだ残党が残っていたのは事実である。

放っておくと再生し、完全復活を遂げる可能性が高い。

一刻も早い抹消が望ましいだろう……。

こんな感じ。

お察しの良い方なら分かりますよね、うん。

まあ、ストーリーはまだまだ続きますので、首を長くしてお待ちください。

最後におまけを収録してみた。

？おまけ？

ボス「そつえば……君の名前は何だ？」

ウル「ウルって言います」

ボス「そうか、ん？」

（どうかで聞いた事がある名前の様な・・・）

ウル「どうしました？」

ボス「ん？ 何でもない！」

終わり～\デデーンノ

（あっ！それとお気に入り登録して頂いた方々本当にありがとうございます！）

評価等もお待ちしてま～す！

第五話：「戦場の境界」（前書き）

？前回までのあらすじ？

ワーウルフの少女「ウル」との戦闘で、ボスは少女の背後に居る奴の正体を見分ける。

その正体は、以前ボスとアルカードという神を超えし者と共に倒した筈の敵「寅午^{トラウマ}」だった・・・

ボスは、何とかウルに取り付いた寅午^{トラウマ}を追い払う為に、ウルを軽く何度が攻撃した。

しかし、そこはやはり子供。ウルは、幾つか傷ついてしまう。

何とか背後に憑いていた「寅午^{トラウマ}の残骸」を消し去り、元に戻す事に成功したボス。

だが、ウルを傷つけた事を反省し、彼女を寝室へと運ぶ。

その後、目覚めたウルは、すぐ横に居たボスに驚く。

ボスは、事情と自分が魔王という事を話す。

そして、ウルに仲間になってもらう為に頼み込む。

あっさりOKを貰い、新しくワーウルフの少女「ウル」が仲間になった。

？登場人物？

・ボス：二代目魔王。本気にさせると・・・すごく怖い。

・スラナ：前は、全然出番が無かったが、今回は・・・？

・ウル：ワーウルフの少女。” 寅午^{トラウマ}の残骸の欠片” に取り付かれていた所をボスに救ってもらった。

？舞台？

【戦場の境界】

今回は、さらに仲間を集める為・・・” 戦場の境界” に向かう。

今も人間と魔族のいがみ合いが続く中、戦場の境界では・・・一日に一回は人間達が攻めてくる。

多分、今回の敵は人間達となるだろう……。

・・・第五話：『戦場の境界』

第五話：「戦場の境界」

~~~~~？魔王城？~~~~~

ボスは考えていた。

「うん……。」

「どうしましたか？ 魔王。」

そこに、スラナが声をかけてくる。

「いやな……幾ら仲間を一人追加しても警備が一人じゃな……っ  
と思つてな。」

「まあ、正直な事を言いますと……ウルさんの場合、家の留守番  
をする子供みたいな感じですね。」

「それでな、もう一人追加したいと思うのよ」

「では、名簿<sup>リスト</sup>を……」

そう言いながら、スラナは鞆から名簿<sup>リスト</sup>を取り出そうとする……。

「あゝ……今回は、名簿<sup>リスト</sup>無しで構わない」

ボスは、<sup>ストップ</sup>Stopを掛ける。

「何故です？何か当てでも？」



「ああ、”戦場の境界”に行くぞ」

「……えっ？」

「だから、”戦場の境界”にだな……」

「危険すぎます。」

「……何で？」

「良いですか？ あそこは人間と魔族が日々戦っている場所、戦場ですよ？」

「そこに魔王である貴方が行ってみなさい、人間達の良い的ですよ」

「そこまで言わんでも……」

「事実です。」

「Coolだね……」

「でも、行くとしたら行くからね。」

「いや、駄目ですって」

「というか……何で危険を冒してまで戦場の境界に向かうのですか？」

「んっ？ 以前、お前が男達は皆、戦場の境界に向かったって言うたろ？」

「はい……それが何か？」

「だーかーらー！ 幾ら人数増やしても女だけじゃ警備が困難でしょうが！」

「大丈夫ですよ、女性でも警備は出来ます。」

「さらつと言うが……今、家に居るのはウルだけなんだぞ？」

「うつ……確かに……」

「ウルだけじゃあ、心配でしょうが」

「確かに……正論ですね。」

「それに、14の女の子を城に置いときなさいよ」

「変な輩が現れて、あんな事やこんな……」

「魔王。それ以上は、いけない。」

スラナは、渋い顔で首を横に振る。

「まあ……考えてみれば、ウルさん一人置いとくのも心配ですね・  
」

「だろ？」

「解りました……今回は許可します。」

「但し、無茶な行動は控えてくださいよ？」

「分かってるって。仲間GETしたら、さっさとトンスラするよ」

そして、二人は出発しようとした……。

だが……

「待ってくださいーい！」

後ろから、ウルがやってくる。

「ウル？」

ウルはボス達に追いつき、息を切らす。

「僕も……行かせてくださいッ！」

「えっ？」

「僕も付いていきますー！」

「いや……でもな……」

「ウルさん。貴方には、ここの留守をする仕事があるでしょう？」

「やだッ！ 魔王様と一緒にいきたいですー！」

「あのですね……」

スラナは、ため息をつきながら説得しようとした。

「まあまあ……スラナ。ウルは、まだ女の子だ……」

「一人寂しく留守番させるのは……可哀想だろ？」

「しかし……」

「大丈夫！ いざとなれば俺が二人を守るからさ！」

その言葉に、スラナの頬が少し赤く染まった。

「し、仕方ありませんね……今回だけですよ？」

「やったー！ー！」

ウルは喜んだ。

（やれやれ……私もまだまだ甘いのでしょうかね……）

三人は、戦場の境界へと向かった。

~~~~~？戦場の境界？~~~~~

三人は、戦場の境界へと辿り着いた。

そこでは、傷ついた魔族も居れば、次の戦闘に備えて準備する魔族も居た。

「す、凄い所ですね……。」

ウルは、その光景に少し戸惑う。

「まあ、戦場つてもんだから、これが普通なのさ」

「魔王、この中で誰を選ぶのですか？」

スラナが、肝心なる質問する。

「そうだな……重傷者は流石に無理だからな……」

ボスは、考えながら周りを見る。

そこに……

「貴方……もしや……二代目魔王では、ありませんか？」

一人の男がボス達に近寄り、声を掛けてくる。

「ん？ そうだが……あんたは？」

ビシッ！！

兵士は敬礼をする。

「はっ！ タイジンゾクコウゲキ 対人族攻撃部隊隊長、ブタイタイチヨウ イグナス・クリナであります！」

「種族は？」

「エルフであります！」

「ふむ……武器^{エモ}は？」

「人間から奪った銃という武器と剣、弓であります！」

「つーことは……剣術には自身あり？」

「はい！ ですが、魔王様には及びません！」

「お褒めの言葉ありがとう。それで、銃の腕は？」

「弓とは大分扱いが違いますが……命中力には自身があります！」

「ふむふむ……エルフってんだから、魔法は当然……？」

「お恥ずかしいながら、治療魔法しか使えません！」

「よし、採用。」

「はっ？ ……っと言いますと？」

「君、俺の城で警備をしてくれないか？」

「け……警備ですか？」

「今、城には警備が一人しか居なくな……」

ボスが言っている最中、後ろでウルがこっそりとクリナに向かって手を振る。

「もう少し警備が欲しいから、君にその警備を頼みたいって訳だ。」

「で、ですが……こちらの方が・・・」

「ああ……君って、確か隊長さんだったね・・・。」

「はい。ですから、今回の件は……」

「人間達が攻めてくるのは、いつ頃だ？」

突然、ボスが質問してくる。

「えっ？ えっ……と……あっ！ まもなくです！」

クリナの発言に魔族達が一斉に戦闘態勢に急ぐ。

「そうか、それは好都合だな。」

「は、はい？」

「なあ……もし、俺が攻めてきた人間達を全員根絶やしにする事が出来たら……」

「警備の仕事、考えてくれるかな？」

それを聞いた魔族達は、ざわめく……。
当然、ボスの発言にクリナは驚いていた。

そこへスラナが割って入ってくる。

「ちょっと待ってください！」

「魔王、無茶な行動は控えるようにと……」

スラナが最後まで言いかける、その時であった。

「……分かりました。」

突然、クリナから警備の仕事に許可を出す。

「もし……魔王様が人間達を全て倒せたら考えましょう……」

その言葉を聞いたボスは、口をニやつかせてクリナと握手する。

「交渉成立だな。」

「人間軍、接近ッ！！！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ……

遠くから、馬の走る音と共に人間達の唸り声が聞こえる。

「魔王様……」

ウルは、心配そうな顔でボスを見る。

それを見たボスは、ウルの頭を撫でる。

「大丈夫だよ。それに……言っただろ？」
”二人を守る”って」

そして……ボスは、人間軍がやってくる戦場へと足を踏み入れた。

仁王立ちで、地面にしっかりと立つボス。

「止まれええええい！！！」

人間達の動きが止まる。

「貴様……！ 何者だ！！！」

「何故、人間がここに居る！！！」

人間軍の將軍らしき人物の後ろに居た兵士達がざわめく……。

「おいおい……俺が人質に見えるか？ 見えたなら、あんた盲目ですだよ」

「はっ？」

ヒュッ……スパアアアアン……！！

次の瞬間、背後に居た数百の兵士達の首が一気に跳んだ。

「なっ……！！？」

人間軍の將軍は驚いた……。

無論、その光景を見ていた魔族達も驚いていた。

） 人間軍……残り人数：50名 ）

「き、貴様アアア……！！ 魔族の者がアアア……！！！」

人間軍の将軍は剣を抜き、ボスを切ろうとした。

だが、しかし……。

ポトツ

ブシャアアア……

剣を振り上げた腕が一瞬で切断され……腕から大量の血が吹き出してくる。

「あつ……あれえええ……！！？ おかしいなああ……！！？
何でえええ……！！？」

将軍は、あまりの衝撃に精神がおかしくなってしまい、人格が壊れてしまった……。

” Better run through the jungle
Better run through the jungle

e”

ck to see”
” W a w , d o n ' t l o o k b a

” 密林を突っ切れ 密林を突っ走るんだ おうよ 決して振り返る
なよ”

ピピピ・・・ボトボトボト・・・

そして・・・次の瞬間には、將軍の身体はバラバラに切り刻まれ、
地面に無残に散らばる。

「ば……………化け物だ……………」

兵士達の顔は一気に青ざめ・・・ビクビクとおびえる。

” T h o u g h t I h e a r d a r u m b l i n '
C a l l i n ' t o m y n e m e ”

” 大地が鳴動し 俺の名を呼ぶ声がした”

” 2 0 0 m i l l i o n g u n s l o a d e d
S a t a n c r i e s ”

” 2億もの銃に弾丸が装填され 悪魔がこう叫んだのさ”

「何故、たてつくか…… お前達は思っよな？」
「なら、答えをお前達に教えてやろう。」

” T a k e a i m ! ”

構え、撃て！

” 「お前達が、この地に足を踏み入れたから」 それが答えだ。
”

人間を辞め…… 人外存在と変わったボスは、一気に勝負に出た。
人外となったボスの動きは、普通の人間では絶対に不可能な速度で
動き……
そのまま、兵士達の全身にピアノ線上の触手を巻きつける。

巻きついた部分は、首、腕、足、腹…… つと、色々な部分に巻きつ
けた。

「や、止める！ 頼む、止めてくれ……！」
「俺達人間を…… 裏切るつもりなのか！？ お前は……！」

兵士達の必死で無駄な説得が始まる。

だが……当然。

「悪いのは、勝手にこの地に入ってきたお前達だろ？ それじゃあ。」

ボスが少し動いただけで、全ての人間達の体は……バラバラに無残にバラされて散った。

さすがに、その光景には魔族の者達も引いた。中には、あまりのグロさに吐いてしまっている者もいた。

ボスは、クリナの下へと戻る。

「さてつと……クリナ君……だったな。俺の勝ちだ、警備の仕事……引き受けてくれるよね？」

「……分かりました、私の負けです。」

「そうか、なら……」

パチンツ！

突然、ボスは指を鳴らした。

すると、なんとということだろうか！ 先ほどの血の海となっていた大地は、何時もの荒地となり……
バラバラになって解体されて死んだ筈の人間達が元通りになって、
気絶して倒れていたのだ。

「……これは!？」

「あっあゝ……スマン……悪かったな、今は全て幻影、幻の
さ」

「ここに居る全員に掛かるように仕掛けた。」

「じゃ……じゃあ、人間軍の奴らは……」

「もち、生きてるぜ。」

「まあ……一生背負う事になる”トラウマ”を背負っちゃったと思
うけどな……」

「全部……幻影……」

「ま、魔王!」

一部始終を見ていたスラナが、声を掛けてきた。

「ん? 何だ、スラナ」

「何時から……そのような能力を隠し持っていたのですか?」

「隠していた訳じゃないさ」

「何となく、出来るかなってやってみたら、出来たちゃっただけ
さ」

「な、何となく……?」

「というか……魔王補正?」

「……にしては、都合が良すぎるのでは?」

「さあね」 出来ちゃったんだから、細かい事は気にしたらあかんでしょ?」

キラッ

ボスが付けている黒龍の形をしたペンダントが一瞬だけ黒く輝いた。

(ん・・・? 今のは……)

クリナは、一瞬だけ放たれた光を見ていた。

鈍く黒く光った黒龍のペンダント……。

「魔王様……。」

クリナは、ボスの前に膝をつけ頭を下げる。

「よろしく……お願いしますッ!」

「ああ……そんなに硬くしないで良いから、リラックスリラックス……。」

「ですが……魔王、彼は隊長ですよ? 彼が抜けてしまうと今後においての現場の指揮が……。」

そこへスラナが一番の問題を質問してくる。

「ああ、その点は大丈夫だ。」

「この現場の副隊長には、悪いが隊長へ昇格。そして副隊長は、一番実力のある者を副隊長に任命する。」

「詳しい手順は、そちらに任せるよ」

「「「はっ！」」」

一同は、敬礼をする。

「まあ、さっきの事をやってのけたんだ、暫らくの間は、相手側は警戒して攻めてこなくなるだろう」

「さて・・・それじゃあ！ 城に帰るとしますか！」

「了解しました。」

「はーい！」

「分かりました。」

「「「一同！魔王様に敬礼ッ！」」」

ビシッ！

魔族達は、ボス達に敬礼をする。

ボスは、それに答えるように敬礼し返した。

こうして、新しい仲間「イグナス・クリナ」を引き連れたボス達は、城へと戻っていった。

第五話：「戦場の境界」（後書き）

？あとかき？

Yes・どうも、零式です。

今回も、ブラクラネタが炸裂しました。

そして、グロい！

自分の頭を疑います。

さてさて、新キャラの「イグナス・クリナ」（以降は、クリナ）ですが・・・

何故、男性キャラを導入したか・・・

それについての解答。

「花ばかりだとなあ・・・どっかのギャルゲーと間違えられるんだよおお！！！」

ああ、それと・・・あんなグロシーンで、ウルは大丈夫だったのかというと・・・

実は、ウルちゃんには幻影は見えてません。

でも、それを知らないスラナに目を塞がれて、見えなかったというね・・・。

さて、次回も新キャラの登場です。

それでは、次回もお楽しみに！

第六話：「人間の悪が詰まった街」（前書き）

？前回までのあらすじ？

まだ、警備が少ないと思ったボスは、魔族と人間達が戦う戦場「戦場の境界」に足を踏み入れる。

そこで出会った一人のエルフ『イグナス・クリナ』を仲間採用する。

だが、一つ問題があり、彼は攻撃部隊の隊長だった。

悩んでいるボスに人間軍が攻めてきたとの情報を入手した。

それで、ボスがクリナに言った事は……

「もし、攻めてきた人間達を根絶やしにしたら仲間になってくれ」

それには、全員が驚いた。

そして、人間軍が攻めてきた。

一人仁王立ちで、道を阻んだボスは、その圧倒的強さで人間達を倒した……かに思えた。

しかし、それはボスの幻影であり、人間達は気絶していただけた。た。

それを結末を知ったクリナは、自分から仲間になると申し立てた。

新たなる仲間「クリナ」を手にしたボス達は、城へと戻っていった。

そして……次に取ったボスの行動とは……？

？登場人物？

・ボス：二代目魔王。魔王の力を持ち、色々な魔法とかを使う事が出来る様になった。

・スラナ：魔王秘書。今回は途中とラストしか出番が無いかもしれない……

・ウル：ワーウルフ。現在、魔王城の警備の仕事を任されている。

・クリナ：元攻撃部隊長。剣、弓矢、銃に関しては一流の腕前。

？舞台？

【ニンスク街】

魔族から奪った土地に人間達が暮らす街。

その治安は最悪で、盗難や殺人も当たり前。

奴隷商人も沢山おり、毎日奴隷達が売られている。

まさに、人間の黒い部分が凝縮された街である。

……第六話：『人間の悪が詰まった街』

第六話：「人間の悪が詰まった街」

~~~~~？ニンスク街？~~~~~

どうも、皆さん。 二代目魔王に”された”ボスです。

今回は、人間達の暮らす街 『ニンスク』 という所にやってきました。

決して偵察とか、そういう物ではありません。

ただ単に……買い物です。

家の城に沢山あるのにはあるのですが……

何で、全部の食べ物が缶詰なんだ……

確かに缶詰は美味しいですよ？ それでもね……

何故か魚好きのウルが 『もつと魚を食べたい』 と申してたのでね……

まあ……そんな訳で、わざわざ人間の領域に足を踏み入れたって事です。

でも、さすがに姿を晒すと後が不味いので、コスチュームを変えて

きました。

アサシンコスチュームです。

まあ・・・ファンタジーの世界ですし、道行く人達は平然と似た様な格好してるし……

結果オーライ！……てな感じです。

さて・・・買い物するか……

（ボスは、段々と買い物をした。）

はい。一通りはカットです。

えっ？ 動画じゃないんだから、そこはダイジェストでやれ？

HAHAHA！これをダイジェストでやると、零式（up主）の頭がパン！ですよ。

（資料も無いしね。）

まあ、説明すれば……

？・「果物を買うに行くが、途中で強盗を発見。さっさと解決させた。」

？・「何とか、果物を調達。」

？・「続いて、肉・・・と思ったが、よく見ると魔族の肉ばかり売ってやがる・・・だからキャンセル。」

？・「仕方なく、魚を調達しに行く。」

？・「お魚に食わえたドラ猫を鉈を持って裸足で全力疾走して追いかける魚屋を発見。」

（とりあえず、無視な方向で・・・）

？・「代わりの店番の人が居たので、無事に魚を調達できた。」

こんな流れでした。

（あの後、魚屋の店主は どうなったんだ？）

治安は悪いせいか、どれも値段が安かった件について・・・。

（変なのは入ってないだろうな・・・）

まあ、とりあえずはこれで良し……後は帰るだけだが、それでは面白くない。

つーわけで、街中を回ってみる事にしましょう。

（ボスは、街中を歩き回った。）

うん、特に無し。

ギルドには若い人が居るかと思いきや、おっさんばかりのガチムチ状態。

違う！ 私が知っているギルドとは、限りなく違う！

しかし・・・今気づいたが、子供の姿が一度も見えない……

何故だ？

（ボスは、考えた。）

うーん……街……ギルド……治安が悪い………奴隷！

成る程……これは酷い。

今、考えてみたが……城の警備として新しく配属させたクリナ君が居るが……

丁度良い、奴隷達を解放するついでに奴隷達を仲間にしよう。

この街に居ると、また奴隷にされかねないと思うだろうから、きっと仲間になってくれるだろう。

（そう思い、ボスは奴隷達が売られているバザーへと向かった。）



~~~~~?バザー?~~~~~

・・・ここでは、捕まえた人間を奴隷として売り、
買われた者は、娯楽の駒や、そのまま奴隷として家畜のように扱わ
れる。

「さて……そんな、腐ったバザーにやってきた私ですが……」

（誰もいねえ……!）

「あつれ〜? おっかしいぞ〜?」

ボスは腕を組み、首をかしげる……。

（おかしいな〜・・・戦争の影響か?）

そう思いながらバザー内に入り、奴隷達を収納しておく檻の中を隈
なく探し回る。

カタッ……………

「ん?」

部屋の奥から物音がする……。

「まさか……ここの奴隷商人か?」

ボスは・45口径ハンドガンを取り出し、ゆつくりと部屋の奥へと向かう。

「この奥だな……」

ボスは、三秒ほど心の中で数え、暖簾ノレンを捲り部屋に入る。

そこは真つ暗闇で……その中に微かに光る緑と青の瞳の色が見えた。

（まさか、獣じゃないだろうな……）

ボスは携帯していたライトを付け、その姿を確認した。

何と……！そこに居たのは、まだ10歳になったであろう少女が座り込んでいた。

その姿は……酷く痩せており、以前に見たウルと同様に酷かった。

「……………ア……………ウ……………」

少女の声は……声と認識出来ない程に薄く、小さい声を出した……。

ボスは銃をホルスターにしまい、檻に近づく

（ひでえ……………こんな小さな女の子を、ここまでさせるなんて……………）

ガキイン！

ボスは前回同様に触手を鎌の形に固めて、鍵を破壊した。

そして、檻の中から少女を取り出し抱きかかえる。

「大丈夫……じゃないよな……」

その体は、とても軽く・・・小銭が溜まった財布を持ち上げる程度の軽さだった。

（寅午の気配無し……狂気になる事は無いか……）

「ウ……………ア…………？」

少女は、何やら話しかけているようだ……。

「安心しろ。俺はお前の……そうだな、王子様みたいな者だ。」

（兎に角……早くここから出ないと……）

ボスは、少女を抱えて外に出ようとした。

「おっと！ 待ちな！」

暖簾ノレンを捲った先には、ここの店主であろう奴隷商人が立っていた。

「おっとお…………？ 帰ってきちまったか……タイミングが良い事」

「お客さん……そいつは、私のお気に入りだねえ……売り物じ

やねえんですぜ。」

「ほう・・・非売品って奴か？」

「そういうことですわ、大人しくそいつを渡せば見逃して……」

「じゃあ、あんたを殺しても奪い取る。」

「・・・はっ？」

ドゴオオオオオン！！！！

店から衝撃音と共に、奴隷商人が吹き飛んで出てきた。

しかし、奴隷職人は壁に着地するように張り付く

「ちい……！！ 一体なんだってんだ！？ あの野郎・・・！！」

ザッ……

ボスは、少女を抱えながら出てくる。

「さあ、お前の罪を数えてみな。 まあ……数え切れないと思うがね」

奴隷商人は地面に足を踏み入れ、ナイフを取り出した。

「上等だ・・・ぶつ殺してやる!!!」

「ほう、ナイフとな・・・」

「俺のナイフで、お前の顔をズタズタにしてやる!」

「良いだろう、こっちも同じ土俵と行こうじゃないか・・・」

ボスは、少女を安全な場所に ゆっくりと置き・・・
触手を一つに集めさせ、ナイフを作り上げた。

「な・・・なんだと・・・!? お前、何なんだ! その腕は!?!」

奴隷商人は、ボスが今さっき やった事に驚いた。

当然である。

誰もできないことを、ボスは平然とやってのけたのだから・・・。

「事情により、口外は禁止しているのでね。」

「知りたきゃ自分で理解しな。」

「この・・・化け物めがああああー!!!」

奴隷商人はナイフを突き刺すようにボスに向けて攻撃した。

しかし、ボスは触手で形成したナイフを使って防御した。

「突きが甘いね。 もう少しマシな突きで来てくれよ。」

「は、速エエ……！」

奴隷商人は・・・またもや驚かされた。

自分がナイフで攻撃する時間、ボスがナイフで防御する時間。それ全てにおいて、ボスが防御する方が早かった。

「どうした？ 攻撃する気が無くなったか？」

「それなら・・・」

ダッ・・・！

ボスは、奴隷商人の懐へ一気に距離を積めた……！

「突きつてーのは・・・」

ドスッ！

奴隷商人の腹部にナイフがズブリッ！・・・と、突き刺さる。

「がはっ・・・！」

「まだまだ・・・」

素早くナイフを抜き取り・・・奴隷商人の顔面に届くほどの蹴りを食らわす！

「あがああああー！！！！！」

奴隷商人は、あまりの激しい痛みにもがき苦しんでいた。

腹部からは血がじんわりと出て、鼻からも血が出ていた・・・。

「それが、そこに居る子の痛みの一部だ。」

「少しは、あの子の痛みを感じたか？」

「ギギギギ……！ この……！」

痛みに耐えながらも、奴隷商人は立ち上がる・・・

「何だ？ まだ感じたいのか？ あんたも物好きだな。」

「死ねやあああー！ー！ー！」

奴隷商人は、そのまま跳んだ。

その両手にはナイフを握り締めており、ボスに向かって振り下ろそうとした。

だが、振り下ろした先にはボスの姿が既に無かった・・・。

「遅い。」

ボスは、ナイフを握っていない腕で奴隷商人の顔面を殴りつけた。

「ぐはっ・・・！」

「お前、遅すぎ。」

そのままアゴを蹴り上げ、かかと落として一時浮いた奴隷商人の体

を地面に叩きつける。

ミシミシ・・・と締まる音が聞こえる。

「あががが……」

奴隷商人の口から血が出ていた。

「おい、どうしたよ？ 俺の顔面をズタズタにするんじゃないのか？」

さらにボスは、腹部を踏みつけている足に体重をかける。

「も……ゆる……」

奴隷商人の苦痛な嘆きが聞こえる。

「ああ？ 何だって？ 聞こえんな。」

さらに足に体重をかけ、踏みにじった。

「ぎゃああああ……！」

ボスは、笑っていたが・・・目だけは笑っていなかった。

「お前、何人ほど捕まえて売った？」

ガスッ！

強く踏みつける。

「何人悲しませた？」

ガスッ！

さらに強く踏みつける。

「おい、言えよ。」

ガスッ！

もう一度踏みつけた……その時であつた……。

「……ア………ウウ………」

少女は、細い足でゆっくり歩いたのだろうか……。
ボスに近づいて、服を握り締める。

ボスは、それを見た瞬間……
自分の中にあつた何かを思い出した。

自分のことを愛してくれた大切な者。
今でも愛してくれる者のことを……。

ボスの顔が元の優しい顔に戻る。

「……すまない、こんなモノ見せて………」

少女は首を振る。

「……早く帰らないとな・・・皆の……所へ・・・」

ボスは、少女を優しく抱きかかえ・・・城へと帰っていった。

~~~~~? 魔王城：王座？~~~~~

「うっ・・・」

ウルは、そわそわしていた。

「落ち着いてください、ウルさん。」

「そうですって」

スラナとクリナは、そわそわしてる　ウルをなんとか落ち着かせようとした。

「でも・・・」

ウルは、しょんぼりとなる。

「ハア……一体、どこに行っ たんでしょうね……魔王様は……」

クリナは、ため息をつきながらスラナに話しかける。

「本当に……一体どこへ行っ てしまわれたのだろうか……」

「おーい、帰ったぞーい！」

そこへ・・・少女を抱えたボスが帰ってきた。

「魔……」

スラナが言いかけた、その時であった。

スッ……

ウルは、素早い動きでボスに抱きついた。

「魔王様~~~~~!!!!」

「わーいー！ ウルちゃん、速えええーいー！！」

「まったく、魔王様！ どこに行かれていたのですか!？」

「まったくですよ。 ……それよりも、その子は・・・？」

「およ？ 魔王様……その子は？」

ボスは、三人から質問攻めをされる。

抱きかかえられている少女は、それに少しばかり驚く

「ちょ・・・ちょっと待て！ 一人ずつで頼む！ 頭が混乱する！」

「……つとお・・・その前に、この子に食事作ってやらねえとな」

その後・・・ボスは三人からの質問を答えながら、少女への食事を作った。

~~~~~？魔王城：寝室？~~~~~

寝室に居た少女は、ポケーと窓の外を見ていた・・・。

そこへ、ボスが食事を持ってやってきた。

「よう、調子はどうだい？」

ボスは食事を机に置き、少女の頬を撫でる。

「うん、少しは顔色が良くなっているな……」

「ア……ウウ……」

「まだ……喋りづらいか……」

ボスは、少女を優しく抱きしめた。

《もう大丈夫だから・・・》

その声は、優しい女性の声に聞こえた。

「ん？」

そこに、覗きにやって来たスラナが見たものは・・・

綺麗な黒い長髪をした女性が、少女を優しく抱きしめている光景だった。

スラナは自分の目を疑い、目を擦って再度確認した。
そこには……何時ものボスが見えた。

（今は・・・？）

その後、ボスは少女に少しずつ食事を与えた。

「どうだ？ お腹いっぱいか？」

コクッ・・・

少女は、頷いた。

「そうか、それは良かった。」

ボスは笑顔を見せた・・・。

優しい、先ほど……ニンスク街で見せてしまったあの顔とは別の物を……

少女は、ボスに抱きついた。

弱弱い力で、必死に抱きついた。

ボスは、少女の頭を撫でた。

「よしよし……辛かっただな……」

少女の目から涙が少しだけ出ていた。

第六話：「人間の悪が詰まった街」（後書き）

？あとかき？

どうも、ボスが人外に見えてしょうがない・・・零式です。

ただの人間ですよ？　ボス。

そして、またもや怖いというね……

（誰？）　っと思ってしまうても仕方ないね。

さて、新キャラの奴隷少女ですが・・・

何故か、最後が感動物に・・・

別の所で、書いた小説がうつってしまったのか？

まあ良い。

最後のシーンで、「スラナの目に女性の姿が見えた。」

このシーンですが、ちゃんと設定があります。

皆さんは、パラレルワールドという物はご存知でしょうか？

自分の世界とは、少し違う世界。

自分だが、性別が違ったり、性格が違ったり・・・

実は、ボスの設定には隠された設定があり

その設定が、このパラレルワールドに関係しています。

それが、今回出てきた女性に関係しています。

これについては、後々分かる事です。
首を長くして待ちましょう。

第七話：「対・異国からの放浪者 前編」（前書き）

？前回までのあらすじ？

ボスは、ウルの要望である 『魚をもつと食べたい！』
を答える為に

人間側の土地。 『ニンスク街』 へと足を踏み入れる。

そこでは、治安が最悪で……強盗や暴動が日常茶飯事に起きていた。

そこは、まさしく 『人間の悪の部分が詰まった場所』 だった。

そしてボスは、 なんとか買い物を終えたが……何か物足りなく街を歩き回る事にした。

しかし、 やはり るくな物が無く、 諦めて帰ろうとしたが……
ふと 『街の何処にも子供の姿が見当たらない』 と気づく。

ボスは考えた。
その中で導かれた答え 『子供が奴隷にされている』

ボスは、 その奴隷達を助けるべく……奴隷バザーへと足を踏み入れる。

しかし……そこでは誰も居らず、 もぬけの空だった……

諦めて帰ろうとした所その時だった。

カタンっと、 奥の部屋から物音が聞こえた……

警戒しながら、 恐る恐る……奥の部屋に侵入していったボスが見

たのは

痩せ細り、言葉も るくに喋れない

長い金髪で、 緑と青の目をした少女が居た。

それを見たボスは少女を救出し、 急いで城に帰ろうとした。
だが、そこへ偶然にも留守から帰ってきた奴隷商人が……

ボスは奴隷商人と戦うことにした。

共にナイフで攻撃し合い、 見事ボスが勝利した。

城へ辿り着いたボスは、 仲間達の質問攻めに答えながらも少女に
食事を作る。

そして、 少女に少しずつ食事を食べさせる。

そこへ……覗きに來たスラナが見た物は

綺麗な黒髪をしたボスと思われる女性が少女を抱きしめていた。

果たして、 スラナが見たのは幻だったのか？

それとも……

？登場人物？

・ボス：二代目魔王。 実は……裏設定があるのかないとか？

・スラナ：魔王の秘書。 ボスと思える黒い長髪の女性の姿を見た
後に目薬を使用したのは内緒。

・ウル：ワーウルフ。 狼なのに、 何故か魚が好物。

・クリナ：エルフ。 今日も真面目に城の警備中。

・少女：奴隷だった少女。 ボスの大切な者と よく似ている……

？舞台？

【魔王城：エントランス】

所謂、^{イウユル}入り口付近。

無駄に広く……設計当時は、ここに数百の魔族が行進する予定だったとか無かったとか……

（初代魔王、死んじやったしね。）

兎に角、無駄に広い。

無駄に広い為、戦闘などでオブジェ等が壊れる心配は無い。

さすが魔王城！ 暴れても大丈夫な設計だぜ！

・・・第七話：『対・異国からの放浪者 前編』

第七話：「対・異国からの放浪者 前編」

「……………？魔王城？……………」

王座では、ボスと以前に助けた少女と一緒に読書をしていた。そこへ、飲み物を持ったスラナがやってくる。

「ココアです。」

「ん、ありがとう」

「貴方には、ホットミルクを……………」

「ありがとう。」

二人は、渡された飲み物を早速飲む。

「しかし…………あれから経ちますが、ようやく普通に喋れる様になりましたね」

「ああ、本当に良かったよ」

「……………ありがとう」

少女の頬が少しだけ赤く染まる。

「まあ、少し慣れない部分があるけどな……………」

「それにしても…………さっきからお二人は、何を読んでいるんですか？」

スラナは、疑問に思っていた事を口にする。

「ん？ いや…………何か、”リナ”が読みたいって言うからさ」

「おや…………ボス、この子に名前を？」

「ああ、名前が無いと不便だろ？」

ボスと少女と出会った当初…………

全然、名前も何も無い状態だった彼女。

ボスは、そんな彼女に名前を授けた

”リナ”

ボスが大事に思う人と、よく似ている彼女と比べて頭の中に浮かんだ名前。

「それで、改めて言いますが……お二人は何をお読みで？」

「んん〜？ 『魔法大教科』 って本なんだがな？」

ボスは、チラチラッと本をチラつかせながらスラナに見せる。

「『魔法大教科』 って……それは、一流の魔法使いでも理解が難しい本ですよ！？」

「えっ！？ そんな本だったのか？ これ。」

「ええ……賢者と呼ばれる者のみを読めるといふ代物です」

「いや、普通に解るんですけど……」

「うん わたしにもわかる。」

「マジですか……」

スラナは、賢者のみでしか読んで理解できない代物

『魔法大教科』を解読できる二人に驚かされた。

その中で、スラナの心の中に一つの当然なる疑問が浮かび上がる。

”何故、読めるのか。”

普通 こんなわけの分からない文章を理解する事など……
常人が、 どれほど頑張っても理解できない。

それなのに……………

” どうして、 二人は書いている文章を理解し、 読めるのか。 ”

スラナには、 理解できなかった。

「しかし……………これ書いた人、 決行マメだね」

ボスが、 一言呟く

” 魔方阵についての解説とか解りやすく、 詳しく書いてるよ ”

ボスから言い出された言葉は、 とても理解に苦しむ言葉だった。

（ …… はっ？ ）

また、 スラナの心に疑問が出来る。

「何故、 ” 人間である ” お二人が理解出来るのですか……………？ 」

もはや、 スラナの顔は苦笑いしか浮かばなかった。

しかし、 もっと驚かされたのは……………その後に出された言葉だった。

「中二病患者の一人だから。」

「……………そこ、 わかんない……………」

もはや、 理解に苦しまされる二人の言葉だった。

なんとって、 二人の回答は大きく斜めに吹っ飛んでいたのだから

……………

（ ええええ …… ）

一方、 その頃

「暇だね」

「そうですね」

ウルとクリナの二人は、城のエントランス付近を警備していた。

「そういえば……ウルさん。」

「『さん』は よしてよ」 『ウル』 で良いよ。」

「そうですね……それでは、ウル。」

「はい！ 何でしょ？」

「貴方 この警備に就く前は……どちらにいらしたのですか？」

「うん……よく分かんないな！ 僕が、”この仕事を始める頃までの記憶は全然無いし。”」

ウルから出された言葉は、衝撃的な言葉だった。

「記憶が……無い？」

「ん？ どうしたの？ クリナ、変な顔しちゃって」

「あ いえ、なんでもありません……」

クリナの表情が一気に暗くなる。

（知らなかった ウルが過去の記憶が全然無いことに……）

二人が、会話している最中。

一人の人間が、二人に近づいてくる……

その人間は、大きな布で体を隠していた。

近づいてくる人間に、気づいた二人は武器を構える。

「待て。」

まず、口を出したのはクリナの方だった。

「この先は、魔王様の城だよ。」

「見逃してあげるから、帰って」

ウルは、人間に引き返す様に宣告した。

「引き返せ、さもなくば……」

クリナが言いかけた……その時だった！

一線。

突然、その人間は凄い勢いで片手剣を抜き取り二人に向かって攻撃してきたのだ！

二人は、何とか避けた。

「貴様……何者ッ！」

クリナの剣が人間が羽織っていた布を切り裂いた。

布が切り裂かれ、布が風に煽^{アオ}られて体から離れる。

その姿と顔を見て、二人は驚いた。

「なっ……！？」

「お、女の子！？」

その姿は 何と、まだ10にもなったであろう少女の姿だった。

その頃……

ボス達は、まだ読書に熱中していた。

「へえ、この本、召喚術もあるし、それに対応する召還術もあるのか」

？補足：召喚術と召還術の違いは、召喚は呼び出す魔法。召還は呼び返す魔法。？

「やり方は、分かるんですか？」

スラナが質問する。

「うん、召還に大切なのは、”その者に帰ってほしいと願う思い”……だとさ。」

「つまり 『出て行けッ!』 って事だな」
ボスが、スラスラツと質問に答える。
「何ですか……それは……」

ドオオオオン!!!

突然、 城に大きな衝撃と音が辺りに響き渡る!

「何だ!?!」

「エントランスからです!」

「確か……あそこには二人が居た筈だ!」

ボスは、急いでエントランスに向かう。

「まって。 わたしもいく」

「えっ?」

リナの言葉にボスは、 立ち止まる。

「わたしも……いく」

「……………」

「リナさん危険です、 ここは……」

スラナが止めようとした

「分かった。」

だが、ボスが許可の言葉を出す。

「魔王!」

「構わん、 ここに一人で居させるにはいかんだろ?」

「しかし……」

「御託を言つな。 俺は魔王。 偉い人。 OK?」

「……分かりました。」

(こんな所で、 その権力を使いますか……)

「よし、 行こう。」

「……………？魔王城：エントランス？……………」

「二人共！ 大丈夫か！？」

ボス達は、二人の下へと急いで駆けつけてきた。

「魔王様！」

「魔王様！」

「だーからー、魔王って呼ぶなって」

「魔王。さっきの台詞と、逆になってますよ？」

「だれか、いる……………」

リナが砂煙の中を睨む。

煙が晴れ、その姿が映し出された。

その髪は 金髪のおさげで、少し露出度が高い装備をした少女だった。

「こいつは……………」

「多少……破廉恥な格好ですね。」

「いや、それ以前に……………」何故、少女が剣を持って二人を襲っているのか”だ。”

スラナの言葉にボスがツツコミを入れる。

「確かに…………何故、あんな小さい子が あんな危なっかしい物を振り回しているのか……………」

「あの目…………只者の目じゃねえぜ……………」

「いかが致しますか？ 魔王。」

「そうだな、クリナとウルはスラナ達と待機。」

ボスは少女の前に仁王立ちで立つ。

「ここは 俺がやる。」

第七話：「対・異国からの放浪者 前編」（後書き）

？あとかき？

はい、どうも！

チャットで『今のやり方は少し？だよ。』と指摘され、修正をしている零式です。

最近、資料として「空の境界」の上巻を100¥購入しました。さすがは、きのこ氏。良い作品だ。参考になる。

将来は、小説で食っていけるような者になってみたいモノです。

（正式な小説コンテストに応募してみようかしら……？）

そんなこんなで、今回は色々と詰めて書いてみましたが……いかがでしょうか？

読みやすかったら、感想をよろしくお願いします。

第一～六話は、まことに申し訳ありませんが……暫らくは、あのままにさせて頂きます。

理由は、メンドクサ……ゲフンゲフン！

さて……今回登場した敵ですが……

何だろう、この異様な幼女率。

何処のギャルゲー？ いや、何処のエロゲー？

私は、そんなノベルゲームなんか書く気は無かったのに……

（頼まれたら、喜んで書くけど……）

言っときますけど、これはギャルゲーでもエロゲーでもありません。
『列記とした小説』です。

おっと……話が脱線してしまった。

とりあえず、次回は戦闘シーン盛り沢山（？）でお送りしたい
と思います。

（次回は、ちゃんとした小説にしたいな……）

第八話：「対・異国からの放浪者 中編」（前書き）

？前回までのあらすじ？

新たに仲間に加わった『リナ』

そんなリナとボスは仲が良く、共に読書をする仲でもあった。

そんな中

『魔法大教科』

という賢者ぐらいでしか理解で

きないという一番難しい本を

平然と読んでいる二人にスラナは驚かされていた……

一方その頃。

ウルとクリナは警備の仕事をしていた。

だが、ボスの圧倒的な力に恐れのけたのか……中々侵入者の一人も来ずに居た。

色々と暇な二人だったが……そこへ一人の戦士がやってくる。

当然、警備を任された二人は戦士に静止し引き返す様に忠告する。

だが……戦士は、その言葉も聞かずに二人に襲い掛かる。

戦いが始まり、城から激しい戦いの音が鳴り響く。

それに気づいたボス達は、素早くエントランスへと向かった。

そして、たどり着いたボス達は戦闘に備えるが

「ここは俺に任せろ。」

その一言を言い残し、ボスは少女戦士との対決へと向かう。

？登場人物？

・ボス：今回もウル戦と同様に……人外になります。

・スラナ：今回は、さすがに見る事しか出来ない。

・ウル：少女戦士の攻撃を何とかかわしていたので無傷。

・クリナ：同じく、攻撃をガードしながら戦闘していたので無傷。

・リナ：奴隷だった少女。魔法とボスに興味がある。

？舞台？

【魔王城：エントランス】

前回と同様のステージである。

・・・第八話：『対・異国からの放浪者 中編』

第八話：「対・異国からの放浪者 中編」

「……………？魔王城：エントランス？……………」

「構えることは無い、さっさと来るが良い。」

「……………倒す。」

二人の戦いが始まった。

ボスは、次々と攻撃を繰り出すも……………少女戦士はアッサリと攻撃を防御する。

（ふむ……………ちと不味いか……………）

少女に多少、警戒を持ったボスは一旦距離をとった。

「逃がしはしない。」

だが、少女戦士が接近してきて距離を大きく詰められる。

「おっと……………！」

ガキン！

ボスは触手を盾に変え……………少女戦士が繰り出す攻撃から身を防いだ。

「甘いな。」

相手の隙を見切ったボスは、蹴りを一発入れる。

蹴りは見事ヒットし、少女戦士は怯みを見せた……………！

「隙を見せたな。」

ボスは、『この時を待っていたッ！』と言わんばかりの笑みで怯んでいる少女戦士に向かって走り出す。

「……………ッ！」

しかし、間一髪。

ボスの攻撃を、少女戦士はギリギリで回避した！

「ちっ……駄目か。」

（だが……少しずつだが、徐々にこちらが有利な状況へ風向きが移動してきている）

少女戦士は、 尽かさずボスに向かって攻撃を仕掛けてきた。

「おっと……！」

（ っと、言っても相手のスピードは俺より多少ながら速い…… ）

ボスは、 もう一度 相手の好きを見切り…… 攻撃を仕掛けた！
今度の攻撃は見事にヒットした……！

相手の素早さを遅くする為に太ももを攻撃したが、 狙い通り。

少女戦士の動きが先ほどよりスローになってきていた。

「痛むか？ やはり、生身の人間でも痛みはあるもんだよねあ……」

……

少女戦士は、 ボスをキツと睨みつけた。

「ほほう…… まだ私に挑む意欲と力を備えていたか、人間。」

（俺も人間だけだな。）

「……殺す。」

少女戦士は、 剣を構える

「良かろう、ここまで私と張り合えた事を褒めてやるぞ。」

「その例として……私の本気を少しばかり見せて差し上げよう。」

何かもう……ボスは若干ノリノリ気味だった。

ボスの戦闘を見ていた四人……

「魔王様、すつこおい……」

「あれこそ、我ら魔族の王に相応しき戦いか……」

「いえ、魔王の本気はこれだけではありません。」

「てか……」 あれが本気な訳が無い。 ”

「えっ？」

「えっ？」

スラナの言葉に二人はびっくりした。

「わたしもおもう……まだよゆうあるかお……」

”人間、一時的解除。人外へと移行する。”

シュルルルルル！！！！

スラナとリナが言った言葉に嘘は無かった。

ボスの腕に付いている触手達が一つに集まり……一つの刀に形を変えた！

「……ッ！？」

当然、何も知らない少女戦士は驚きの顔を見せた。

「もう自棄だ、殺されても文句を言っなよ？」

斬ッ！！

刀が少女戦士の体を切り裂いた！

「がふっ……！」

先ほどから無表情でいた少女戦士の顔に苦痛と驚きの顔が現れる……

……！

ボスは、相手に休ませる暇は与えなかった。

すぐさま少女戦士に接近し、切り裂く

その斬撃は、大きくそして重かった。

少女戦士の体が、マリオネット人形の様に面白いくらいに吹き飛んでいった！

「あ、あれは！？」

「す、凄い……！」

驚いている二人の隣で、スラナは苦い顔をしながらボスの戦う姿を

見ていた。

スラナは今でも覚えている……。あの時のボスの目を

そう……以前、寅午という名の者の欠片で暴走してしまったウルとの戦いの時に見せた目。

何時もは真っ黒で綺麗な瞳をしている彼の目が　血や炎のような赤。そんな目の色に変わっていた。

「知っているのですか？　スラナさん。」

クリナは、スラナの異変に　すぐ気づき話を聞こうとした……

だが、スラナの口からは何も出てこなかった。

それよか、その光景に何か知らずの恐怖で体が少しばかり震えていた……

「　どうした、反撃はせぬのか？　意外と腰抜けなのだな。」

斬ッ斬ッ斬ッ！！！！

ボスは目にも留まらぬ速度で移動し、次々と少女戦士の肉体を切り刻む……！

真っ赤な血が床に散りばめられる……

「君には、心底がっかりされたな。　残念だよ。」

瞬切。

相手を切り刻む刀の速度が倍加され……

少女戦士の全体がボコ雑巾へと変わり果てていくが如く切り刻んだ。

ボスの目が赤く　鈍く光る。

その目には……何も感情が無い。

”ただ人を殺す。”

それしか残っていない目だった

もはや、ボスの勝利は確定したかに思えた……だがッ！
ガキインツ！！！！

何と　　！　　あれだけの攻撃の中、　少女戦士はたった一度の防御だけで

ボスが繰り出す連続攻撃の動きを封じたのだ……！

「ほう……薄々は気づいていたが、殆どの攻撃を　その剣で防いでいたか……見事見事。」

「……えっ？」

ボスから出された発言に三人は驚いた。

しかし、　リナだけは分かっていた。

あれだけの攻撃を浴びせていたのにも関わらず……肉体へのダメージが、　そんなに酷くない事に

そう……少女戦士は、　ギリギリの所で殆どの斬撃を防いでいたのだ！

「だが、一応はダメージがあるのだろ？　ん？」

少女戦士は距離を取り、構えた。

だが……先ほどのガードをしていても通ってしまった攻撃のダメージが体に響いたのか……

膝をついてしまい、息を切らし始めた。

「幾らダメージを防いでいたとしても、入っているモノは入っているんだ……」

「肉体的には疲労と痛みが来ているのではないか？」

確かに……ボスの言うとおりだった。

少女戦士の体は、　ボロボロで……殆ど斬撃を防いだ剣も今にも折

れそんな状態にあった。

さらに体が小柄な故 あれだけの重い一撃一撃を体ごと必死に防いだのだから

肉体が悲鳴を上げている……足も太ももへのダメージがあつてか、
上手く動けない状態に……

「引け、無理に深追いすることは無い。 さつさと元の居場所へと帰るが良い。」

ボスは、 撤退の言葉を少女戦士に投げつける。

「……………殺さないと……………殺さない……………」

少女戦士は、 これ以上 動けない体を無理に動かして立ち上がる。

「小童めが……………その年で死に行きたいと言つのか？」

ボスの体が、 一瞬にして少女戦士の目の前へと到達する。

一線。

ボスの一刀が、 少女戦士が持っていた剣は砕き……………少女戦士はもはや動くことが出来ぬ体を地面にそのまま倒した。

そして……………刀を一度振り、こう言った。

「残念だったな。 我が触手は伝説の金属 ”オリハルコン”
よりも硬く丈夫に出来ている。」

「貴様の軟い剣などでは、我が触手の一本でさえも切れぬ。」
触手は解かれ、ボスの腕に戻っていった。

戦いを終えたボスは皆の下へ戻ろうとした……………その時であつた！

ズンッ！！

ボスの全身に強大な殺気と気迫が押し掛かるッ！

「 なっ！？ この……………気配は……………！」

【おやおやおやおア……】

【駄目ですよ！ボス、よそ見しちゃ！】

ボスの背中から衝撃と痛みが伝わり、倒れて込む……
そして、そこに立っていたのは

何と、先ほど倒した筈の少女戦士だった。

だが 彼女の顔は先ほどとは異なり、 狐の様にニタニタと笑
っていた……。

それは、 倒れているボスをあざ笑うかの様に見ていた。

少女戦士の体の一部から、 真っ赤な炎のようなオーラらしき物体
が燃え上がるように出していた。

「お前……寅午……！ やっぱ生きていたのだなッ……！」

【ええ、おかげ様でね……】

寅午は、 ボスの体を踏みつける。

「がはっ！」

【貴方と もう一人の奴のせいで、私の体は見事にバラバラ……】

【危うく、死んでしまつてこの世あの世と全てから消える所でした
よ？】

寅午は、 さらに踏みつけた足でボスの体を踏みにじる……
「ぐあ……うがぁ……！」

ボスから悲痛な叫びが聞こえる。

【痛かったんですよ？ マジで。】

寅午は、強く踏みつける。

【本当に】

踏みつける。

【お前の】

踏みつける。

【せいでなッ！！！】

最後に思いっきりボスの体を踏みつけた。

「ぐああああッ！！！」

ボスは、悲痛な顔を見せ……悲鳴がエントランス全体に響く
「止めるッ！」

バアンッ！！

クリナは、背中に装備していた猟銃で寅午を撃った。

弾丸は見事、寅午の心臓部へと命中した。
しかし

【あんたのせいなんだからさ……】

寅午は心臓が無いのか……？ 段々とボスを痛め続ける。

【今度は、あんたが死んでよ？】

寅午の足が、ボスの頭を踏み潰そうとした。

三人は、何とかして寅午を止めに行こうとした！

だが 体が動かないッ！！

（もう駄目のなのか……！）

三人は諦めかけていた……その時だった！！

突然……！ 寅午の腹部に巨大なトゲが突き刺さり、 寅午は壁に貼り付けられる。

三人は驚き、 トゲが飛んできた方を見た。

そこには 両手を前に出し、 自分でも何が起きたのか分からない顔をして棒立ちをしている『リナ』の姿が・・・

「リ……ナ……？」

ボスの言葉にハッと我に戻ったスラナは、 急いで二人にボスの回収を命令した。

「魔王様！大丈夫ですか！？」

「はははっ……これが大丈夫に見えるか……？ ゲホッ！」

ボスの口から血が出る。

どうやら、 先ほどの踏みつけにより内臓部分を破壊されてしまったらしい。

「すぐに治療室へ……！」

スラナは、 治療の準備の為に先に城の中へと戻る。

クリナとウルはボスの肩を持ち、 ゆっくりと城の中へと戻る。

「待て……リナは……リナは、 どうするんだ？」

ボスの言葉にリナは、 ボスの方を振り向いて言った。

「だいじょうぶ……こんどは、 わたしがたすけるばん……！」

「………すぐに戻るから、 何とか持ちこたえてくれよ」

リナの言葉にボスは納得したのか………そう言い残して一旦、 城の中へと戻っていった。

ガラガラガラ……

瓦礫が崩れて、 中から寅午が起き上がった。

腹部に空いた穴は、 とつくに塞がっていた。

【ふう………まったく、 痛いじゃないか………お嬢さん。】

【あんたも、 死にますか？ それも一生分の”トラウマ”を背負っ

て死にますか？」

「……それは、あなたがつけるモノ。」

寅午とリナの戦いが、始まった。

第八話：「対・異国からの放浪者 中編」(後書き)

？ ふしぎなあとがき かかされて？

(OWO) <ドオウモオ レイシイキイデイス！
？ 翻訳：どうも、零式です。？

はい、つーわけでね。
第八話です。

ラストのシーンのリナがカッコイイと思うんだ。
さて……次回は、リナ活躍回です。
カッコカワイイ場面になると良いな…… (例の漫画の意味では、
ありません。)

色々と編集していつてるのですが……
未だに最新話が更新できないと言っね……
本当にマジでサーセンww

次回の編集が終了次第、更新の作業へと取り掛かります。
それまでお待ちを……

そして、ここで重要な謝罪のお知らせ。
昨夜、編集ついでに小説情報の編集をして驚きのモノが……

感想の部分、チェックが(ユーザーのみ)の部分をチェックしてた
……！

Oh Shit! 自分Fuck You

本当にごめんなさい、感想できなかった人！
マジですみませんでした！（焼き土下座）

急いでチェックを（制限なし）の部分に変更。
ちゃんと見ておくべきだった……！私のドジッ！

………つーわけで、次回も楽しんで頂けたら幸いです。
次回もよろしくどうぞ～（・・）ノシ

第九話：「対・異国からの放浪者 後編」（前書き）

？あとかぎ？

はい、どうも！

大分更新速度を遅くしてしまつてすみませんでした。

今回は、なるべく早く更新しますので、お許しを・・・

今回は少し強引な回だったので、今回はちゃんとした回にします。

（・・・あれ？何、このデジャヴ・・・？）

それでは、次回をお楽しみに！

（あとかぎも少なくなってきたな・・・）

？前回までのあらすじ？

突然、魔王城に現れた謎の少女戦士

ウルとクリナの二人は制止を呼びかけるが、それを聞かずに二人
に向かって攻撃してくる！

城に居たボス達は異変に気づき、二人の安否を心配して駆けつけ
る。

そこには、少女戦士と戦う二人の姿が……

本気になったボスは、勝負に挑む

戦いの末、何とかボスが勝利を獲得した。

しかし、それだけでは終わらなかった。

何と……！

少女戦士は以前、ボスとアルカードが倒した敵『寅午』……
それを取り付いていたのだッ！

不意打ちを食らってしまったボスは、ピンチの淵へ追いやられる。
だが、そこへ寅午を貫く一撃が……！

それは、ボスが助けた奴隷の少女『リナ』が放った魔法だった

そして……リナは、傷ついたボスの代わりに寅午の残骸を倒す事
となった！

？登場人物？

・ボス：現在、寅午の残骸に重傷を負われ、治療室にて（触手を
使って）自己再生中。

・スラナ：同じく、ボスの治療の為に治療室へ……

・ウル：ボスを治療室に運び、安全を確認次第。リナの応援へと
向かう。

・クリナ：ウルと同じく、安全を確認次第。リナの応援へと向か
う。

・リナ：ボスの仇の為に覚えた魔法で戦う。

・寅午：以前、ボスとアルカードが倒した筈の敵。この世全てに
おける恐怖の塊^{トラウマ}

？舞台？

【エントランス：戦闘後】

ボスと少女戦士の戦いにより、周囲が傷だらけで柱もボロボロに
なっている。

だが、以前と何とも変わらないので戦いに支障は無いだろう。

・・・第九話：『対・異国からの放浪者 後編』

第九話：「対・異国からの放浪者 後編」

「……………？ エントランス？ ……………」

二人の戦いは、白熱していた。

リナの魔法が、寅午の体を傷つける。
だが、傷ついた体は徐々に再生していく

【おやおや……その程度ですか？】

寅午は不気味な笑みを、リナに見せる。
いきなり、柱が飛んできて寅午の頭を潰す。
寅午の体は、ビクッビクッと痙攣していた。
だが……

【わがまま坊ちゃん並みに反吐が出る攻撃ですよ。
腕が動き、柱を掴んだ。

そして、そのまま引き剥がそうとした。
しかし……

ドンッ！ ドドドドンッ！

次の瞬間。次々と、柱が寅午の全体を潰していく……
【！？】

リナの目は、本気だった
”本気で、相手を叩き潰す。” そんな目をしていた。
いや、そうしなくてはいけなかった。

相手が、危険すぎる。

先ほどの笑みも、常人なら誰でもゾクッと恐怖する笑みだった。
しかし、それでは駄目だ。

”相手に隙を見せてはいけない。”

”見せれば、逆に殺される。”

”一瞬でも見せれば、死ぬ。”

そんな言葉が、彼女の頭の中を這い回った。

【まったく……】

柱から次々とヒビが入る。

そして、柱が全て崩れ散り 寅午が起き上がる。

無傷の状態で、そして『少女戦士』の面影が消え……

赤黒いスーツの男になっていた。

そう この姿こそ、寅午本来の姿……。

【痛いじゃないですか】

その顔は、まさしく狐のような顔をしており……ケタケタと笑う。

「……ッ！」

リナは、もう一度攻撃を仕掛ける。

【さて……そろそろ、こちらにも反撃と行きますかねッ！】

二人の攻撃がぶつかり合う。

その頃……ボスは治療を終えて、体力回復の為に一寝入りに入っていた所だが……

一分もかからずして目を覚ます。

「魔王、どうしたのですか？」

ボスは、頭に手を添える。

「ウルとクリナは？」

「はい。先ほど魔王の安全を確認したら、リナさんの応戦へと……」

「そうか……」

ボスは、ベットから降りる。

「俺らも行くぞ。」

「無茶です!」

スラナは椅子から立ち上がり、ボスを止める。

「何故だ? リナが危険な状態にあるんだぞ?」

「先ほどの戦闘で、貴方は大きな損傷を得ているのです。」

「これ以上の無茶は、死を意味します。」

「だから……貴方を行かせる訳にはいきません!」

スラナは、ボスの顔近くまで近づいた。

ボスは、スラナの肩を押し、無理やりでも通ろうとした。

「退け。お前は、ここに居ろ」

「何故ですか! 自分の命を懸けてまで、そこまで……」

「あいつは、俺の家族の一人だからだ」

「家族……? 仲間では無く?」

「いや、」仲間であり、家族でもある」

「俺の家族が、何時も言っていた」

「俺が、元いた世界には、沢山の仲間という家族がいる」

「そして……この世界にも、大切な家族がいる」

「俺は、自分が生きている価値が解らなかった」

「だが、あいつ等と一緒にいて、漸く分かった。」

”共に一生を歩み、その一生を悔いなく終える事が、俺の存在価値だと”

「だから、俺は家族の為なら命だつてくれてやれる」

「大切な人を失う辛さを味わう位なら、この命なんてクソ食らえだ」
スラナには、ボスの言っている事は理解出来なかった。

ただ 言葉の意味ではなく、心の意味を……

「貴方は……」

「貴方は、本当に”普通の人間”なのですか？」

スラナの言葉に、ボスはこう答え…… エントランスへと向かった。

「俺は、普通の人間さ」

一人、治療室に残されたスラナは呟いた……

「貴方は、普通にしては普通じゃなさすぎるんですよ。 体も心も……」

「……………？ エントランス？……………」

その頃、リナは応戦に来た二人と共に寅午と戦っていた。

【「やれやれ……あの人も困ったもんだ。 こんな部下を持っているとはね……」】

寅午は、やれやれ顔で首を横に振る。

バンッ！！

銃声が鳴り響く。

寅午の髪に弾丸が貫いていく

「貴様だけは許さんッ！！」

クリナは、 獵銃を構える。

「魔王様をあんなにした罰は重いよ！！」

ウルは鋭い爪を尖らせ、戦闘体勢に入る。

「こんどこそ、つぶす。」

リナの両手に、光が集まる。

ボスは、急いだ。

幾ら相手が、一人だからと言って、相手が全ての生命に恐怖を与え続けた最悪の者 『寅午』

そんな奴を相手にするのは、到底難しい事になる。

胸騒ぎがする。

ボスは、さらに急ぐ足を速めた。

そして、エントランスに辿り着いた。

そこにあつた光景は、予想外な光景だった。

ボスでも、予想が出来なかったありえない光景……。

何と あの寅午がボロボロになり、膝をついていたのだ！

啞然と、その光景を目にするボス。

「あつ！ 魔王様！」

気配を感じたウルは、辿り着いたボスに手を振っていた。

その体は、少し傷ついているが……全然平気そうに見える。

「魔王様！ お体の方は大丈夫で！？」

クリナの方は、無傷の状態だった。

だが、銃の方は弾切れなのか……剣に持ち替えていた。

「こ、これは……？」

ボスは、急いで三人に近づいた。

「 だいじょうぶ？」

リナが、心配そうな顔でボスを見る。

「あ、ああ……だが、これは……？」

ボスは、まだ状況の把握が出来ていなかった。

無理もない。

あれだけ苦勞して倒した者をこつもあつさりと倒す直前までに、追い込んだのだから……

「ええ、多少苦戦しましたが……私にとっては百っぼっち程度の軍勢を相手にしている様な感じでしたよ」

クリナの発言に衝撃を感じた。

百っぼっち程度……？ それをイージーと判断していたというのか……？

もう、何がなんだか……

「もうッ！ クリナだけ、かつこつけるんだからあ！」

「ウルだって、結構なダメージを与えていたじゃないですか」

確かに……考えてみれば寅午は攻撃力等は長けているが……素早さと防御力は、通常の人間並みに低かった。

ましてや、そんな体でワーウルフ族のウルとエルフ族のクリナ、そして強大な魔法を使うリナが相手になると……

結果は、明白に見える筈だ……。

圧倒的に不利なのは、寅午の方だった。

以前までは、とある能力により、攻撃も中々与えられなかったが……

今となつては、その能力も使用できない状態とある。

そんな中で、これは完璧に不利な状況だった。

【やれやれ……流石に これは……うぐっ!!】

突然 寅午は、苦しみ始めた。

【どうやら……”足である私の部分”は、ここまですが限界だったようです……】

寅午の発言に、ボスは疑問に思った。

「ちよつと待て！ 足ってどういうことだ？ 部分とは!？」

【おやおや……つい口が滑ってしまいましたかね……】

第九話：「対・異国からの放浪者 後編」(後書き)

？あとかき？

あいどうも。 零式でおま。

最近、中々面白い事が全然無くつてねえ……
そのせいか色々といらいラしてしまってます。

(逢魔ヶ刻動物園の一卷、中古で売ってないかな……)

さて、今回のラストですが……

Yes、メルティブラット(通称：メルブラ)です。

メルブラ大好きです。

ワラキアの夜は出てきません。

新手のタタリとかも、出てきません。

いや、それっぽいのは出るか……(どっちや)

メルブラの知名度は、そこそこという所ですな……

チャットでは、「メルブラ？ 何それ食べるの？」みたいな感じで
したし……

BGMとか結構良いのよ？

あと、私の使用キャラは……琥珀、七夜、アルクエイド、秋葉。

さて、次回ですが……

次回の編集は、一度休憩。

いい加減、新しい回を更新しないと……

それでは、これで……(・・)ノシ

第十話：「寅午。ボス。アルカード。過去の記憶。」（前書き）

？前回までのあらすじ？

傷ついたボスの代わりに寅午の残骸と戦う事になった”リナ”
その戦いに参戦しようと急ぐ、ウルとクリナ・・・

一方、ボスは治療を終え。早くリナの所へ向かおうとした・・・が
そこに、スラナが止めに入る。

「無茶をしないで」

その言葉を受けたボスだが

「自分の仲間を傷つける訳には、いかない」
カソク

ボスの熱い思いにより、スラナを説得させる。

そして、ボスはエントランスに到着すると・・・
そこにはボロボロになり、膝を付いている寅午の姿が在った・・・。

そう、三人の連携により、見事寅午を倒したのだ。

だが・・・寅午は、まだ動き戦おうとした
しかし、そんな寅午に限界が・・・

最後に寅午が残した言葉・・・” 足の部分”

果たして、寅午が生きていた理由とは・・・

そして、舞台は動きだす・・・

？登場キャラ？

ボス：とあるチームを束ねるボス。カリスマ性も高く、仲間からの信頼が厚い。

スラナ：魔王の秘書。未だに、仲間とは一体何なのかが分からない。
・・・

ウル：ワーウルフの少女。素早い動きと攻撃で、相手を倒す。

クリナ：攻撃部隊隊長のエルフ。弓の他に、剣や銃を扱う事が出来る。

リナ：奴隷だった少女。強大な魔法が使える不思議な少女。

アルカード：とある組織の首頭。^{ボス}元は神を超えし者らしいが・・・？

？舞台？

【過去】

不明。

・・・第十話：「寅午。ボス。アルカード。過去の記憶。」

第十話：「寅午。ボス。アルカード。過去の記憶。」

全員は王座へ集まり、ボスの話を聞こうとした。

「魔王、話してください。 奴……」 寅午”とは、何者なのかを…

…」

「……良いだろう、話そう」

そして、ボスは過去の話をし始めた。

？それは……数ヶ月前の話に遡る？

昔、ボスともう一人……” 神を超える者” アルカードと一緒にとある事件を解決させていた。

実は……ボスは、とある組織の一員…… 家族として第二の人生を全うしていたのだ

組織の主な活動は、気ままに数々の世界の危機を救う事……。

ボスも…… 何度か事件解決などをして楽しんでいた。

しかし、今回の事件だけは…… 恐ろしく違っていた。

それは、アルカードと共に施設に居る凶悪な事件の首謀者を討伐していた時に起こった。

ボスとアルカードが敵を倒したとほぼ同時に施設全体の揺れが激しくなる。

「やばっ………！」

「敵に倒されたら施設ごと処分……悪党のやる手口ね。」

「負けぬ……このままでは死ねぬッ!」

敵の首謀者は、何と……女だった。

目的は、数々の地域から『イレギュラー』と呼ばれる者を回収し、育てて世界を支配しようとする計画だった。

しかし……今、二人の者によって打ち消されてしまった。

【ほう……これは面白い展開ですなあ】

突然、女の頭から男の声が聞こえる。

それは、女しか聞こえない声……

【なんとという幸運でしょうねえ】

【こんな所に十分と適した肉体を発見できるなんて……】

【光栄にお喜びなさい。貴方は……私の魂に食われるのだから】

「ぐ……ぐおおおおおおお!!」

男の声が止むと同時に女の頭が突然、強力な頭痛が襲う!

それは、まるで電気椅子にでもやられたかのような痛みだった。

「なっ……何だ!?!」

「この気配……ボス、構えなさい!」

「お、応ッ!」

ボスとアルカードが戦闘態勢に構える中……

女の周囲に、どす黒い瘴気が渦巻く……!

【オオオオオオオオオオオオオッ！！！】

そして次の瞬間。

痺気が女の全身を包み込んでいき、一時的に見えなくなってしまう。

「おい、アルカード……こいつは……」

「ええ……さすがの私でも、この威圧感に応えるわ……」

一瞬の静寂。

痺気が消え、その中から出てきたのは……

黒いスーツ、血の様に赤い手袋、ショート金髪……

一言で言えば……『黒執事』と言っても良い男が現れた。

【ふふふ……久々ですねえ……外の空気を吸うのは】

男は背伸びをしながら清々しく喋る。

「お、お前は……？」

ボスが質問する……

だが、そんな時であった。

アルカードは、そいつの姿を見た瞬間。

”ゾッ”……とくる何かを感じ取った。

（何なの、この感じ……？ 大分前にも、こんな似た感覚が……）

【んん？ おやおやおやおや……】

男はアルカードの存在に気が付いた。

【これは、これは……どなたかと思いきや……】

【昔……私が恐怖を植え付け差し上げたアルカードさんじゃないですかあゝ】

男が吐いた言葉……その言葉にボスは衝撃を覚え、アルカードは疑問が確信へと一変した。

「やつぱり……貴方なのね、寅午ッ!!」

「アルカード!? あいつの事を知っているのか!？」

【ええ、当然ですよ。 何せ、その人は……】

寅午が喋ろうとした……その時!

アルカードの攻撃が、寅午を吹き飛ばす。

その攻撃は、音速を超え……眼にも留まらぬ速さでの攻撃だった。

「はあ……はあ……それを……口に出すな!」

「アルカード!」

【ふう……あの時以来……まったく変わりもしませんね】

【”世界の一番端”以来……】

寅午がその言葉を吐いたその時だった。
アルカードの様子が急に変わり始めた。

「やめ……なさい……！」
「アルカード？」

アルカードは、ガタガタと振るえはじめ……顔も青ざめていた。

【そうそう、その男性の方。 貴方も恐怖トラウマをお持ちですね】
【しかし……それは、貴方自身が生み出した産物ですな】

「……お前……何故、そんな事を……！」

ボスの恐怖トラウマ……それは、永遠。

果ての見えないかぎりない宇宙のような永遠。
終わりなんて物は決して存在しない永遠。

それが……ボスがもつとも恐れる恐怖トラウマ
しかし、それは自分の心が生み出した不純物。

【アルカードさんよりかわ容易く脆い恐怖トラウマですが……貴方にとって
は最大の恐怖ですね】

寅午は、クスクスと笑う。

その笑いは、狐のような……人を馬鹿にするような笑い方で笑う。

「き……さまあああ……！！」

【おや、怒りましたか？ そりやそうですよねえ……】

ボスと寅午の最初の戦いが始まった

そして……。

「がはっ！！」

その後、ボスの異様な力に敗れた寅午……

そんな中、やっとアルカードの顔色が元に戻る

寅午自身のダメージが大きかったのか……恐怖^{トラウマ}が消え去ったようだ。

「これで最後だ！」

「ええ、これで最後よ。寅午」

【ふふふ……油断しましたねえ……これほどまで強い方だったとは……】

【さすが……アルカードさんの部下だけありますね】

虎午は、沢山の血を吐きながらも何とか立ち上がる。

「ちげえよ馬鹿。アルカードは、俺の第二の母だ」

「あら、そうだったかしら？」

その言葉に寅午は（ほほお〜う）と、言いそうな顔で見る。

【成る程、成る程……よく分かりましたよ】

【覚悟は出来てるんでしょうねえ……？】

寅午は構えた。

「ああ？ 覚悟を決めるのは、そっちだろうが常識に考えて」

ボスと寅午の戦いが再度始まった。

今度は、アルカードも参戦しての戦闘・・・
結果は……見え見えだった。

【ぶふおあ！】

寅午は、口から大量の血らしき液体を吐いた。
その足は最早立っているのが限界ギリギリの状態だった……

【これは……復活早々……^{ハヤジニ}早死ですか……？】

寅午はケタケタと笑う。

「安心してくだばれ。 お前は俺を怒らせた」

そして……とうとう寅午の肉体にも限界が現れ始めた。

なんと……！ 体の一部一部が溶けていき、崩れ始めたのだ……
！

【しかし、驚きましたよ。 自分で生んだとはいえ……まさか、自力で恐怖に打ち勝つ^{トラウマ}のだから】

【まったく……やっとな面白^{面白}い人に出会えましたよ】

「それはどうも、だが……まもなくお前は死ぬ」
「残念だったな」

【残念？ ハハハッ……いいえ、私は不死身。】

【ロア、ゼエピア……数々の吸血鬼が行った方法……あれを意図も簡単に超える方法】

【それがある限り、私に死は……】

「残念。その中二的なモンは没収だ」

【何ッ？】

「自分の体を見てみな」

【なっ！？何だ、これは！？】

寅午の体が崩れるのまでは良い。

だが、それと同時に崩れる腕も足も・・・全てにヒビが入っており、砂のように消えてなくなっていた

”絶対死”

アルカードが口を開ける。

「今回ばかりは、貴方の行為には罰を与える。」

「絶対死という名の罰を……」

【ば……か……な……】

「あんたは、このアルカードに手を出したその時から・・・死は始まっていたんだよ」

「それじゃあ……」

”さよならだ”

？舞台は戻り、現在・・・？

「……………」

ボスは、話を終えて黙り込む。

「それで、寅午……先ほどの奴を倒したって事ですな？」

ボスは首を頷かせた。

「しかし……どうして生きていたんでしょうか……？」

「そこは分からん……あいつは何も残さず消し去った筈だ」

「それなのに生きていた……平然と」

「二度と復活は出来ない筈だ。灰も・・・何もかも残していない」

「ならば……それなのにどうして……」

全員で考えた……だが、その時だった！

バンッ！！！！

「魔王ッ！覚悟しろ！！」

突然、扉が開きそこから勇者らしき人物達がぞろぞろと出てくる。

「……何で、勇者とかそういう職に就く人達は空気を読まないKY
野郎達なんだ？」

ボスはため息をつきながら、机に上半身を寝る様に倒す。

「何をごちゃごちゃと言っている！」

「お前達のせいでどれだけの人間が苦しんだと思うんだ！」

「……色々と面倒だから、次回で宜しく頼む」

……っという訳で、次回は一体どうなってしまうのか？
KY勇者達を打ち消せ！以上。

第十話：「寅午。ボス。アルカード。過去の記憶。」（後書き）

？あとかき？

はい、どうも！

大分更新速度を遅くしてしまつてすみませんでした。

次回は、なるべく早く更新しますので、お許しを・・・

今回は少し強引な回だったので、次回はちゃんとした回にします。

（・・・あれ？何、このデジャヴ・・・？）

それでは、次回をお楽しみに！

（あとかきも少なくなってきたな・・・）

第十一話：「どつちが悪者？」（前書き）

？前回までのあらすじ？

過去の話語るボス・・・

過去にあった出来事、寅午との因縁の出会い・・・

その全てを語る・・・

過去。

神を超える者、「アルカード」と共に事件を解決していたボスだった・・・だが！

そこに現れる一人の男。

それが、寅午だった！

そして語られたのは、自分自身の恐怖・・・そして、アルカードに取り付いた恐怖トラウマ

だが・・・！

一度話しの息を止めると、そこに空気を読まない勇者達が・・・！

色々めんどくさくなるボス！

果たして、どう切り抜くのか！？

？登場キャラ？

ボス：色々と疲労が溜まっている・・・。

スラナ：殆ど戦いに参戦しておらず、唯一無傷の状態の一人

ウル：少し軽傷だが・・・戦える。

クリナ：寅午との戦闘で、無傷で勝利したエルフ。

リナ：魔力を使い果たした・・・と思いきや、まだまだ健在。

？舞台？

【魔王城：王座】

今回は、勇者達が6名ほどが相手となる。

主なジョブは・・・

「勇者」装備：剣、盾、鎧、兜。

「僧侶」装備：杖、ペンダント、僧侶服。

「シーフ」装備：布の服、バンダナ、短剣。

「モンク」装備：ハチマキ、柔道着。

「黒魔術師」装備：杖、黒服。

「白魔術師」装備：杖、白服。

まあ、お決まりのメンバーです。
参考は初代FFを参考。

えっ？「赤魔術師は？」って・・・？

・・・こまけえこたあいいんだよ！

・・・第十一話：「どつちが悪者？」

第十一話：「どつちが悪者？」

「魔王、覚悟しろ！」

勇者達は、それぞれ武器を構えた。

勇者は、光の剣を

僧侶は、宝石が埋め込まれた杖を

シーフは、金ピカの短剣を

モンクは、己の拳を

黒魔術師は、黒い杖を

白魔術師は、光り輝く杖を

「魔王様は下がって・・・ここは、我らが・・・」

クリナは、ボスに後ろに下がる様に言う

が・・・しかし、魔王は前に出る。

「いいや、ここは俺が行くよ」

「しかし・・・！」

「最近、お前らに任せっぱなしだろ？」

「いえ、それは我らの使命で・・・！」

「それに・・・体も、ろくに動かしてないし・・・」

「魔王、十分動かしていると思います。」

（というか・・・むしろ動いていないのは、私の方・・・；）

「スラナは秘書。クリナ君とウルは警備。そしてリナは俺との遊び相手。」

「どれを取っても、俺がろくな事をしていないと思うがな？」

「何をごちゃごちゃと言っている！来ないなら・・・こちらから行くぞ！」

勇者達が武器を構え、突撃しようとした。

「まあ、待て・・・家族会議中だ。」

だが、ボスは相手が殺気立っているのに、お構いなしで話をする。

「こんな・・・舐めやがってッ！！」

モンクが一人で突進してきた。

「ちよつ！魔王様！」

「あーあ・・・」

ボスは、突進してきたモンクの腕を掴んだ。

「何っ！？」

「血の気の多い人は・・・」

そして、そのままモンクを勇者側へ思いっきり投げた。

「ぐあっ！」

モンクは、勇者達の目の前に倒れた。

「楽しい時に突然帰ってくる親ぐらい嫌いなんだよ。」

「大丈夫か！？」

勇者はモンクに駆け寄る。

「ああ・・・」

「魔王・・・侮れない奴ッ！」

「魔王様・・・そんなに相手を挑発して大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「しかしですね．．．」

そして、話が戻る。

「とりあえず．．．今日ぐらい、魔王らしい事させてくれよ」

「．．．仕方ありませんね．．．今回だけですよ？」

「恩に着るぜ、スラナ。」

「やれやれ．．．」

そして、ボスは勇者達の前に立つ。

「お待ち、話し合いの結果．．．俺が戦う事になった。」

「よし．．．ならば、覚悟しろ！」

「その前に．．．ちょい待ち！」

「．．．ッなんだ!？」

「あんた等．．．何のために俺の命を狙うんだ?」

「・・・知れた事ッ！お前が・・・」

「お前が、この世界を恐怖のどん底に陥れたからだ！」

「お前が、この世界を恐怖のどん底に陥れたからだ。」

ボスと勇者の言葉が合わさる。

「なっ・・・！？」

「ありがち設定なんだよね・・・」

ボスは、自分の頭を指でつつく。

「大抵、魔王つてのは・・・人をさらったり、村々を襲ったり、環境を破壊したり・・・色々と仕出かしすって奴だ」

「ふっ・・・自分で自覚していたのだな・・・！」

「それが全然違うんだよね・・・」今回ののは」

「何？」

「今回の件は、その逆。あんた等人間サイドが、この世界を破壊しているんだよ。」

「何を・・・嘘っぱちを・・・！」

「顔が引きつってるぞ。嘘ついているのは、そっちじゃねえか？」

ボスは両指で勇者を指す。

「実はね・・・俺、あんた等ん所の街へ行つた事あるんだよ。」

「・・・ッ!？」

それを聞いた勇者達は、驚いた。

「まあ、驚くのも無理ないわな・・・魔王が平然と街中うろつけたんだから・・・」

「そこでよ・・・あそこに女の子が居るだろ?リナって名前なんだけどな?」

” 奴隷商人の所に居たんだよ。”

もう・・・勇者達は、何も喋らなくなった。

「色々と矛盾だらけだよな」

「殺人に強盗、あわよくば奴隷商人・・・」

「そんな悪事が渦巻いているっていうのに、あんた等はそれを解決しようとしてない・・・」

「それよか、俺の命を取りに来る。」

ボスは、勇者の耳元で・・・こう呟いた。

「一番の悪者は、あんた等人間なんじゃないか？」

「う、うわあああああああ！！！」

勇者は突然剣を持ち、ボスに襲い掛かってきた。

しかし・・・ボスは剣を掴み、話を続けた。

「まあまあ・・・そう力ツカするなよ・・・」悪人さん」

勇者は、掴まれていた剣をボスの手から無理やり引き剥がした。

「黙れ・・・黙れ黙れッ！！」

パンッパンッ！

ボスは、拍手をする。

「ハッハー！悪人らしい面構えになったじゃねえか！」

ボスは、45口径ハンドガンを取り出し、構えた。

” Come on guy!! Let Rock!! ”

バンバンバンッ！！

銃が火を噴く。

勇者達は、何とか銃弾を武器で防ぐ事が出来た。

だが、モンクだけは避けるのに必死だった。

彼は武器を持っていない、持っているのは技と己の拳だけだった。

当然、ボスはモンクを狙った。

モンクはなす術もなく、頭を撃たれ・・・倒れた。

「モンク！」

「今、回復を・・・！」

バンッ！

白魔術師は頭から血を流し、倒れた。

チツチツチツ・・・

ボスは、指の代わりに銃を横にゆっくり振った。

「きつさまあああああ！！！！」

シーフが、短剣を構えて突進していく

「馬鹿ッ！止めろ！！」

バンッ！

シーフの体は防御もしていない・・・まさに的となっていた。

ボスは、容赦なく頭を撃った。

「がはっ・・・！」

残りは、黒魔術師・・・

バンッ！

いや・・・勇者と僧侶だけ残った。

「あーあ・・・一気に減っちゃったね・・・”悪人さん”」

ボスは、僧侶に向かい銃を構えた。

バンッ！！

そして撃った。

何も迷いもなく、人を撃った。

「これで、あんた一人だ。」

勇者の手から剣が抜け落ち、床に膝を付く。

「あらら？絶望感って奴かい？」

ボスは笑っていた。

だが、目だけは笑っていなかった。

ボスは、銃口を勇者の頭に突き当てる。

” 「じゃあ、ゲームオーバーだ。」 ”

バンッ！

そして、流れる静寂・・・。

床には、赤い血を流し倒れている勇者達が・・・

「ボス・・・とうとう人を・・・」

「いいや、殺しちやいないさ」

「何故ッ！？頭を撃ったじゃないですか！」

「頭しか撃てなかったんだよ。」

「えっ・・・？」

「あつ・・・」

勇者達の体を調べていたクリナは、その言葉の意味を理解した。

「銃弾が・・・”無い”！」

「ええ！？」

「これは・・・？」

「”空砲”だよ。」

「空砲？」

「殺傷能力が無い銃撃・・・だから、頭に当てる必要があつた。」

「成る程・・・頭に強力な一撃を加えれば、相手は即座に気絶で倒れる。」

「でも、この空砲用の弾は特別だね・・・」

「空砲用？」

「そう・・・あえて、相手に殺さずに生かす為の銃弾。」

「そんなものを何処で・・・」

「俺の友達からね、この空砲弾は特別仕様。もれなく頭から血が出ます。」

「どつちみち、危ないじゃないですか!!」

「アハハハ・・・念には念と装填した私が馬鹿でした・・・」

「まったく・・・！冷や冷やしましたよ!？」

「悪い悪い・・・」

「それにしても・・・このひとたち・・・」

リナは、ボスにしがみ付く

「ああ、金で雇われたか・・・己の本能で来たのか・・・」

「今になっては分かりませんね」

「どうするの・・・?」

「もち、人間側にお返しします。」

「じゃあ・・・リナにまかせて・・・」

そう言って、リナはポケットからチョークを取り出し、陣を書き始めた。

「何を書いているんですか・・・?」

スラナは、興味があるのか・・・まじまじと見る。

「そのひとたちを、もとのところにかえすためのもの・・・」

「つまり・・・召還陣を書いてるんだな？」

ボスの言葉にリナは頷く。

「もう、そんな事まで・・・」

「リナちゃんって天才だね！」

「いや・・・天才を越してるでしょ・・・」

ウルとクリナの言葉に少しだけ、リナの頬が赤くなる。

「おーおー喜んでる喜んでる。」

そして、陣が完成した。

「そのひとたちを、まんやかに・・・」

言われたとおりに陣の上に勇者達を置く。

「陣の文字を消さないようにな」

「了解です。」

そして、勇者達を全員置いた。

「よし、リナ。始めてくれ」

リナは頷き、陣の前に立つ。

そして、呪文を唱え始めた。

陣は光だし、光の粒が宙へ舞う。

「おお・・・これは凄い・・・」

「静かに・・・彼女は集中しています。」

「・・・・・・・・・・。」

”テレポート！！”

バシユウウウウン・・・！

最後に大きな声で唱えた言葉で、勇者達は光に包まれ・・・消えた。

「・・・せいこうした・・・ぜんいん、ぶじにもどった。」

「ご苦労様、大丈夫か？」

ボスはリナの心配をした。

「うん・・・だいじょうぶ。」

「そうか、偉いぞリナ！」

ボスは、リナの頭を撫でた。

その頬は、さつきよりも赤かった。

第十一話：「どつちが悪者？」（後書き）

？あとかき？

はい、どうも、零式です。

今回は、ちょっとエグい内容でしたね・・・^^；
すみません、こんな頭しかなくて・・・

戦闘シーンでは、デビルメイクライ4より・・・「The Time Has Come」を聞きながら作業しました。

触手は使いませんでした。銃だけ・・・；

てか、ボスは普通の人間って設定の筈なのに・・・

「触手使える」、「銃持つてる」、「身体能力あり。」

・・・大丈夫、ぎりぎり・・・うん、ぎりぎり人間だ。

そう思わないと、やっていけませんwww

そんなこんなで、次回は・・・まだ作成中です。

いい加減、この小説終わらせないと・・・；

あと少しだけ、零式にお付き合いください。
それでは・・・

第十二話：「囚われの王子様。」（前書き）

？前回までのあらすじ？

寅午について話をしていたボス・・・。

だが、そこに（空気を読まない）勇者達が城に侵入してくる！
それに呆れるボス・・・。

スラナ達は「自分達で始末する」と言うが、ボスはそれを拒否。

「何もしないのは俺のポリシーに反する」

ボスは、己のポリシーを守るべく勇者達に立ち向かう・・・！

そして・・・頭に銃弾を撃ち込み、全員倒したボス・・・

スラナは「ボスが絶対しない筈の”殺す”行為を行った」と思った
が、それは間違い。

実は、撃ち込んだ銃弾は全て”空気砲弾”だった。

勇者達は全員気絶状態のまま、リナの転送魔法により、元の場所に
戻された。

？登場キャラ？

ボス：主にやる事。「リナの遊び相手」「仲間集め」・・・それ位。

スラナ：魔王秘書。戦闘では中々の物だが、全然戦闘に参加出来て

いない。

ウル：ちゃんとサボらずに警備をする良い子。

クリナ：弓と剣・・・最近では、銃を使いこなす戦闘のプロ。

リナ：幼い体をしているが強大な魔力を誇り、難しい魔法をも簡単に理解出来てしまう。

？舞台？

【魔王城：王座】

今回は、寅午&勇者襲撃の数日後です。

物語の終盤へと突き進む・・・

・・・第十二話：「囚われの王子様。」

第十二話：「囚われの王子様。」

ここは、ミスラカル城。

町の全てを監視する所であり、魔族対策の城でもある。

以前、魔王と戦った勇者達は牢獄に居た。

コツコツコツ・・・

足音が聞こえ、国王が牢の前に立つ。

「こ、国王様・・・」

「随分と無様な姿だな、お前達。」

「す、すみません・・・魔王討伐に失敗してしまいました・・・だが！」

「『次こそは』・・・とでも言いたいのか？」

「そうです・・・ですから・・・！」

国王は、勇者の顔を掴んだ。

ギリギリ・・・

勇者の顔が締まる。

「あ……が……国王……さ……ま……」

「ふむ……私も、そこまで悪ではない」

ズズズズズズッ……

国王の腕から黒いモノが……

【お前、私の”入れ物”になれ。】

勇者の口に黒いモノが入りこみ、勇者は苦しみだした。

「あぐうう……！ 何……を……？」

そして、苦しみが解けると……

「……主、ご命令を」

勇者の目は全部が黒へ染まり、肌の色も褐色の肌になる。

【宜しい。では、手始めに後ろのゴミ共を始末しろ】

「……了解」

勇者の腕が鋭い槍に変わる。

「ぎゃあああああああああああああああ……！！！！！！

「！」

牢獄に断末魔と共に沢山の血が壁にこびりつく・・・

国王・・・寅午の頬にも血が付く

【ふふふ・・・ボス、今度は私の腕が貴方を殺しに行きますよ？】

ふはははははは！

寅午の笑い声が、断末魔の後に聞こえた。

？時同じくして、魔王城・・・？

「そつえば・・・」

本を読んでいたボスが、ふと口を開く

「どうしました？」

「いや・・・この前、ニンスク街に行ってたじゃん？」

「ああ・・・勝手に行ったっていう・・・」

「そう、そこで・・・リナと出会った所の奴隷市場の商人が言って

「ただが・・・」

- - - - -

・・・それは、数日前に遡る。

「良いから、その娘をこちらに渡してくれませんかね・・・」

「すんなり渡してくれりゃ、そっちは何事も無しで終わるし、こっちも”後々楽しめる”・・・」

「ここは、戦場だぜ？お客さん」

「幾ら、戦場地帯じゃないと言っても、この街は戦場と変わらない」「何一つ”変わらないんだよ”お客さん。」

「それに、こんな事は戦争じゃあ”よくある事”なんだぜ？」

「よくある事・・・ね」

「確かにあんたの言う通りかもしれんな・・・」

「きひひ・・・そうですね、だからそいつを・・・」

「だが・・・」

「どこまで行っても、そいつは”盗人の理”だ」

「もう少し早く”この世界に来るべきだった”と、今では後悔しているよ」

「お前みたいな奴らは、戦争を言い訳にして国の名誉に泥を塗る」

”ただの追いはぎだ。”

「いえ、その情報は大変貴重ですよ」

「そうなの・・・？」

リナが二人の話に入ってくる。

「ええ、王子は言わば我らとの共存への鍵・・・王子が居なければ・・・」

「戦争は続く・・・って事か」

「それよか、だんだん収集が付かなくなります。」

「うーん・・・何時か助けようと思っではいたが・・・」

「それにしても、豪く時間が長いですね・・・」

「まあ、色々あつたしな」

「たすけるの・・・？」

「ああ、助けると決めたからには助けないと・・・」

「じゃあ、そとのふたりをよんでくる・・・」

リナは、外で警備をしているウルとクリナを呼びに向かった。

「それじゃ、俺達も準備をするか」

「はい」

「||||||?数分後?||||||」

「大丈夫なんですか? 人間達の城へ殴りこみに行くなんて・・・」

「そうですよ・・・幾らなんでも無茶が・・・」

「いや、今回の件は何としても王子を救出しないと・・・」

「ええ、この戦争は終わりません」

「・・・分かりました、何処までもお供します!」

「元攻撃部隊長の名において、魔王様を必ずやお守りしますッ!」

「二人共・・・ありがとう。」

ボスは、笑顔でお礼を言った。

「それでは・・・行きましょうか」

「ああ・・・向かうはミスラカル城!」

5人は、ミスラカル城を目指し・・・向かった!

「……………？その頃……………」

トトトトトトトトツ……………

馬の走る音が沢山聞こえる。

そこには、馬の集団が魔王城を目指し、馬を走らせていた。

先頭には、勇者。

後の後方の兵士達の目は、黒く染まっていた……………

「……………？時同じく……………？……………」

5人は、『戦場の境界線』へたどり着いていた。

「おお！魔王様だッ！」

「一同！魔王様に敬礼ッ！！」

ビシッ！

魔族の者達は、ボス達に敬礼をする。

「やあ、皆様苦勞様。」

「いえ、これが我々の仕事ですから……………」

「そうか・・・そんな皆に言うことがある。」

「はい・・・？、と・・・言いますと？」

「そこは私が・・・」

スラナが横から入り込み、兵士全員に事情を説明した。

それを聞かれた兵士達は、納得はしたが・・・ざわめき始めた。

「そのような王子様が・・・」

「いよいよ決戦の時なのか・・・？」

兵士達の不安は、少しずつ上がっていく・・・

「心配するな。王子を助けたら、すぐに撤収する」

「その後は・・・話し合っのですね？」

スラナが確認するように聞いてくる。

「ああ・・・」

「……分かりました。」

「魔王様、気をつけて行ってらっしゃいませ！」

兵士達は、ボスに敬礼をする。

「ああ、皆も・・・気をつけてな。」

ボスも敬礼で返した。

「じゃあ・・・行ってくる。」

「はい、お気をつけて・・・!」

ボス達は、歩き出した。

だが・・・

「敵襲ううう!!」

遠くから、沢山の敵の軍団がやってくる!

「ハア・・・どうして、こつも敵さんは空気を読まない奴なのかね
」

「魔王、これがイベントって言う物です。」

「スラナ・・・メタ発言は控えろよ?」

「御意。」

敵を乗せた馬が、ボス達の前に止まる。

「ありゃ？ お前は確か・・・KY悪人さんじゃないか。」

「……………」

「やれやれ・・・今度こそ、悪人に成り下がったか？」

「…………殺れ。」

剣を持った兵士達が、ボス達に向かい襲い掛かってきた！

「成る程。お城に行かせる気は、さらさら無いって事か」

ボス達は、戦闘体勢をとった。

兵士達が、ボスに襲い掛かる。

「甘いよ。」

バキィ！

ボスのストレートが炸裂する。

（ふむ・・・こいつ等・・・）

ボスは、兵士に一撃を与えて何かを理解した。

「スラナ、ウル、クリナ、サラ。…………下がってろ。」

ボスは、銃を取り出した。

「魔王、また空砲弾を？」

「いいや、今度のは実弾だ。」

（……えっ？）

ボスは、高く跳んだ。

前回、勇者達に食らわした攻撃と同じ技を……。

敵側の周囲は、たちまち血の海と化した

ボスが着地した所を、兵士達は剣で突き刺した！

だが……

そこには、ボスの姿が無かった。

「こつちだ、薄のろ。」

ボスは上空で銃を構えながら体を回転して撃つ。

鉛球の雨が兵士達の肉を引き裂く……！

そして、兵士の一人の頭に足を乗せ、勇者目掛け跳んだ！

バンバンバンッ！！

銃声が鳴り響く、それと同時に勇者は腕を剣に変えて銃弾を全て斬る。

「へえー・・・腕を剣に変えたの？」

「…………死ね。」

勇者の攻撃が、ボスの頭すれすれに通り過ぎる。

ボスが体を捻り、かわしたのだ。

「あめえーよ、馬鹿。」

バンッ！！

ボスは、勇者の肩を撃ちぬいた。

勇者の腕が一気にだらーん・・・となる。

「……………」

（こいつ・・・やはり・・・）

勇者は、もう片方の腕を剣に変え襲い掛かってくる！

「チィ・・・！」

だが、リナだけは理解できた。

「なるほど、いっかいからだをバラバラにして、そのぶぶんぶんにまりよくをちゅうにゅうにゅうしたんだね？」

【ほう・・・ボスとそこのお嬢さんは、勘が鋭いな・・・。】

「まさか、リナが理解できるとは、俺も予想外だった・・・」

【ふふふ・・・では、私の体の謎を解いたご褒美に……私から、恐怖^{ウスマ}をプレゼントしてあげよう。】

「いるか、そんなもん。」

【まあまあ・・・受け取ってくれたまえッ！！】

寅午は、手からテレビの砂嵐のような物体を飛ばしてきた！

「ちっ・・・！」　　”バグ”か・・・ッ！」

”触手よッ！　刀と化せ！！”

ボスは、ピアノ線状の触手を固め刀に変えた。

「ぶった切るッ！！！」

一線。

刀が、砂嵐を切り裂いた！

斬られた砂嵐は、ヒビが入り・・・ガラスが割れるように碎けて散った。

【ほう・・・その腕は変わらないのだね。】

「ああ、今回は誰かさんが怒りに任せて俺に怪我を負わせたせいで、ご披露出来なかったけどな」

【おやおや・・・嫌味というものかね？ それは。】

ガキインッ！！

ボスの刀と寅午の鋭い爪が、ぶつかり合う。

「そうだよ、クソつたれ野郎。」

【やれやれ・・・以前と変わりませんね、君は……。】

二人は、一旦距離を離れた。

（さて・・・久々の寅午戦だが……あいつ、能力値が下がってるな。）

【どうしました？ 作戦でも考えている途中ですか？】

（多分、あいつは生き残る為に自らの体を解体したが・・・以前ま

での力だけは、戻らなかったようだな。」

【早くしてください。私は待たされるのは、あまり好みではないので・・・】

（だとしたら・・・）

ダッ！

ボスは、寅午に向かい走り出した。

【そうですそうです。向かってきなさい、イノシシの如く】

ボスは姿を消した・・・！

【分かっていますよ。上か・・・後ろでしょう？】

「いいや、真正面さ。」

【おや・・・？】

ズガアアアッ！！！！

ボスの一刀が、寅午の入れ物……勇者の肉体を切り裂き、吹き飛ばした……！！

【ふう……効きましたよ、とても。】

寅午は、ガタガタとなる足を無理やり立ち上がらせる。

「おいおい、立つなよ。」

ボスは、寅午に刀を向ける。

【いけませんよ？ 人に向かって、刀を向けては・・・】

「てめえは悪魔だろうが、その上……俺とアルカードに害を加えた
しな。」

【害を加えたとは……侵害ですねえ……】

「黙れ。いい加減、俺もお前の馬鹿面を見るのが飽きてきた。」

ボスは銃を構えた。

「さつさと両腕共リョウウデトモ……死にな。」

バンバンバンバンバンバンッ！！！！

銃弾が寅午の体を撃ちぬく

寅午の体は、人形のように踊る様に見えた。

そして……銃声が止み、辺りが静かになる……。

【やれやれ……今回も、貴方の勝ちですね……ボス。】

「ああ、待ってる。今から本体であるお前の頭……取りに行くから

よ。」

ボスは、ボロボロになりながらも立っている寅午に向かって指を差す。

【ふふふ・・・楽しみにしてますよ？】

勇者の体から、不気味なオーラが消え去り……勇者は、その場に倒れこんだ。

「……………さあ、行くぞ。」

ボスは触手を解き、銃をホイスターにしまう。

「ボス……………何故、その人達を撃つたのですか？」

「……………もう、人間じゃないからだ。」

「人間……………じゃない・・・？」

「ほら、行くぞ。」

？ボスは、ミスラカル城を目指して歩き出した……………。

第十二話：「囚われの王子様。」（後書き）

？あきがき？

どうも、零式です。

さあ、いよいよ終盤へLet・Go！ そんなこんなで、十二話突入。

色々と長かったな〜・・・おっと、この台詞は最終回前に言つことですね・・・^^；

さてさて・・・詳しく解説をすると・・・

寅午は、自らの体をバラバラにして生きながらえた。

・つまり、これは……

1、バラバラに解体。

2、魔力を込める。

3、半霊状態になる。

こんな感じ。

リナの台詞が読みづらくてすみません……。
（設定上、リナの台詞はひらがなとカタカナのみです。漢字が使えない……。；）

次回は、いよいよ王子救出へ・・・。

最近、アメブロにて小説を連載開始しました。

内容は、ポケモン不思議のダンジョンをベースとした小説です。

「Zeroの境界線」でググるべし。

第十三話：「悪があれば、善もある。」（前書き）

？前回までのあらすじ？

リナの魔法により、ミスラカル城へ戻された勇者達
そこで待っていたのは地獄だった・・・。

国王……寅午は勇者に「自分の一部」として、“腕の部分”を取り
付かせる。

そして勇者は……腕が剣や槍などの武器に自在に変形できる能力
を身につける……。

その頃……ボス達は、以前にボスが街へ出かけた際に手にした情
報……

前王子の存在である。

王子が、もし生きているのであるのならば……

魔族と人間は手を取り合うようになるだろうとスラナは予想する。

そして、「王子救出大作戦」が開始された。

まず、ボス達は人間達の所へ向かうべく……戦場の境界線へと足
を踏み入れる

そこで兵士達に事情を説明する。

そして兵士達から敬礼をされ、ボスも敬礼し返し立ち去ろうとする

と・・・

そこに勇者を先頭にした人間の部隊が奇襲にやってくる！

ボスは、なんとか人間軍を倒し勇者を残すまで追い詰めるが・・・
なんとツ！ 勇者は笑いだしたと思いきや、突然身体がグニャグニャに変形していくではないか・・・！

そして勇者の体に変形していき現れた男……寅午。

ボスと寅午との対決となる。

戦いの中。

寅午は己の体をバラバラに解体し、魔力を込めて生きながらえたと
いう推理を見事に当てたボス。

虎午は、己の体を解体したデメリットが発生したのか・・・以前よりも
全能力が低下していた。

そこを見事に衝いたボス！！

見事、寅午を倒したのであった！

そして・・・ボスが消えていく寅午に吐いた台詞・・・

「待つてろ。今から本体であるお前の頭……取りに行くからよ。」

ボス達は、人間達の領域へ足を踏み入れるのであった。

？登場キャラ？

・ボス：二代目魔王。人間だが、何故か魔王にされてしまう。

・スラナ：魔王秘書。しっかりした性格だが、まだまだ未熟な所がある。

・ウル：ワーウルフの少女。明るく元気な性格で、何故か魚好き。

・イグナス・クリナ：元 ジンゾクコウゲキ プタイタイチヨウ 人族攻撃部隊隊長。現在は城の見張り役。

・リナ：元奴隷少女。幼き身体をしているが膨大な魔力を備えており、賢者レベルの書文をあっさり解読してしまう。

・寅午：ボスと因縁がある敵。一度死に掛けるが、自らの身体をバラバラに解体し魔力を込めて生きながらえる。

？舞台？

【ニンスク街】

再び戻ってきた街中・・・

そういえば・・・スラナ達の活躍を、全然披露していないと気づき今回は、スラナ達の活躍回とさせて頂きます。

……実は・・・このニンスク街編。
あと、もう一話分残してます・・・。

・
・
・
第十三話・・・『悪があれば、善もある。』
『

第十三話：「悪があれば、善もある。」

ここはニンスク街・・・。

ここでは、毎日と言って良いほどの悪事が起こっている
ボス達は、それぞれ変装して潜入していた・・・。

「よし・・・何とか、溶け込んでいるな。」

「魔王、それは良いんですが・・・。」

「何だ？」

「この姿は如何なものかと・・・。」

ボスの姿は、前回同様にアサシンコスチューム

スラナの姿は、メルティブラッドのリーズ＝バイフェのコスチューム

ウルムの姿は、Fate/stay nightの遠坂 凛のコスチューム

クリナの姿は、Wonderful Worldのリユウザのコスチューム

リナの姿は、Tales of Gracesのソフィのコスチューム

まさにコミケ会場にでも行くかのようなコスチュームであった。

「魔王様〱何処から、こんな服装を？」

「ウル、そこん所を気にしたら負けだぜ？」

「負けなんですか。」

「そうですね。」

ボスはキリツと真顔で答える。

「わたしのは、ちょっとかわいい・・・」

「ああ、良く似合ってるぞ。」

「……ありがとう。」

リナは、少し頬が赤くなりながら礼を言った。

「私に関しては何故ポニーテールナニユエなのですか？」

「スラナの場合は、そのコスチュームがぴったりなんだよ」

（まあ・・・最初はシオン〱エルトナムのコスチュームにしようか悩んだが・・・）

「その為、ポニーテールにしくちゃならなくてな」

「理由がいまいち理解できませんが・・・まあいいでしょう。」

「私の場合は、スラナさん達と豪く異なった格好ですが・・・」

「ああ、最初は別の服装も考えたが・・・クリナはすっきりした服装が似合いそうでな」

（学ランだと、この世界には違和感すぎるしな・・・）
「スタンダードな服装だろ？」

「まあ、動きやすいから良いですが・・・」

「じゃあ、次は私ですね。」

「ウルの場合は、随分と悩んだが、そのコスチュームにしたよ。」
（本当は色々あったが、どれも雰囲気合わない奴ばかりだったよね・・・）

「・・・つで、魔王はアサシンの格好ですか」

「えっ？ アサシンって、この世界にも存在するの？」

「ええ、隠密任務や色々・・・」

「ああ・・・」

（この前見た、同じく似た服を着ていた人はアサシンだったんだ・・・）

「それにしても・・・ここは、空気が少し重いですね・・・。」

「気をつける、ここニンスク街は『悪が詰まった街』だからな」

「.....ここ、あんまりすきじゃない・・・」

リナがボソツと呟く

その顔色は少し悪かった……。

（そうか……確か、ここには……）

「リナ。なるべく俺の傍に居ろ。」

「……うん……。」

「しかし……先ほどからちよくちよくと見ますが……」

「ああ……ここでは、盗み、誘拐、奴隷商人、カジノ……色々
と人間の悪い面が表に出ているんだ、この街は……」

「人間の悪い面……」

「さあ、長居は無用だ。行くぞ」

「了解。」

ボス達が先へ進もうとした。
その時であつた……

「きゃあああああああ！！」

何処かで悲鳴が聞こえた

「何だ、今の悲鳴は！？」

「けっこう近くからでしたね」

「どうするの？」

「助けに行くぞ。」

ボスは、声がした方へ向かっていった。

「あつ！ 魔王様！ お待ちを！」

スラナ達は、ボスの後を追いかけていった。

ボスは、駆けつけると……そこには、数人の男達が一人の女性を浚おうとしていた。

しかも、もう一人居る男には一人の男の子が・・・

「へへへっ！ この女うつぱらって、一儲けだぜえ！」

「止めてッ！」

「姉ちゃんを放せッ！！」

「うるせえ！ 大人しく俺達の金になりなッ！！」

男の子は、必死の抵抗をするも空しく・・・口を塞がれてしまう。

「ケント！！！」

「さあ、俺達と来い！」

「せーの・・・」

”凹めッ!!”

そこへ、ボスの一撃が女性を捕まえていた男の顔面に見事ヒットした。

男は壁にぶつかり意識を失った。

「な、何だてめえは・・・!!」

他の男達は、一瞬の出来事に動揺していた。

「俺か？俺は・・・」

「二代目魔王だ。」

「何だと!？」

「この野郎がッ!!」

一人の男がボスに向かい攻撃を仕掛ける・・・だがッ!

ガキンッ!!

一つの剣が割り込む！

「まったく……魔王様、まだ敵陣の手前辺りですぞ？」

「ああ、悪いなクリナ。」

「今度は何だッ！？」

男は、クリナから距離を離す。

「やれやれ……お前の様なゲスが、この世に存在するとは……我ながら呆れる。」

「こんの……！ 舐めるんじゃないやねええええ……！」

男は、剣を振るい落とす。

しかし、クリナは一瞬にして姿を消す！！

「何ッ！？」

「後ろだ。”薄ノ口”」

男は振り向こうとするが、時すでに遅し！

クリナの連続切りが男の身体を切り刻むッ！！

「ふう……。」

「な、な・・・何なんだお前らああああ!!」

もう一人の男が襲い掛かってきた。
だが、これも・・・

「させません。」

何と!

乱入してきたスラナは、男のナイフを指一本で受け止めた・・・!
そして、そのまま片方の拳で、男の腹部を思いっきり殴った。

(藍染?)

ボスは、その光景を見て・・・昔、漫画で見た。
藍染という人物を思い出す。

「はあ・・・どうして、こうも人間はもろく、弱いのでしょうかね
」・・・」

「まあ、それが人間というモノだと思うぞ?」

「魔王、一応あなたも人間でしょ?」

「うん、まあ・・・そうだな。」

「じんのやろっ・・・!」

男は、背中に背負っていた斧を取り出す。

「殺してやるうううう！！！」

「させないよ！」

そこへ、ウルも到着し乱入する。

「そう何度も乱入されて倒されてたまるかッ！！」

男は、物凄い勢いで斧を振り下ろす。

だが、ウルは物凄いスピードでかわした。

「へっへーん、凄いでしょ？」

「なっ・・・！？」

「てりゃああああ！！！」

ウルのキックが、男の顔面に直撃し・・・そのまま地面に倒れこみ、意識を失う。

「ブイツー！」

ウルはボス達に向かって、Vサインをする。

「ぐおおおおお！！！」

その後ろで、男がウルに向かって攻撃しようとしている！

「おい！ ウル、後ろッ！！」

「ふえ？」

「死ねえええええ！！！」

ボオオオー！！！！

男の身体が爆発した！

「きをつけて・・・」

リナが魔法で攻撃したようだ。

「ごめんね、ありがとう！ リナちゃん」

ウルは、リナにお礼を言う。

「な．．．何だ！？ お前らは．．．！？」

最後に残った男の子を捕まえていた男が脅えながら質問してくる。

「俺達か？俺達は……」

ボスの触手が、木刀の形に変形する。

「魔王一家だッ!!」

ボスの強烈な一刀が男を吹き飛ばした！

男の子も一緒に吹き飛ばされてしまう。

「ケントー!!」

しかし、落ちてくる男の子をボスは無事キャッチする。

男は、そのまま地面に叩きつけられる。

「どうも、ありがとうございました・・・」

「いえいえ、ただ単に当然の事をしたまでですから」

「……あの・・・先ほど言っていた”魔王”とは・・・？」

「それはただの戯言です。」

スラナが話しに入ってくる。

「まあ・・・そんなもんですわ。」

「そうですか・・・」

「家はどちらですか？ 宜しければ、そこまでお送りしますよ?」

「いえ、そこまで親切にされなくても大丈夫ですよ・・・」

女性は、何やら必死に断る。

「そうですか？　なら・・・これで失礼しますが・・・」

「はい・・・それでは・・・」

弟を背負った女性は、そのまま去っていった。

「……………後を追うぞ。」

「やっぱりですね…………了解です。」

ボス達は、女性の後をこっそりと追いかけた…………。

そして、人気がまったく無い路地裏へたどり着く…………

「何で、こんな所に…………」

「魔王、あそこを…………」

スラナが指差す方に、先ほどの女性がこそそと何やら周りを見ていた。

ボス達は、バレないように物陰に隠れて気配を消す…………。

そして、女性は壁の一部を押すと…………

カチンッ！

目の前の壁から鍵が外れる音がする……。

そして、そのまま壁を押すと……何と、壁がドアのように開いたのだ……！

女性は、ドアにこそそと周りを確認しながらドアの向こうへ進んでいった。

ボタン……。

そして、壁のドアが閉まり……再びロックが掛かる。

ボス達は、物陰から出てきて先ほどの壁の前に集まる。

「隠し扉とは……」

（忍者屋敷？）

「人間の技術も舐めたものじゃありませんね……」

「どうするの……？」

「うーん……さっき見たとおりに壁を押してみるか」

ボスは、先ほど女性がやった様に壁の一部を押す。

すると、先ほどと同じ様に壁のロックが外れる音がする。

「よし、行くか。」

「了解。」

ボス達は、ドアの向こうへと進んでいった。

ドアの向こうは不思議な所だった。

あっちこっちでネジや歯車が回り、機械がプシュプシュと音を立てながら蒸気を吐き出す。

「な、何だ……ここは……？」

「妙に息苦しいですね……」

「見てください、道の先に もう一つドアが……」

クリナが指差す方に、またドアが……

「行くぞ……。」

ドアを開けた。

そして……その先にあつた物は……

辺り一面、沢山のおもちやが埋め尽くされた広場が……

「これは……」

「誰ですか!？」

横から声が聞こえる。

振り向くと、そこには先ほどの女性が立っていた。

「あなた方は・・・!」

- - - - -

「そうですか……それで後を……」

「すみません、ストーカーみたいな事をして……」

ボスは、先ほどの女性・・・”ミレガ”と、お茶を飲みながら話をしていた。

他のメンバーは、広場に居る子供達といっしょに遊んでいた。

「しかし……何故、こんな所に広場が……」

「最近、奴隷商人などの被害が多くなっていますね……」

「ここは、そんな奴隷商人達から子供達を守る為に私の…父が作った場所なんです。」

「君のお父さんが……?」

「ええ、今は寝室で寝込んでいる状態で……」

「病氣かい？」

「はい、まあ……ただの風邪なんですけど」

「中々ちゃんとした薬を買ってお金も無くて……」

「しかも……肝心の薬屋も、ちゃんと売っていないしな。」

「はい……下手をすれば、毒薬を持たされてしまうから……」

「そんなんで、よく薬屋が勤まるもんだ。」

「私に出来るには、父の看病と子供達の面倒ぐらいしか……」

「……ミレガさん。」

「はい？」

「聞いていたと思いますが、私……実は”魔王”なんですよ。」

「ああ……先ほど言っていた……本当……だったのですか」

「怖くないのですか？」

「いいえ、最初は変な人だなぁと思いました……」

「ですが、とても心優しい方だと今は思っています。」

「そうですか……」

（変な人……）

「私、実はここへ来たのは一つの目的があるのですよ。」

「何ですか・・・？」

「以前、ミスラカル城に居たとする王子を助けに……です。」

「王子様を！？」

ミレガの大きな声で子供達が驚く

「あつ……すみません、突然……」

「いえ、驚くのも無理はないでしょうね。」

「しかし・・・何故、王子の事を知っているのですか？」

「……王子様は、私達のような人の希望の光なんです。」

「希望の光……。」

「王子様は、国民達の前で罪人が住む街を作らず、平和で皆の笑顔で絶えない街を創ろうと……」

「希望に満ち溢れた街……という訳ですね。」

ボスの言葉にミレガは頷く

「それじゃあ、存在を消されるはずだな……。」

「お願いします！ 王子様を……我々の希望の光をお助けください！」

ミレガは、必死に頭を下げてお願いをする。

「頭を上げてください、先ほど言ったとおり・・・私は王子を助ける為に来たのです。」

「もう・・・人間と魔族の戦争や・・・この街が汚れた街にならぬ様に……」

〃〃その頃、ミスラカル城では……

【例の計画は進んでいるのですか？】

「はっ……計画は順調に……」

【では、半時間後に計画を実行しなさい。】

「御意。」

一人のアサシンが暗闇へと消える。

【ふふふ……ボス、私の元へ来るための道を作って差し上げましょう。】

城から寅午の不気味な笑い声が聞こえていた……。

？ 特別牢獄室？

一人の青年が牢屋をガタガタ揺らす。

「クソッ！」

その青年は綺麗な金髪をしており、両目はエメラルドのような輝きをした目をしていた。

そう……彼こそ、今回の事件の鍵となる者。

名は”ミルハイツ”ミスラカル”

現在、彼は城のとある牢獄に監禁されている……。

「何とかして、あいつの計画を阻止しなければ……！」

そんな中、今……ボス達と寅午との決着への戦いが始まろうとしていた……。

第十三話：「悪があれば、善もある。」（後書き）

？あ트가き？

どうも、零式です。

今回は、スラナ達の出番を（ちょっとだけ）出しました。

次回も、もっと出せたらいいな……

さて……とうとう登場しました。

監禁王子”ミルハイツ”ミスラカル”

名前は……実は適当だったりする。

（本当は短い名前にしようと思いましたが、何故か長くなってもうた……）

今回は、いよいよ敵の本拠地に潜入！

最終回まで、もう少し……！

最後まで、どうかお付き合い願いたい。

（罪）＜無理ッ！？（・・・）＜えっ！？

本当をお願いします。マジでお願いします。

あと、望ましいのであれば……

誰でも良いので「突然ですが、貴方は今から魔王です。」のイラストを書いて欲しい。

願望だらけでスンマセン……

でも、イラストは募集中なので、秘密基地のイラストコーナーにでも投稿を・・・

（報告は、感想でお願いします。）

えっ？ 自分で書けばおk？

（#・・）<そんなスキルがあつたら、募集なんかせんわい！

本気でイラストお待ちしてます。
それでは……。

（現在、過去の小説の編集もしているので・・・良かったら見てくださいまし）

第十四話：「決着の地への招待。」（前書き）

？前回までのあらすじ？

”戦場の境界”を無事抜けたボス達は、以前にボスが来た事がある
ニンスク街に足を踏み入れる。

そこで出会った女性 『ミレガ』

ボス達は、ミレガを助けるが……彼女の様子が おかしい事に違和
感を持ったボスは後をつける。
そこで、ボス達が見たのは……

そこには、沢山のオモチャと沢山の子供達が居る大きな地下広場だ
った。

そこで、ミレガと再び遭遇する。

そして……王子救出の覚悟をボスは改めて心に決めるのであった。
動き出す寅午。 特別牢獄でもがき苦しむ王子 『ミルハイツ
』ミスラカル』

果たして この先に待ち受けるモノは何なのか……

？登場キャラ？

・ボス：二代目魔王。 ファミリー 家族の皆を何よりも大事にしている。

・スラナ：魔王秘書。 ボスに潜む力とカリスマに日々驚かされて
いる。

・ウル：ワーウルフ。同族達から捕虜の様な扱いをされていたが、ボスに助けられる。

・クリナ：元攻撃隊長。現在は、ウルと共に城の警備をしている。

・リナ：魔法使い。賢者並みの魔力と知識を持っている色々とな少女。

いよいよ敵の本拠地へ潜入！

……っと、行きたい所ですが・・・その前にやるべき事があります。

それは、どうやって潜入するかフラグです。

そんなわけで、今回は潜入へのフラグを公開します。

どんな展開は・・・見てのお楽しみ。

・・・第十四話：『決着の地への招待。』

第十四話：「決着の地への招待。」

ボス達は、城へ乗り込む準備をしていた。

「いよいよ、寅午との再度となる決着か……」

ボスは、少しばかり緊張の色を見せていた。

「魔王、何時もどおりで構いません。ですが、全力で行きましょう！」

そこへスラナの渴の言葉が入る。

「スラナ……」

「そうですね、魔王様ッ！」

「どんな戦でも、緊張の色を見せれば相手に隙を与えるような物……」

……

「何時もと変わらぬ振る舞いで挑んでください！」

「おそれちゃだめ……」

「ウル……クリナ……リナ……」

皆の言葉が、ボスに勇気を与えてくる。

そして、思い出す言葉。

リナが言った言葉。

ボスが愛し、彼女もボスを愛した女性。

その名は『サラ』

彼女と初めて出会い、共に強敵と戦った時に彼女が言った言葉。

『恐れてはいけない。』

その言葉が、今でもボスの心の奥で呟く

「……ああ！ 全力で、寅午の奴をぶっ倒してみせるッ！」

「それでは、行きましようか」

そして、ボス達はミレガ達と別れをして地下広場を後にする。

表に出ると、曇り空なのに少しばかり眩しく感じた。

「よし、一気に行くぞ！」

「……はいッ！」「」

ボスの掛け声と共にスラナ達もボスの後に付いていく
すると……

ドオオオオオオン！！！！

突然、大きな爆発が街の彼方^{アチ}此方^{コチ}から発生する！

「な、何だッ！？」

ボス達は、爆発が起きた場所へと急ぐ

そして、爆発が起きた場所

『ニンスク街の中央通り』

その周りが爆発して、爆発に燃え上がった炎が道のように
なっていた。

「こ、これは……！」

ボス達は、中央通りに辿りつき炎の道の前にある物を見て驚いた。

そう 炎の道が示していた場所にあったのは、ミスラカル城だ

ったのだ。

「魔王、どうやら……相手の方から招待しているようですよ？」

「寅午 あいつらしい誘い方だ。」

ボスは、やれやれ顔で納得する。

「いよいよ何ですね……」

「ああ。」

ミスラカル城では、寅午が炎の道を眺めていた。

【ふふふ……少しばかり、お茶目が過ぎましたかな？】

【来なさい、ボス……】

「回りくどいのは無しの本^{マジ}気の戦いだ。」
【回りくどいのは無しの本^{ホンキ}気の戦いですよ。】

第十四話：「決着の地への招待。」（後書き）

？（OWO）＜アトオガキディス！（訳：あとがきです！）？

どうも、最近オンドウル語が日常会話になっっている零式です。
何時変身ベルトなんて入手したのかしら……？

さて、今回は酷い位短くてすみません。
チャットで色々指摘されて頑張ってたならこんな感じにな
っちまった。

（私、小説向いてないのかなあゝ・・・）

次回は、いよいよ回りくどい事なしのタイマン勝負です。
もうそろそろ最終回が近い！

こんな私ですが、色々とよろしくお願いしますゝ！

今更ながら、こんな小説を見てくださる方々ありがとうございました！
す！

（大分前まで感想制限していた事に気づかなかった・・・本当にす
みません。）

感想等がありましたら、ぜひともお願いします！厳しい指摘バツチ
来いッ！

第十五話：「再度の対面と決着を……。」（前書き）

？前回までのあらずじ？

前回、ボス達は地下広場を後にして地上へと戻った。
だが……！

そこに突然の大爆発が街の中央通りから発生する！
急いで駆けつけたボス達が目にした物は

爆発により炎上した建物の炎で作られた一本の道だった。

そして、その先にあるのはミスラカル城

いよいよ、ボス達と寅午の決戦が始まろうとしていた！

？登場キャラ？

・ボス：いよいよ寅午との因縁の戦いへと向かうッ！

・スラナ：魔王秘書としてボスと共に戦いへと挑む

・ウル：魔王の為に共に戦うことを覚悟する。

・クリナ：魔族の平和、人間との共存の為に戦いの地へ

・リナ：ボスの為に共に戦いに向かう

・寅午：ボスとの因縁の戦いへと誘い込む。

・
・
・
第十五話：『再度の対面と決着を……』
□

第十五話：「再度の対面と決着を……。」

ボス達は、ミスラカル城門前へとやってきた。

「ここが敵の本拠地ですね……」

「ああ……そして、俺と寅午との決戦の地でもある」

「……魔王、気を引き締めてまいりましょう」

「勿論だ、行くぞ。」

ボスは、城門を開けると……

下に大きく長い赤のカーペットを敷いた大広間が広がっていた。

そして……その奥には

「寅午ッ！」

【ふふふっ……お久しぶりですね】

寅午は、クスクスと不気味な笑みを見せる……

「寅午、お前の足と腕は消えた……もう頭しか残ってないぞ！」

【ええ、だからこそ貴方をここに呼び寄せたのですよ】

「王子を監禁したのも計画の内か？」

【まあ、そう考えていただくのも宜しいかと】

寅午の発言にスラナは苛立ちを覚える。

「寅午でしたね、貴方！ 少しはちゃんとした言い分は無いのですか！？」

スラナが二人の会話に入る……だが

【しかし……少しばかり招待の為とはいえ、派手にやりすぎましたかねえ〜】

寅午には、スラナの言葉なぞ聴く耳も持たなかった。

「くっ……おちよくっているのか！」

スラナは答えぬ寅午に更なる苛立ちを覚える。
だが、そこにボスがスラナの唇に指を置く

「スラナ、少しだけ黙っていてくれ」

「し、しかし……！」

「スラナ、君は少しばかり戦いの礼儀を知った方が良いぞ？」

その言葉でスラナは黙り込んだ。
ボスからの指摘があつたのもあるが

「まあ、お前らしいと思うがな。寅午」

【おや、そう思いますか？ ハハハッ……】

何よりも……二人の会話が”友達と話すような感覚”だった。
久々に再開した親友のように……

「寅午、お前は一体何がしたいんだ？」

【それは……私の存在理由の事ですか？】

「うゝん……まあ、そんな感じかな？」

【良いでしょう、ならば お話しましょう】

【私の存在理由、私の目的、私の役目】

【それは、破壊なんですよ】

「破壊？ 全ての生き物に恐怖で満たすことでは無かったのか？」

【それも一理は考えました。 ですが……それでは駄目なんですよ】

「駄目？」

【ええ、それでは駄目なんですよ。 いけないんですよ】

【恐怖だけ与えても、心は簡単に砕いてしまう】

【私が求めるのは、完璧なる死！ 生き物の死！ 恐怖による生き物の死！】

「その結果、破壊を選択したって口か……」

【ええ、正直……この決断はどうかと思いましたが、決定してしまった物は仕方ないですよ。】

「だったら、今すぐ変更しな。 その選択は過ちだ。」

【そうですか？ それが本当かどうか試してみましようか？】

スラナには、二人の会話が理解できなかった。

いや、ウル、クリナ、リナも二人の会話を理解する事が出来なかった。

あまりにも理解し難い会話。 それを真顔で理解し話し合う二人

四人は、そんな二人を理解する事は出来なかった。

「まあ、結果的にはお前を倒す気でここに来たんだし……相手をし
てやるよ」

「スラナ、ウル、クリナ、リナ。 四人とも城の何処かにいる王子
を探してこい」

「ま、魔王！ 一人では危険すぎます！」

スラナが止めに入る。

「良いからさっさと探しに行け。ここからは男のタイマン勝負なんだから」

「スラナさん……行きましょう。ここは魔王様に任せて我々は王子を救出しに行った方が良い。」

「何故ですか？」

「僕もそうした方が良いと思う。魔王様……この時を何よりも楽しみにしていたみたいなのをしてるもん」

ウルという言葉通りだった。

ボスの目は、今まで異常に楽しそうな目をしており、体もウズウズとしていた。

「……分かりました。魔王、お氣をつけて」

スラナ達は王子を救出しに向かった。

「さーて、寅午」

【ええ、これで……】

「最後の勝負だッ！」

【最後の勝負ですよ！】

二人の戦いが始まった……！

そんな中、スラナ達は急いで王子を探し出す。
しかし、そこへ大量の兵士が……

「くっ……！　こんな時に！」

そこへスラナが素早く前へ出てくる。

「邪魔だッ！！」

なんと……！

スラナは目にも留まらぬ速さで50は居るであろう兵士を一瞬にしてなぎ払ったのだ……！

「ス、スラナさん！？」

「王子iiiiiiii！！　何処ですかああああ！！！！」

スラナは、その後も次々と出てくる兵士達をなぎ払って行った。
その表情は、何か……途轍もない怒りを感じる……

「だから……邪魔だと言ってるだろうが！！」

それを見ていたクリナとウルは啞然としていた。

「な、何だ……？　スラナさんの　あの異様な気力と体力、そして腕力……」

「あっ……そういえばクリちゃん知らなかったね。」

「スラちゃんは、ゴーレムを軽く吹き飛ばす事が出来るんだよ？」

「そういえば……彼女は、種族は一体何なのでしょう……？」

「さあ？　本人に聞いてみたら？」

クリナは今のスラナを見ている。

スラナは、邪魔をする兵士に向かってバックドロップやリアット等……

「本当にお前何モンだよ」と言いたくなるような光景だった。

「いえ……聞くと恐ろしい結末が待ち受けてそうなので止めときます。」

一方、ボスと寅午は戦っていた。

ボスの銃撃が寅午の頬を通り過ぎる……。

「やはり、銃ではお前は殺せないか」

【ふふふっ……素手で挑んではいかがで？】

「それも悪くないかも……ねッ!!」

語尾の部分でかかと落としを仕掛ける。

かかと落としは見事寅午の頭上に当たる……しかし、寅午は平気な面をしていた。

【そういえば、私が人を殺す訳……あれのもう一つの理由が言い残していましたね。】

「気に入らないから……だろ？」

【おや、知っていたのですか？】

「当たり前だ。」

【なら、話しましょう。】

寅午は、戦いながら話を始めた。

【私が気に入らない人間の大半は……わがままで横暴な強欲に満ちた生き物。】

【例を挙げるならば、わがままな金持ちのお坊ちゃん。】

【あれは特にエグイ殺し方をしてやりましたよ。】

【まあ……別に良かったと思いますよ】

【どうせ、誰かに殺される”運命”だったし……私が殺しても別に良いでしょう？】

寅午が笑いながら話している姿にボスは飽き飽きしていた。

「もういい、お前の言い分は十分理解した。」

【おや、宜しいのですか？ まだ色々と話そうと思っていたのに】

「お前の話は、長くなりそうでかなわん」

【おっと……確か、貴方は少々短気な性格でしたね】

「ああ……だからよお……」

【ええ、一度……貴方と殺し合いをしたから理解できますよ。】

「もういっぺん、死んでこい!!」

第十五話：「再度の対面と決着を……。」（後書き）

（・・・、あとがき）（） モゾモゾ……………

どうも、零式です。

長らくの更新放置プレイすみませんでした。

何時も見に来てくれる方々、居るかどうかわかりませんが・・・毎回見てくれる方。

本当にお待たせしました！

他の小説に手を回しすぎて、全然こちらに手が回っておりませんでした。

（本当にスマン…………。）

そして、更新した内容がペラペラで短いというね…………。

今回は、長く書けるか検討してみます。

最後に…………

感想をくださり、絵を描いてくれた「宮座頭数騎」さん！

本当にありがとうございます！ チャットではお世話になってまゝす！

（・・・、ほぼ毎日チャットに居るので、宜しければどうぞ。

）ピタッ。

第十六話：「王子救出！！　そして……」（前書き）

？前回までのあらすじ？

遂に再開を果たしたボスと寅午。

出会ってはならぬ二人が出会ってしまった今！

誰も、彼らの戦いに水を差すことは一切無用となった。

そんな中、二人の会話に苛立ちを覚えたスラナは会話の横に入る。
しかし、結局はボスに叱られる羽目に・・・

そして、スラナ達に出された指令は「王子を救出せよ」　ただ
それだけだった。

ボスを一人残し、スラナ達は王子救出へ向かうッ！

？登場キャラ？

・ボス：二代目魔王。　以前、倒した筈の寅午との因縁に決着をつけている。

・スラナ：魔王秘書。　ボスに叱られてイライラしている。

・ウル：わんわんお。　兵士達をなぎ倒しているので楽で良いと思っ
っている。

・クリナ：警備員。　銃器と弓を自在に扱える。

・リナ：魔法使い。　使う魔法は、どれも賢者並みの威力を誇る。

・寅午：この世の恐怖^{トラウマ}。　自分を倒したボスと再び戦う。

・・・第十六話：『王子救出！！　そして……』

第十六話：「王子救出！！　そして……」

？ミスラカル城？

”ドオオオーーーン！！！”

城内では、激しい爆音と揺れが数秒に一回起きていた。

「な、何だ……？　この爆音と揺れは……？」

ミスラカル城の王子。　ミルハイツは、城内の異変にいち早く……
つというか、嫌でも気づいた。

「馬鹿な……？　私の生存は、既に隠蔽されている筈……なの
に……誰が？」

？

「うおおおおおおおお！！！」

一方、スラナ達と言うと……

まだ、目の前に現れては邪魔をする兵士達をなぎ倒していた。

「さ、さつきから本当に凄まじいですね……スラナさん」

「本当にね」

リナは、ちよくちよく後ろを見ながら走っていた

「心配？」

そこへウルが声を掛けてくる。

リナは首を横に振る。

「だいじょうぶ・・・あのひとがまけるなんて・・・ないから」
「でも、心配でしょ？ 僕も同じ。」

そう・・・ウルは、今平然とした顔を見せているが・・・心の中では凄くボスの事を心配しているのだ。

「私ですよ・・・。ボスと面識のある ” あ の 男 ”

「うん、只者じゃない感じがした。」

「こわい・・・あのひと・・・。」

？

そんな仲間かぞくから心配を受けているボスは・・・

「ぐほっ！」

苦戦を強いられていた。

【どうしましたか？ 以前とは別物ですね、弱いつという意味で】
「ケツ・・・！ てめえもじゃねえのかあ？」

ボスは寅午の戯言を返すかの様に吐く。

（しかし・・・やばいな・・・あいつ、以前より力が上がってやがる。）

（下手をすれば、こっちが敗北する・・・！）

寅午の拳がボスの目の前に飛んでくる。
ボスは、反射的にそれを”避けた”

【ほう・・・】

「……ッ！」

（待て・・・何で、まだ”人間を辞めてもない”状態なのに・・・
どうしてあの恐ろしいまでのスピードがある拳をかわせた！？）

（これは・・・”魔王の力”って奴・・・なのか？）

ボスは、拳を握り締める・・・！

（行ける・・・ッ！）

？

「クッ・・・！　こんな時に抜け出せないとは・・・！」

一方、王子の方はと言うと・・・必死に脱走しようとしていた。
しかし、手持ちには何も無ければ・・・どうしようもなかった。

「俺はここだぁぁー！！！！　助けでも何でもいい！！　早く
ここから出て、あいつを止めなくては！」

（誰でも良い、早くここから抜け出し・・・寅午　　あいつを止
める為に……！）

？

「……聞こえた！ 微かだが、若く綺麗な男性の声！」

王子の叫びは、微かながら声音が耳に入った。

「本当ですか、スラナさん！」

「ええ、本当に微かだけど……でも、聞こえた！」

「場所は特定できますか？」

「……声の位置からすると、ここからもう少し北の方。ここに入る前に覚えた正式な位置だとするならば……」

「城の一番端……！」

確かに……スラナの予想は的中していた。

王子が居る位置は、城の一番端……誰も入りつかないであろう位置に存在しているのだ！

「急ぎましょう！ 早く救出して魔王様の手助けをしないと……」

？

「クソッ……！ 早く……早く……！ 誰か気づいてくれッ
……！」

王子は、必死にドアを蹴りながら場所をちゃんと特定できる様に音で知らせる。

だが、その行動は王子にも酷く疲労という負担が掛かる作業だった。しかし……！ 王子は何度もその作業を繰り返す。

何度も蹴り、何度も蹴り

誰でも良い、早く気づいてここから出して欲しい！

そして……寅午。 あいつのしようとしている行動を止めなくては・
・・！

”ドオオオオオオオー！ー！！！”

外壁が突然爆発を起こし、崩れ落ちる。

辺りは、煙で覆いつくされ何も見えなくなってしまう。

「王子！ ここに居るのですか！？」

ふと聞こえる女性の声……。

「……ッ！ 私はここです！ すみません……助かった！」

「やりましたね！ スラナさん！」

「やっと見つけた〜！」

そして、その後ろで聞こえる男性と女性の声……女性の方は、まだ幼いであろう声だった。

「とりあえず、早くここから出ましょう！」

王子は、煙を掃いながら声がした方へ歩く……。

「?????……ウインド。」

その時、小さな女の子の声が聞こえた
突風が吹き荒れる。

王子は、突然の風について目を瞑ってしまった。

しかし、突風のおかげで煙は一気に晴れた。

「大丈夫ですか？ 王子・・・」

「ああ・・・しかし・・・さっきのは……」

王子は、ゆっくりと目を開ける……。

そこで目にしたのは・・・一人は褐色の肌。もう一人は頭に犬（？）のような耳が・・・男性の方の耳は少しばかり人間の耳とは違っていた。

唯一、”人間”だと判別できたのは・・・後ろでこっそりと立っている少女だけだった。

他のは・・・全て”魔族”の者達だった。

「君達は・・・魔族の・・・？」

「話は後です。早く魔王を助けに行かないと・・・」

「ま、魔王ツ！？」

スラナの発言に王子は驚いた。

「待ってくれ！ 魔王だって！？」

「ええ、それが何か？」

「悪いが・・・事情を教えてくれ。頭の中が混乱しているんだ・・・」

「・・・分かりました。手短ですが・・・ご説明しましょう」

スラナは、これまでの経緯を全て王子に話した。

ボス……二代目魔王が人間である。人間と魔族の共存の事。その為に王子を救出しにきたという事も……

そして……ボスは因縁のある寅午と今も戦っている事を……

「そうか……すまない、失礼な事を言ってしまったな」

「いいえ、まだ人間と魔族は共存の関係にあらず……」

「ああ、この一件が解決したら……共存への協力をしよう」

「よぉーし！これで、魔王様を助けられるぞー！」

「そうですね！早く行きましょう！」

「……ええ！」

スラナ達は、王子を連れてボスの下へと急いで向かった……！

第十六話：「王子救出！！　そして……」（後書き）

？あ트가き？

どうも、零式です。

うん、ごめん。

前回、「長く書けるように努力する」とか言っときながら全然出来てなかったね。

本当にスマンかった。マジでスマンかった。ダーク式　お仕置きタイムだけは・・・お仕置きだけはあ・・・

……さて、この作品も本当に残りわずか・・・尺の短さがあれだが、DonDon最後まで来ているぜよ・・・。

次回は、いよいよボスと寅午の本気バトル！！

ぶっちゃけ戦闘シーン＋up主がやりたいだけの部分でんこ盛りです。

次回は、本気でつまらん回になるかもねー

（こんな時、BGMさんさえ居てくれれば・・・。）

第十七話：「ボスノ過去。」（前書き）

？前回までのあらすじ？

ミルハイツ王子を救出する為に向かうスラナ達。

そんな中、ボスは寅午に苦戦を強いられていた。
だが、その時。ボスの身に確実に何か秘められている事に気づく・・・。

その頃、スラナ達はミルハイツ王子の叫んだ微かな声を聞き取り
無事にミルハイツ王子の捕らえられている場所に辿り着く・・・

そして……

いよいよ、ボスと寅午の最後の決着が着こうとしていた。

？（今回の） 登場キャラ？

・ボス：二代目魔王。 寅午との因縁の戦いにケリを着けるッ！！

・寅午：”この世の恐怖”^{トラウマ} ボスとの因縁の戦いにケリを着けるッ！！！！

・・・第十七話：『ボスノ過去。』

第十七話：「ボスノ過去。」

？ミスラカル城　王座前？

ボスと寅午は、王座の前に向かい合うように立っていた。

【ふふふ・・・王座・・・これは、実に良いステージだ】
寅午がクスクスと何時もの笑みを見せる。

「ああ、そういえば・・・俺がこの世界に来た時の一番印象になったのが、王座だったな」

そう

ボスが、この世界に降り立った場所は・・・王座の前だった。

そこで、初代魔王が倒され・・・その遺志・・・それをボスは受け継いだ。

そして今、その初代が遂げようとした意思が果たされる。

今、この時、ボスの目の前の男。　こいつを倒せば・・・果たされるッ！！

【さて、覚悟は宜しいですね？】

「……………ああ、来いよ。　お前との戦いと因縁に・・・決着を着けようぜ！！」

？

先手を取ったのはボス。

強烈な一撃が、寅午の顔面に入った……！

だが、寅午はニタリツと笑って拳を構えていた。

「……ッ！」

しかし、ボスは人間とは思えない判断力で一瞬で寅午の攻撃を回避した。

【……！？】

”クイクイ。”

ボスは、挑発するかのように指で「来い」っと、ジェスチャーを送る。

【随分と……ナメられてますね】

寅午の拳が開き、何かを掴む感じになった。

そして、そのまま”空気”を掬い上げるかのようにボスに向かって振り上げる。

突然のかまいたち。

ボスは腕でガードをするも……かまいたちの威力は凄まじく、腕から幾つもの切り傷が出来上がる。

それを見たボスの口は、ギリギリ……と歯切りをしていた。

【ほら、次も来ますよ！】

次のかまいたちが飛んでこようとしていた。
しかし

寅午が仕掛ける前に……ボスが寅午の目の前まで近づいていた。

【はっ……？】

”バキィッ！！”

重い一撃が寅午を吹き飛ばす。

？

【馬鹿な・・・馬鹿なッ!!】

ありえない、ありえない、アリエナイ!!! 何だ？ 今のスピードは・・・アイツは何モシテイナイ。人間ノママダッ!!!
なのに・・・なのに、何故ダッ!!!!

「魔王の力。」

【!?!】

「阿呆。 忘れたのか？ 今の俺は、魔王なんだぞ？」

【……ハッ！ な、ならば……!】

「そう・・・俺は”最初から”人間では無かった。」

【可笑しいと思っていた・・・! 普通の人間があれほどまでの戦闘が出来るはずが無いと・・・!】

「俺は、この世界に降り立った時。 その時点で・・・魔王となっていたのさ」

【ありえん・・・! 普通の人間が魔王になれるとは・・・ありえん・・・!】

「それが出来るんだから・・・しょうがないんじゃないか？」

「さあ、続きと行こうぜ？」

寅午は、一度だけ深呼吸をして興奮状態から抜け出す。

【ふふふ・・・どちらにせよ・・・貴方を倒せば良い事!】

【魔王ごときになった位で・・・この私を超えられる筈は無理な事！】
寅午はボスに向かって突進を仕掛ける
だがしかし、ボスは逃げもせず・・・ただ、手だけを寅午に差し向
けていた。

「ここから先は、本気モードつと言っわけでもよろしく」

それはまさに本当に一瞬。

寅午のボスに向けて放った片腕が、一気にバラバラに砕かれていっ
た。

寅午の腕を砕いたのは、”触手”

ボスの腕に生えているピアノ線状の触手達が一瞬で寅午の腕をバラ
バラに砕いたのだ！

【驚いた・・・こんな芸風が出来るようになったのか・・・？】

「この世界に入ってきてからだ。ここまで触手を操れたのは・・・

」

バラバラになった片腕は、霧状に変わり・・・寅午の腕にへと吸収
されていた。

【でも・・・腕を切断しただけでは、再起不能にはなりませんよ？】

不気味で気持ち悪い音が寅午の失った腕から聞こえる・・・

そして・・・次の時。

”ブシヨオ！”

何と・・・！ 切断され失った片腕が、まるでトカゲの尻尾のよう
に再生した・・・！

「お前も十分な芸風が出来るじゃないか」

【お褒めの言葉として取っておくよ】

寅午は、クスクスと笑いだす。

【それにしても、それほどまでの能力を・・・”あの時”に使えればよかったですね】

「……何の話だ？」

【お忘れですか？ 貴方が、”自分の肉親をその手で殺した時”ですよ】

「……ああ、あのくだらない思い出か・・・欠片分も残っていない記憶を甦らせんなよ」

【これは失敬。】

【ですが・・・あの時の貴方は、最高に輝いてましたよぉ？】

だんだん、ボスの表情から明るさが消えていく・・・その代わり、暗く・・・冷たい表情が表に出てくる。

「人殺すのに美しいも汚いも輝くもへったくれも無い。くだらない話は止める」

【良いですよ、良いですよ・・・その表情。 実に素晴らしい！】

「……ハア・・・何が言いたいんだ？」

【そう・・・！ 今の貴方の表情はまさに魔王・・・！ 冷血で残酷な魔王の表情だぁ・・・！】

寅午は、ボスの表情を見ていささか興奮気味である。

「だ・か・ら！ 何が言いたいんだって・・・！」

【いいえ、ただの戯言ですよ。 ただのね・・・】

”ただの人殺しさん ”

次の瞬間、驚くべきスピードで寅午の頭を掴んで壁に押し付けて潰

した。

？

「……………」

【貴方は、自分の勝手なわがままで肉親をした。】

「……………黙れ。」

【そう、包丁でズブリッ……とね。】

「……………黙れ。」

【中々手馴れてましたよ……悲鳴を上げられないように口を押さえて心臓を一刺し。】

「……………五月蠅い。」

【刺している時の貴方の表情は、まさに今さっきのような感じでしたよ。】

「……喧しい。」

【そんな素晴らしい姿。 貴方の大事な人には見せれませんよね・・・】

「黙れッ！！！」

？

【ハハハハハハハハッ！！ 出来るはずが無い！ 貴方は、サラ。 貴方の心の傷を癒してくれた彼女を裏切れない！！】
「彼女の名を口にするな！！！」

【何故！？ 他人の事を口外して何がいけない！？ それは罪なのか？ 残酷なのか？ それは可笑い、おかしいぞ！！】
「五月蠅い！！ 五月蠅い！！ 五月蠅い！！！」

ボスは、触手を飛ばして切り刻もうとした。
だが、体全体を霧に変えた寅午には・・・無意味。

【ハハハハハハハハッ！！ 無駄、無駄、無駄、無駄、無駄ッ！！ お前がした行為は無駄ッ！！！！】
【生きている事自体、無駄ッ！！ 誰かを愛する事自体、無駄ッ！！ 全部が無駄なんだよ！！！！】

「????????……ッ!!!!」

風景がだんだん黒くなっていく……
闇が……闇が、ボスを包み込む。

突然ボスの頭からキイーンと、音が響き……頭痛と吐き気が
どつしりと重石のように押し掛かる。

ボスは頭を抱えながら苦しむように膝をついてしまう。

？

ボスはい出す。

昔の記憶……サラと一緒にいた時の記憶。

「サラ、俺は……お前に酷い嘘をついてる。」

「……私も……貴方に嘘をついてる。」

「お前が？ ははっ……珍しいなあ……」

「……貴方は、私を裏切らない？」

「ん？ ……裏切らないよ。」

「嘘。」

「あはは……バレた？ でも……もう少し……もう少し……」

していたら・・・嘘が本当に変わるかも・・・」

「…………お休み。」

「……………ゴメンナサイ。」

それは、とても小さな声。

誰にも聞こえない声。

その言葉は

？

ドクンッ・・・！

「ああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

”ガシャーーーーーン！！！！”

真っ暗だった風景が、ガラスの様に割れていき・・・元の王座の前へと戻る。

【お、おおお・・・！！！！】

「サラは・・・皆は・・・家族の皆は・・・！俺を裏切ったりしない！！」

「そして……」

「俺は、あいつ等を裏切らないッ!! 裏切ってたまるかッ!!!!」

【くくく・・・ははは・・・あはははははははははは!!!!】

【だったら! だったら、その意思を私にぶつけてみる!!】

【昔にやったように・・・私の心に響く一撃をくれ!!】

第十七話：「ボスノ過去。」（後書き）

？あとかきのフリをした何か？

どうも、挿絵が欲スイ……零式です。

もう、この小説は挿絵が無いと何が何だかチンプンカンプンですな。

今回の話は、ちょっとバイオレンスというか何というか……ブラツクな内容でした。

すまんかった、正直すまんかった。

だから、鞭は……鞭はごかんべ……アッー！／

ここでちよつと解説。

ボスは、本当に人を殺してます。しかも実の親を……

そして……その後は、死のうとしました。ですが……死ねなかつた。

その理由は……後々理解できます。

（自分で言つてなんだが、「後々」とか言つときながら……全然出てきていない件について。）

次回辺りには、最終回……と思つてましたが……まあ……ねえ？

地味に話の回数が伸びていつている件について。

（それから、毎回お気に入りなど色々と見ている方々。本当にありがとうございます。）

（この小説とうp主は、皆さんのご意見とアクセス数、評価で出来ています。）

第十八話：「Last Dance」(前書き)

？前回までのあらすじ？

ボスと寅午は戦っていた。

そこで、言われた事。

「自分の肉親を殺害した」

どうでもいい。 あんなモノ。

ソウ、ドウデモ……。

？登場キャラ？

・ボス：二代目魔王。 昔、自分の肉親を殺害した。

・スラナ：魔王秘書。 王子を連れてボスの下へ……

・クリナ：警備員。 同じく魔王の下へ……

・ウル：警備員。 同々。

・リナ：魔法使い。 ボスの事が心配で、胸がいつぱい。

・寅午：この世の恐怖^{トラウマ}。 不気味で奇妙な奴。

・・・第十八話：「Last Dance」

第十八話：「Last Dance」

？ミスラカル城？

「はぁ・・・はぁ・・・！」

スラナ達は、王子を連れてボスの下へと急ぐ。

「王子！ こっちです！」

「ああ！ 分かっている！」

王子は、スラナ達について行く

囚われて、体力が消耗していたにも関わらず・・・必死に走っていた。

「何としても・・・何としても、アイツ（寅午）の悪事を止めなくては・・・！」

？

その頃、王座では・・・

【さぁ、お前の思い・・・私にぶつけるッ！！】

ボスと寅午が向き合っていた。

寅午が吠える中・・・ボスは、先ほどとは違う顔つきで落ち着いていた。

「それで・・・満足するのか？」

【勿論。私はね・・・キミから思いをぶつけてもらって、そして殺すだけで満足なんだよ。】

【それが、私がしてきた事。 君達にとっては”罪”という名の行動だよ。】

「くだらねえ・・・もう少し、単調な言い方が出来ないのか？」

【悪いね。 私は、大変不器用な物だからさッ！】

寅午は、攻撃を仕掛けてきた。

先ほどと同じように・・・かまいたちでの攻撃。

「不器用者め・・・攻撃が雑すぎるぞ！」

しかし、今のボスの前では無意味。

ボスの触手達が刀の形へ変わり、かまいたちを全て斬る。

【ふむ・・・接近戦も不可。 遠距離からの攻撃も不可。】

「諦めて殺される。 特別に痛み無しで殺してやるよ」

【はははッ！ 何を馬鹿な事を・・・！ 死には痛みが付き物だろう？ それに・・・】

「バレたか・・・そうだよ、苦しませながら殺す気だったさ」

【そうかそうか・・・キミは実に最低で最高の人間だよ】

「そりやどうも」

？

スラナ達は、ようやく王座近くの付近まで辿り着いていた。

「しかし・・・この床に転がっている兵士達は、全部君達か？」

「ええ。 殆ど暴走気味のスラナさんが……あっ・・・やっぱり今の無しで」

「……？」

「皆さん、もうそろそろ魔王が戦っている場所へ着きますよ……」

」

全員は息を呑んだ。無理もないだろう。

相手は、ボスですら敵うかどうか分からない相手……それを相手にしなくてはならないのだから。

全員に緊張と闘志が高まる。

「見えたッ！ あそこ！」

スラナが指差す方向には、ボスと寅午が向き合っている風景が……

「魔王様！！」

「あれが……魔王？」

スラナ達の声が聞こえる。

「皆……か？」

【おや？ 丁度いいじゃないですか】

【ここで、貴方の本性をぶちまけたらどうです？】

「黙れ、ここからは戯言は禁句とする。」

ボスは、寅午を睨む。

【おお、怖い怖い。失敬失敬……】

そうだ。

あいつ等には、こんな姿を見せなくても良い。

どんなに卑怯でも、どんなに酷くても、こんな姿を見せるものか。

俺は、昔じゃなく、今の姿。 皆の前で振舞っている姿こそが・・・自分に相応しい！

ボスの目から、先ほどの殺意が消え去っていく・・・。

「おう、遅かったじゃないか。 待ってたぜ？」

そして・・・何時もと同じような顔でスラナ達を迎える。

それは、”偽り”と呼んでも相応しい。 だが・・・今の彼のあるべき姿。

”ボス”という名の人物を演じる為の嘘だけでも本当の感情。

「すみません・・・まさか、王子が城の端っこに閉じ込められていたとは・・・」

「……………」

「ボス？」

ボスは、スラナの頭に手を乗せ撫でる。

「よく帰ってきたな、偉いぞ」

王子は、ボスの近寄る。

「貴方が、二代目魔王……………」

「はい。 私が二代目魔王。 ボスと言います」

（驚いた・・・こんな普通の青年が魔王だなんて…………）

「すまない・・・共存の話は聞かせてもらった。 この事件が終わったら……………」

「ええ、お願いしますよ？」

「我がミスラカルの名に誓って……………」

【不愉快だ】

その光景を目にしていた寅午の表情には、笑みさえ失われていた。

【実に不愉快、とても不愉快、酷く不愉快だ】

「それは、残念だったな。」

「寅午・・・！ 我がミスラカルの名を汚した汝を・・・我は許さんぞッ！」

”ギリッ・・・！”

寅午は、怒りのあまり一つだけ歯切りをした。

【もう良い、完全にキレた。 貴様ら全員殺す。】

黒い闇が城全体を覆いつくす。

「な、何だ・・・！？」

「ようやく本気で来たか・・・」

闇が晴れ、そこら一面の景色は・・・一つの王宮へと変わった。

小鳥が囀り、太陽の光が眩く照らす。

まるで天国の様な・・・そんな感じの場所だった。

【美しい所だろう？ 私が生まれた場所。 前の私の最後を描かれた場所だ】

【ようこそ。 我が生き地。 ”グランド・ニクス”へ・・・】

「場所を移動して何になる？ 最後の足掻きという奴か？」

【いや、最後の死に場所には相応しい場所だと思ってね。】

【良いだろう？ 天国で死ぬようで・・・】

「あー・・・そういうのってあんま好きじゃないんだよね・・・」

ボスと寅午。

この二人の会話は、平然としているようだけでも・・・それは間違

い。

辺りの者からすれば、恐ろしくて近づけない程の威圧。

「スラナ達は、王子の防御に専念してくれ。俺はアイツとケリをつける。」

「りよ・・・了解しました。」

スラナは、ビクビクしながらも答える。

さつきから、ボスの雰囲気が何時もと同じだけど何かが違う。

それに・・・寅午さえも恐ろしい存在。たとえ一緒に戦った所で・

・足手まといとなってしまう。

ここは、潔く引くのが正解。無理に行けば絶対に死ぬ。

「ボス・・・負けないでくださいね。」

「ああ・・・スラナ。」

「はい？」

「・・・行ってくる。」

？

ボスと寅午は睨み合う。

「ようやくだな。」

【ええ、最高の決着としましょうか】

”バチイイーーン！！！”

二人の攻撃が弾け合い、その衝撃で二人は後ろに下がる。

寅午が先手を取った、先ほどとは違う無数のかまいたちが飛んでくる……！

しかし、ボスはそのかまいたちを全て斬り刻む。

キラキラと美しい触手が舞う……。

【はははははははは！！ 楽しい！ 実に楽しいじゃないか！！】

その後も、寅午はかまいたちを飛ばしてきた。

当然、全て切り刻まれるが……そろそろ限界が近い。

また一つ、また一つと……ボスの体は切られる。

【どうした！？ どんどん切られているぞ！！ はははははははははは！！！！】

次に放たれた一撃はとても大きかったッ！！

「……ッ！！」

（クッ……よけ……）

ボスは回避しようとした、だが……できない……！

後ろには、スラナ達が居る……もしかすればただではすまない。

それは自分も同じ。

避ければ助かる。 だが……それを選べばスラナ達が……

迷う事はなかった。 ボスは、足掻きだが……触手を盾の形に変

えて防御体勢を整える。

打ち負けるのは理解できる。 だが．．．やらないだけマシ．．．！

直撃。

肉体は切られなかったが．．．内臓や骨．．．肉体全部に酷くダメ
ージが響く一撃を食らってしまう．．．！

「がはっ．．．！」

一撃の衝撃はとてもキツかった．．．
意識さえも飛びそうな．．．血が．．．

「魔王様ツ！！！」

スラナ達の叫び声．．．意識が．．．消え．．．る．．．

「そ、そんな・・・魔王・・・死ぬ・・・なんて・・・」
スラナは絶望のあまり膝をついた。

「誰が死んだって？」

【！？】

「！？」

「目ン玉開いてよく見な。」

「お前の獲物は、まだくたばってねえぜ？」

そこには、ボスと共に立っているもう一人の人物。
黒い鎧を纏い、漆黒の剣を持った人物。

「ま、魔王・・・様？」

【初代魔王ッ！？ な、何故だ・・・！？ 何故・・・！！】

「こいつのおかげで一時的だが、蘇らせてもらった。」

「自分でも驚いたぜ・・・まさか、触手が肉体を作り出すとはな・・・」

【作った！！？ ありえぬッ！！ 決してありえぬッ！！ そんな
神の事が・・・！】

「忘れたか？ 俺の二番目の母親の存在を・・・」

【アルカード！！！！】

「我は神を超えし者の家族。彼女の加護があるかぎり、不可の事が可能に変わる。」

【馬鹿なッ！！ 馬鹿なッ！！！！】

「さあ、覚悟を決めな。ここが・・・お前の死に場所となる。」

第十八話：「Last Dance」(後書き)

？あ트가き？

どうも、零式です。

あらすじの病み具合は我慢してください。使用です。

さて、いよいよ次回が最終回ッ！

どうなる・・・？ 一体どうなる！？

次回にご期待ください。

第十九話：「ケリをつける時！」（前書き）

？前回までのあらずじ？

本当の自分……肉親を殺した自分の姿をさらけてしまったボス。
しかし、彼の心に一人の女性が浮かび上がる……。

”サラ”

彼女が、ボスの心を癒したおかげで出来たもう一つの感情。
偽りだけでも本当の……今のボスの姿が生まれた。
その感情が、冷たい自分を溶かす。

そして……寅午との戦闘を開始したボス……！
だが……寅午の力に一步及ばず、地に落ちてしまう……
しかし……そこに現れた一人の人物。
なんと……！ 初代魔王がボスの力を借り、蘇ったのだ……！

「さあ、覚悟しろ！ 寅午ッ……！」

……第十九話：『ケリをつける時！』

第十九話：「ケリをつける時！」

「さあ、覚悟しろ！ 寅午ッ！！」

【こんの・・・死にぞこないの殺人鬼があ・・・！】

「……俺は、殺人鬼ではない・・・俺は、”普通の人間”だ」
【嘘を・・・つくなッ！！】

ボスは、構えた。

しかし・・・初代魔王がボスを後ろに下げながら前に出る。

「ボス・・・ここは、俺にやらせろ。」

「初代魔王・・・」

「こいつには、殺された貸しがある。 今・・・それを返してもら
うッ！」

その言葉で、寅午はキレた。

もう、その表情には笑みという存在が消え・・・怒り狂った表情だ
けになっていた。

【どいつもこいつも死んだと思えば生きていた・・・！ 死ねよ！
殺したんだから死ねよ！】

【死ね死ね死ね死ね死ね死ねッ！！！！】

寅午の言葉に初代魔王は、呆れ果てていた。

「呆れたぜ・・・まさか、こんなキチガイ野郎なんか殺されちま
うとはな・・・」

「魔王たる者の恥・・・って奴だな・・・こりゃ・・・」

”
プ
ッ
ッ
ン
”

【もう一度殺してやるッ!!】

寅午は、猛烈に突進を仕掛けてくる。

凄い殺氣、
氣迫。

だが・・・魔王からしてみれば、豚が体当たりをしてくるような感じだった。

”ドオオオ——ン!!!!”

強烈な風圧が回り全体に吹き荒れる。

寅午は、その風圧で怯んだ。

「ほうら、怯んだ怯んだ。」

寅午の目の前に初代魔王が漆黒の剣を今にも振り払わんと構えていた。

【! ?】

「遠くまで吹っ飛ぶが良い。」

” エクスト・ツイスター ”

斬撃が、寅午の肉体を割いた。

その一撃は、確実に手ごたえのある・・・相手を仕留めた一撃だった。

「終わつたな。」

「……！ いや！ まだ終わってないッ！」

【ええ、そうですよ？】

赤黒い霧が集まっていき……. どんどん人の形を形どる。
そして、霧は晴れ……. そこには寅午が立っていた。

【私は、”タタリ”と呼ばれる分類の者と同じ存在なので……. 不死なのですよ】

「そう……. お前は、吸血鬼でもなんでもない……. だが、その名に相応しいともまで言われた。」

【私は、血や何も吸いません。 食する事なぞありえない。】

【だが……. 人の命だけは食らう。】

「化けモンだな……. まるつきり…….」

初代魔王は、剣を再び構える。

【さあ……. 殺しきれぬのなら、殺しきれ！ 私を殺してみろ！
そのボスがやったように…….！】

- ? -

「ボス…….！ 大丈夫ですか…….！？」

初代魔王が戦っている中……. スラナ達は、負傷したボスの手当てをする。

「ああ……. すまねえな、ざまあねえ姿さらして…….」

「何を…….！ 貴方は立派に戦っているじゃないですか…….！」
「……………」

リナが、近くに寄ってくる。

「…………どうして、かなしいかおしてるの？」
「……ッ！」

リナの言葉にボスは、一人の女性を思い出す。

サラ……。

無口で、何を考えているのか少し分からない所が多少あるが……
愛らしく、そして何よりも美しい彼女……。

……こんな俺でも、愛してくれたたった一人の女性。

もう、誰も愛さないと決めたのに……決めたのに彼女と出会った。
そして、恋をした。

そうだ……まだ死ねない。

まだ

「俺はあいつを抱きしめていない。」

ボスは、起き上がる。

「ボス？」

「ありがとう、スラナ、クリナ、ウル、リナ。」

「俺は……私は、まだ戦える。」

長い黒髪が風に舞う。

- ? -

「くっ……！ 結構やるじゃねえか……！」

【さあ死ね！ 今死ね！ さっさと死……！】

寅午の手が止まる。

殺気

いや、それとは違った気配。

確かに殺しの行為をするが、悪意ではなく善意。
そして、何よりもこれは……

「正しい殺し」

寅午は、声がした方を振り向く
そこに居たのは……

【お……まえ……は……？】

そこには、長い黒髪の女が立っていた。

漆黒のように黒い髪。少し色白だが健康な肌。
”日本”という世界では、一般といわれる女性。
そんな女性が立っていた。

「あたし？ あたしの名は”ボス”」

「彼とは違う、別のボス。同じだけど違う。違うけど同じ。」

【……！？】

「ボ……ス……？」

寅午だけではなく、スラナ達もボスの姿に驚く

「ええ、ボスだけど？」

ボスは、につこりと愛らしい笑顔をしながら言葉を返す。

【馬鹿なッ！！！！】

寅午は大声で吠える。

「うつるさいなゝ．．．もう少し声のボリューム下げれないわけ？」
ボスは、寅午の突然の大声で耳を塞ぐ

【ありえぬっ．．．！】 “入れ替わり” など．．．ありえない．．．！

「入れ替わり．．．？」

「……彼と私だけの唯一の接触。 ” 別の世界の自分と入れ替わる事が出来る”」

「そ、それが”入れ替わり”．．．」

【不可能だ．．．！ 不可能な筈．．．！ それもアルカー……】

「いいえ、これは私だからこそ出来ちゃった事だから」

【な．．．に．．．？】

「今頃、彼は私のベットでお休み中よ？ きつと．．．」

ボスは、初代魔王に近づく

「こいつは、たまげたな．．．まさか託した人間が、こんなベツピンさんだったとはな．．．」

初代魔王は、小さく笑う。

「毎日お風呂に入ってるんだから、綺麗なのは当たり前。 なーんてね」

初代魔王の体が、だんだん薄れていく．．．

「ま、魔王様ツ！ 体が．．．！」

「あら．．．？ もう限界かよ．．．おしいなあゝ．．．」

「多分、彼が居なくなっちゃったからね．．．」

「仕方ないか．．．ボス！」

初代魔王は、ボスに漆黒の剣を手渡す。

「……これは？」

「俺の愛用の剣だ！ それで代わりにアイツをぶった切ってくれ！」
だんだん、初代魔王の姿が消えていく．．．

「魔王様・・・！」

「スラナ・・・悪かったな、まだ・・・お前の事・・・」
スラナは首を横に振る。

「私も・・・気づいてましたから・・・貴方の気持ち。」

「……そっか、ははっ！ それだけ聞ければ後は未練も無しだ！
これで・・・ゆっくり寝れ・・・る。」

それを言い残すと、魔王の体は消えてなくなった。

【はははははははははは！！！！ 消えた！ 殺した！ 殺してやった
！ あはははははははははは！！！！】

寅午は、高笑いをする。

「こんのお・・・！」

スラナは、立ち上がり拳を握り締めた。

しかし、その前にボスが背を向けるように立ちふさがる。

その手には、しっかりと漆黒の剣が握られていた。

構えは、剣道の構えのように・・・しっかりと・・・集中を高める
構えを取っていた。

「人を罵倒するのは……」

剣を振り上げる。

「許さないッ！！！」

一閃。

寅午の体は、一瞬にして消え去った。

だが、ボスの顔には・・・満足とした顔が見えない。

そう・・・それは、つまり・・・

【無駄だ・・・無駄・・・無駄ッ！！】

また、一閃。

しかし、今度は形が残る状態で倒れていた。

【がはっ……！くくくっ……！無駄無駄無駄……！】
(嘘……！せつかく入れ替わったのに……！)

『構わない、もう一度打て。』

頭の中に声が響く
それは……彼の声だった。

『今度は、少し弱めに……ギリギリ致命傷を避けれる程度に打て。』

「……よし！」

ボスは、強く剣を握り締める。
再び剣を振り上げた。

【無駄だというのに……！打ってみるが良いッ！！一撃を許

す！】

『今だ、打てッ！』

「でやああああああああ！！！！」

神々しい一撃が、再び決まった。

血まみれになりながらも起き上がる寅午。

【ふふふ・・・無駄だと言っただろう？ 所詮、人間が私に勝てることな……！】

寅午の手からヒビが・・・その他にも・・・どんどんヒビが入っていく・・・！

【馬鹿な・・・！ こ、これは・・・！】

「成る程・・・そういうことね。」

「貴方は、確かに不死だわ。」

「でも、それは”死んでだからこそ”起きる不死。」

「体が消滅、肉体の死滅。その時に発動する。」

つまり……一撃が大きければ大きいほど、寅午の生存率は確定へとなってしまうのだ・・・！

そして、寅午を殺す最良の方法・・・それは・・・

「一定のダメージを与え、肉体と魂に限界を来たさせる事」

【……！？】

「つまり……次の本気の一撃で、貴方の命が幕を下ろす。」

【さ、させん……！　させてたまるか……！】

寅午は、肉体がボロボロになりながらも変わらぬ速度で接近をしてくる。

「消えろ。　お前の居場所は、もう……何処にも無い！」
『消えろ。　お前の居場所は、もう……何処にも無い！』

”闇を切り裂く、漆黒の刃　Darkness Blade”
！！！！

漆黒の一撃が決まった

煙が晴れる……。

寅午は、立っていた。
ただ……立っていた。

【ははは……無駄だったのは……わた……し……】

” ザアアアア…… ”

まるで砂のように・・・寅午の体は散っていった。

「さようなら。 貴方は・・・私と彼にとって、最悪の出来事^{イベント}だったわ」

第十九話：「ケリをつける時！」（後書き）

終わると思っていたのか？ / あとがき / やめろー！ /

どうも、最終回だと言ったかな？　ありや嘘だ。

…… 本当に申し訳ない。

次回は・・・！　次回は、ちゃんと最終回なので・・・最終回だから・・・！

まあ・・・そんな訳で、次回は最終回です。

どんな展開になるのかは・・・少しお待ちを・・・

そんでもって、話は切り替わりますが・・・

女性のボス。　やっと出せたよ・・・！

何時出そうか悩んでましたが、やっぱり最終回前に出しといて正解でした。

性格は、よく見かける（？）女子高生みたいな性格。

正義感溢れるかわいこちゃんです。

（もっと分かりやすく言えば、夢小説とかに出てくる主人公的なヒロインです。）

彼女と彼は、性格も違うし顔つきも少し違う。

でも、同じなのは同じ。

彼が死ねば、彼女も死ぬ。　彼女が死ねば、彼も死ぬ。

つまりは、”パラレルパラドックス”みたいな関係って訳です。（意味腐）

…… まあ、彼女も彼の事が若干好きだとか好きじゃないとか・・・

（嫌いじゃないわ！）

まあ・・・そんな感じで変なまとめですが、次回はいよいよ最終回。当然、短い終わり方よ。期待しない方が良くかも……いや、最終回なんで期待しても良いのよ？

第二十話：「さあ、家に帰ろう。」（前書き）

？前回のあらすじ？

寅午は倒れた。

彼と彼女の攻撃で・・・

さあ、ケリはついた。

帰ろう、家へ・・・。

？登場キャラ？

・ボス：二代目魔王。

世界の恐怖を見事打ち破った！

・スラナ：魔王秘書。

初代魔王の事を愛していた・・・だけど彼

は・・・

・ウル：ワーウルフ。

メンバーのトラブルメーカー

・クリナ：エルフ。

城の警備員で、元隊長だった者。

・リナ：魔法使い。
小さい体をしているのに、途轍もない魔力を持っている。

・・・第二十話：『さあ、家に帰ろう。』

第二十話：「さあ、家に帰ろう。」

事件解決から次の日・・・

「……………」

”コンコンッ”

ドアのノック音が聞こえる。

「魔王様、お時間です。」

「……………ああ。」

ボスは、座っていた椅子から立ち上がる。

その道中

「魔王様・・・これで、この国は救われるのですね・・・」
「ああ・・・これで……………」

……………寅午を倒した時に戻る。

「魔王……………」

「ん？ ああ、ごめんね。すぐに彼に戻るから」

「あつ・・・待ってください・・・！」

「……………何？」

「その・・・貴方は・・・」

スラナが戸惑っている中、ボスは笑顔で喋る。

「大丈夫だよ。私も彼も同じ」ボス”だから！」

それは、とても明るい笑顔だった。

太陽のように・・・凄く明るく、とても清々しい笑顔だった・・・スラナは、喋る口を止めた。

「じゃつ。私は”元の所”に帰るからね！」

そういい、彼女は元のボスへ戻る。

「……………たくつ・・・あの馬鹿ッ・・・！」

その体には、包帯など・・・色々と治療された後の姿だった。

「魔王・・・その包帯は？」

「ん？ ああ・・・”あいつ”の家族に治療されたんだよ」
ファミリー

「あの馬鹿・・・一人だけカッコいい所だけ持っていきやがって・・・」

その時、ボスの頭に激痛が走る。

「痛ッ・・・！」

「だ、大丈夫ですか!？」

「いてて・・・あの野郎・・・何も自分の頭を殴らなくても良いだろう・・・」

その時、スラナは確信した。

別の世界だけでも、自分と同じ存在は繋がっていると・・・

(ああ、本当に同じなんだ・・・)

スラナは、そう思った。

「まつ・・・結果オーライだし、一件落着だな・・・」

「そうですね・・・」

「よし！ 王子も救出したし・・・一旦城に帰るぞ！」

「はい！」

その後。

王子も魔王城に連れて帰還したボス達は、傷ついたボスを休ませる

為に寢室へ連れて行き

王子を魔族との共存の為に色々と話をスラナ達で説明した。

・・・そして、今に戻る・・・。

「魔王様。 お体の方は・・・？」

「大丈夫だ、問題ない。」

しかし、少し足がヨロつく・・・

「おっとと・・・」

「大丈夫ですか！？ もう・・・あんまり無茶しないでください・・・」

「はははっ・・・その台詞。 大分前にも聞いたぞ」

スラナは、やれやれとため息をつきながらボスの肩を持つ。

そして、いよいよ人間と魔族の共存の誓いが行われる。

式には、人間サイドには以前会ったミレガと子供達が招待され・・・
魔族サイドには戦場の境界で必死に戦っていた兵士達を招いた。

「よう、待たせたか？」

「いいや、こうして人間と魔族が共に手を取り合える日が来ようとは・・・夢にも思わなかった」

「夢ってーのは、いずれは叶うってもんなのさ」

ボスはニツと笑う。

そんなボスに王子はニツコリと笑う。

「さあ、始めよう。 今日最高の日だ！」

「応。」

式は行われた。

それは、短い式。

王子は、次の言葉を口に出す。

「我、人間の王は・・・ここに魔族との共存の願いを申し出る。」

続いて、ボスは次の言葉を口に出す。

「我、魔族の王は・・・ここに人間との共存の願いを申し出る。」

「宜しい、今ここに・・・両族の共存の誓いを立てる。」

二人の言葉が合わさる。

「契約。 我ら両族に栄光と幸せを・・・」

そして、誓いは立てられ・・・式は終了した。

「皆の衆！ 我、ミスラカル王子。 ミルハイツ＝ミスラカルは、ここに魔族との共存を誓う！」

「英雄達よ！ 人間と魔族との激闘は終幕を迎えた！ 我魔族の王、ボスが汝らの安心と安全を保障する！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!

一斉に歓声が上がる。

「ふう・・・流石に・・・慣れない事はするもんじゃないな」

「お疲れ様です、魔王。 見事でした」

「ありがとなスラナ。 ……さて・・・」

「そろそろ・・・帰らないとな・・・自分の場所に」

「……えっ？」

ボスの言葉にスラナと他のメンバーが驚く

「ま、魔王・・・？ 帰るって・・・？」

「ん？ いや・・・何だろうな・・・俺の居る場所は、ここじゃないって言うか・・・」

「そんな！ だったら、誰が魔王を！？」

「あーあー・・・そこんところは、色々考えたんだよ」

「いいか？ 心して聞けよ？」

メンバーは息を呑む。

「三代目魔王は・・・」

「クリナ。 お前がやってくれ」

「わ、私ですか!？」

「それプラス。 魔王の隣役として・・・ウル。 お前がやるんだ」

「ぼ、僕もですかあ!？」

「俺が一番信頼できる仲間だ! お前らだったら、きっとこの国を良い国にしてくれる!」

「そ、そんな無茶なあゝ・・・」

そこへ、リナが近づいてくる。

「……わたしもつれて行って・・・」

悲しい顔をしながら、ボスに抱きつく

「リナ・・・ごめん。今の君を連れて行くことは出来ないよ」

「どうして・・・?」

「帰りはね・・・とっても危険なんだ・・・俺でも君を守る保障が出来ない」

「いい・・・それでも・・・あなたに・・・」

「その為に・・・これを作った。」

ボスは、ポケットから一枚の札を取り出す。

「そ、それは・・・?」

「これは・・・そうだな。 ”どこでもドア” みたいな物さ」

「な、何ですか? それ・・・?」

「良いかい? もし、この国が本当に平和になったら・・・この札を何でもいい。ドアに貼り付けるんだ。」

「そして、ただドアを開けるだけで……って、今から見せればいいか」

ボスは、部屋の端に置いたドアを持ってくる。

「いいか? まず、札をドアに貼り付ける。」

ドアに札を貼る。

「そして、普通にドアノブを回して開ける。」

ドアが開き、そこにあったのは・・・薄暗い空間だった。

「こ、これは凄い・・・」

「国を平和にしたら、この札を使ってくれ。俺の家に繋がるようにしている。」

「……分かりました。必ず、この国を平和にして・・・魔王様に会いに行きます！」

ウルとクリナは、胸を張って言った。

「ああ、良い答えだ。その答えを聞いたかった」

ボスは、にっこりと二人に微笑む。

「さて・・・スラナ、ウル、クリナ、リナ。素晴らしい家族が出来て本当に嬉しい・・・ありがとう。」

「必ず、国を平和にしてくれよ！」

「一時的ですが・・・さようなら～～！！」

「お体にお気をつけて～～！！」

「ばいばいなんていわない・・・またね・・・」

「……………」

スラナだけ黙っていた。

「スラナ。幸せにな・・・」

「……ッ！」

ボスは、ドアの向こうに進み・・・ドアが閉まる。

- ? -

ボスは、閉まったドアにもたれる様にしていた。

「ふう・・・一時的にお別れか・・・」

「・・・少し・・・寂しい気がするけどなあ・・・」

「何だ、やっぱり一人じゃ寂しいじゃないですか」

ボスの隣で声がする。

「えっ？」

ボスは、横を見てみると・・・

「どうも」

「ス、スラナアア!!?」

「ど、どうしてお前がここに!?!」

「何を言っているんですか、魔王。」

「私は、貴方パートナーの家族ですよ?」

「は、はははは・・・そうだったな・・・」

ボスは少しだけ笑う。

その顔は、先ほどの寂しい感じが何処にも見当たらなかった。

「さっ! 行きましようか。我マイ・ロードが主」

「応。それと・・・他ン所で『魔王』とか言うのは厳禁な」

「了解しました。魔王。」

「あっ! こいつ・・・お調子者め!」

「はははっ・・・! 行きますよ。魔王!」

「こらっ！ 待てッ！ こらあゝゝゝ！！！」

こうして・・・俺の魔王人生は、一時的だが・・・幕を下ろしたの
でした。

おしまい。

> i 1 7 4 1 1
— 2 3 6 9
<

……つと、思っていたか？　まだ続くんだな。　これが。

第二十話：「さあ、家に帰ろう。」（後書き）

？次回？

どうも、零式です。

ゆっくり「終わると思ったの？ 馬鹿なの？ ゆっくりなの？」
はいはい、ゆっくりゆっくり。

てな訳で、今回で魔王編は終了です。

ある意味、最終回だった。（通称：いい最終回だった）

これで終わりと思っていたら、そうでもなかった。

な、なにをされたか・・・ry（ポルポルAA略

最後の部分では、ルパン三世TVSP”霧のエリユーシウ”のED
テーマ「愛のテーマ」を流して聞いてください。

（ようつべで調べたら出るはず。）

「ミシエル」もアリかな・・・と思いました、やっぱり「愛の
テーマ」で・・・

（曲のチョイスのセンス？ 知らんなッ！）

そんなわけで、次回から新章が始まるという訳です。

今回は、ちよっとガラッと変わった世界観にしてみようかと思いま
す。

（急に近代風になったらごめんなさい。）

ついでにですが・・・小説は、このまま継続して章づつに分けてや

っていききたいと思います。

（せっかく評判出た作品を別に移すなんてもつたいたない。）

今回も・・・短かったですね、ごめんなさい。

「されどオリジナル。たかがオリジナル。」　これ大事。

次回も多分、短いだろうね。（確実に・・・）

さて・・・最後のお言葉でも言おうかね　（最後まで無いけど一応。）

この「小説家になろう！」に小説を投稿したきっかけは、ただ単に誰かに自分の小説はどれぐらいの物なのか
それが知りたくて、ここに来ました。

そして、チャットで色々の良い小説仲間を見つけ、楽しくやれています。

ひとえに・・・これも、この「小説家になろう！」というサイトを作っていたいた方、その他の方々のおかげです！

当初は「どうせ伸びないだろうなあ・・・」っと、半信半疑でやっていたいました。

ですが、長くも立たず急激に評価やアクセス数が伸びていった時は、本当に嬉しかったです。

途中で、色々と失踪しかけた部分もありましたが・・・何とか一部完結という程になりました。

これも・・・この小説を見ていただく方々のおかげです。

？最後に・・・？

この小説家になろうと見てくださる方々へ・・・

「
ありがとう
」の感謝を・・・

1 Step:」ようこそ、汚れてしまった近未来へ・・・」(前書き)

様々な世界。

もし・・・本当にこことは別の世界があるのなら・・・

どうか・・・どうか俺の願いを聞いてください・・・

誰か・・・この世界を助けて・・・！

1 Step:「ようこそ、汚れてしまった近未来へ・・・」

- ? -

「ん？」

「どうしました？」

薄暗い道をただ進む男と女。

一人の名は、『ボス』

魔王の力を授かり、見事とある国の危機を救った”ただの人間”
もう一人の名は、『スラナ』

その魔王の秘書であり、執事でもある者。 いわゆる所謂お側役。

「いや・・・誰かが助けを求めていたような求めているような・・・

」

「何ですかそれ・・・漫画やアニメじゃあるまいし・・・」

「スラナ・・・さらっとメタ発言は止める。」（しかし・・・今

さっきの助けの声・・・気になるな・・・）

「気になりますか？」

「ああ……それとあんまり心を読まないでくれ・・・」

「顔に書いてます。」

「なぬっ？」

「嘘です。」

「こらっ！」

- ? -

それは、何処かの世界。
近未来の世界。

「ハア……ハア……。」

物陰で息を切らせながら座り込んでいる一人の男の子……。
「あんな……あんな奴に勝てるものか……！ クソッ！」

「そうか。 ならば……試合放棄と見なし、収容所へ連れて行く。」

そこへ、黒いスーツを着た男が現れる

「クソッ……！ 見つかった！」

少年は逃げ出した

「待て！ 逃がさぬッ！」

「ハア……！ ハア……！」 （逃げ切るんだ……！ 必ず……！）

「こちら。 逃走者は、そちらへ向かった。 オーバー」

《了解。 こちらに誘導してくれ。 オーバー》

少年と黒スーツの男との鬼ごっこは加速する

まだまだ続く道。 先に行き止まりさえないであろう道

それは……本来、”車が通るべき道”だった。

果てしない道路が続く……

「逃げ切らないと……逃げ切つてやるんだ……！」

「……無駄。」

聳^{そび}えるビルの屋上から、一人の男が飛び降りてくる

着地時には、砂埃が男の周りを包み込んだ

煙が晴れ、男の姿が見えてきた……

男の格好は、両手が鋼鉄製の義手。 服装は軍隊が着るような迷

彩服を着ていた。

そして……男の顔はニツと笑っていた。

「往生しなおチビちゃん 無駄な抵抗しなかったら、痛い目に

は遭わせないからよ」

「くっ……！」捕獲者”……！」

「おうおう！ 人聞きの悪い発言じゃねえかあ……俺達は、立派な警察官及び監視員でありますぞお？」

「五月蠅いッ……！ お前等の……お前等のせいで……！」

「ああ？ 何だつてえ？ 声が小さすぎて、よく聞こえないな
く？」

「ああ……こりや失礼。 体もヒョロヒョロで蟻^{アリ}みたいにな
いからだなあ……はははははっ……！」

男の言葉に少年はキレた。

「その口を閉じろ！！ 脳筋やろオオオオオオオツ……！！」

- ? -

戻って、ボス達が居る空間。

「本当にこっちなんですかあ？」

あの後、ボスはどうしても声が気になり……声が聞こえた方角
へと足を進める。

「ああ……確かにこっちから聞こえたんだよ」

「それよりも……早くボスが”居るべき場所”へ早く急ぎましょ
うよあ……」

「いや、そもいかなのだよ」

「どうしてですか？」

「俺の世界はこれぞとばかりに通り方が複雑なんだ。」

「こうして回路を通るのは、ただの通路。ここからが本番なんだ」

「……つまり？」

「ここからもう一度、別の世界を通らなくてはならないって訳。」
「……えっ？」

スラナは首をかしげる

「つまりね。二重って訳なのよ。これが」

「魔王。よく分かりません。」

「ああ……俺って、こういう奴は語り慣れてないんだよ」
「……」

ボスは、こんがらった頭を掻く

「なら、無理に説明しなくても……」

「お前が説明しろっつーから……」

「一度も言ってます、そんな事。」

「もう良いから……さつさと声がした方角へ行くぞ。」

（話そらしたな……）

「何か思ったか？」

「いいえ」

- ? -

「ハア……！ ハア……！ 痛ッ……！」

あの後……少年は、ここぞとばかりに殴られ……スタボロに
されていた

鋼鉄義手の男が近づいてくる

「へへへっ……弱いなあ……おい。」

「さっきの威勢がまったく感じられねえ……？」

「う、五月蠅い……！」

「ああ？ 弱者が……」

男は、鋼鉄の義手で少年をぶん殴る

「ぐふっ！」

少年の体は、面白いほどに飛んでいく・・・

「チーム 部隊將軍。 それぐらいにしときなさい。 オーバーキルですよ」

黒スーツの男が、男の前に出て止める。

「何だよおゝゝ・・・別に良いじゃねえか・・・収容所では、これよりキツイ地獄が待ってるんだからよゝゝ・・・」

「聞こえませんでしたか？ 即刻攻撃態勢を中止。 ターゲットの捕獲を最優先なさい。」

「チツ・・・！ 相変わらず、チームTopの大将さんは、頭がお堅いですな！」

「脳筋野郎の貴方には、言われたくありませんでしたね。」

「まあいいぜ・・・こいつの意気は気に入った。 こいつは俺のチームでこき使ってやるぜゝゝ・・・」

「悪趣味も含めてですね。 貴方は・・・」

「悪趣味とは酷い言われよう。 せめて”良い趣味”と言って欲しいですな」

「まったく……」（あの少年・・・精神的に死んだな。）

「さあ、回収回収と・・・」

……俺・・・ここで終わりなのかな？

結局・・・廃墟の皆に迷惑かけっぱなしだったなあ・・・

ごめん、皆・・・ごめん。

今度・・・”捕獲者”として皆の前に現れたら・・・

”俺を殺してください。”

「……ぶつ殺すって台詞は、終わってから言つもんだぜ？
？」

「……えっ？」

少年の前に二人の人間が現れる。

「少なくとも……俺達……家族の世界ではな」
ファミリー

「何か……その台詞。どっかで聞いたような……」

「気にするなッ！」

ボスは、某キ ガイア二メの魔王声を真似ながら言った
「なんつー顔と声で言うんですか」

二人の突然の登場に將軍は、驚きの顔を隠せずにいた。

「な、何モンだ！ お前ら！ 何処から出てきた！」

「お待ちなさい將軍！ まさか……！ 彼らは！」

黒スーツの男は何かを思い出す。

「俺か？ 俺の名は、ボス。 ”ただの人間だ”」

「そして、そのお側役をしている者。 スラナです」

「 ”異端者”……ッ！」

「な、何なんだよ……その異端者ってのは……！」

「あー……俺知ってるぜ？ 確か、別世界の人間をよくそんな名前
前で呼ぶんだっけな」

「それよりもボス。 背後に重傷者が居るんですが……？」
「なぬっ？」

ボスは、後ろを振り向き少年の姿を確認する

「……ああ、男の娘くんですか」

「何故、その印象になる。」

「ていうか……この傷って、その図体が無駄にデカくて明らかに脳筋っぽいあんたの仕業？」

「あつ？ そうだが？ 何か文句あるか？」

「ほうほうそうかそうか……お前のせいかなぁ……」

「全国の男の娘ファンを代表して……貴様をデストロイしてやる。」

ボスは、拳をパキポキ言わせる（フリ）をしながら男を睨みつける

「ボス。 背後から途轍もない殺気が……！」

「オーモローガーでも良いぞ？ 最終的にはレッテーにしてやるのか？」

「ボス！ イマイチ言っているネタが分かりません！ てか、全然分かりません！」

「実に不愉快。 『ハッキョー発狂セット』という動画を見せられた気分並みに不愉快だ」

「だから！ 分かりませんって！」

「知っている人ならば知っている。」

「なーにを訳のわかんねえ事をほざいてる！ 来ないのか？ 来るのか？ はつきりしな！」

將軍のイライラは有頂天だった。

「すまん。 相手してやる。」

「スラナ。 その男の娘くんの治療を頼む。」

「ボス。 その印象は、絶対なのですか？」

「絶対です。」

キリッ顔で言う。

（絶対なのね……）

「あの・・・！」

「何だい？ 男の娘くん」

「いや・・・俺、そんな名前じゃないんですけども・・・」

「今は本名聞く暇ないから暫らくこの名前で我慢しろ」

（えっ・・・！？）

「そ、それより・・・あなた方は一体・・・？」

「言つたろ？」 ただの人間”だと」

「どっからどう見ても人間です」

スラナは「うんうん・・・」と納得するように首を頷かせる

「そゆこと。……………だけど・・・」

ボスは、改めて將軍を睨む。

「困っていたり、虐められていたりしている人が居れば、すぐに駆けつけるヒーローさ」

「ヒーローと呼べるかといえは・・・まあ、悪系ヒーローと言えますね」

「……………悪系ヒーローは意外と好かれるンだよね……………」

- ? -

「ええい！ さっきからごちゃごちゃと話すな！ イライラする！」

「おいおい、カルシウムちゃんと取ってるかぁ？ あんまり怒りすぎると血管が切れちまうぜ？」

”ブチッ”

「あつ・・・今、中の血管が切れた音。」

「地獄へ一直線ンンンンンッ！！！！」

鋼鉄の拳がボス目掛けて飛んでいった！

しかし・・・拳はボスに命中した手ごたえを見せなかった・・・
「何っ!？」

なんと・・・！ ボスの腕から生えるピアノ線状の触手が盾になり、攻撃を防御したのだ・・・！

「甘い甘い」

続いて、触手は將軍の義手に巻きつきギリギリ絞める。

「はははっ！ 無駄だ無駄！ 俺の義手は鋼すら折り曲げる代物！
そう簡単に……」

バラバラに砕けた。

「簡単に砕かれましたが？」

「なん・・・だと・・・？」

「鋼鉄（笑）って所だな。 こりゃ」

「ありえねえ・・・ありえねえぞオオオオオ!!」

將軍は、もう一つの義手で攻撃を仕掛けようとした。
だが・・・

「そこまです。 お止めなさい」

黒スーツの男の言葉に將軍は、ボスの目の前で拳を止めた・・・

「無駄は、貴方の方ですよ。 脳筋將軍。」

「何い!？」

「見てみなさい。」

將軍は、自分の残った義手を見える。

そこには、既に触手が巻きついてた。

「なっ・・・!？」

「そのまま攻撃をしていたら・・・間違いなく両手を失う所でしたよ」

「ここは、大人しく引きましょう。 上に報告しなくてはならぬ事が出来ましたし・・・」

「……チッ！」

將軍は義手を下げた。

それと同時に義手に巻きついてた触手が解かれる。

「どうやら、少なくとも頭が冴えてて話が分かる敵さんも居るようだな」

ボスと黒スーツの男は一瞬だが睨み合った。

「それはどうも。それでは……行きますよ、將軍。」

「ちゅくしょう……！ 覚えてろ……！ 次は絶対にメタメタにしてやるからな！」

「覚えてねえよ、いちいちそんな負け犬のお決まり台詞。」

黒スーツと將軍は、その場から去っていった。

- ? -

「ボス。 見事な戦いっぷりでした。 彼の治療も完了しましたよ」

「そうか、ご苦労さん」

「…… 凄い……あのチーム の將軍を負かすなんて……」

「まあ、結論的には相手の試合放棄だからこちらの勝利だな」

「それよりも、幾ら治療したからと言ってもまだ酷い状態だ……」

「病院まで送ろう。 何処にある？」

スラナは、少年の肩を持ち立たせる。

「いえ……病院よりも、皆の所へ戻った方が……」

「皆？」

「ああ、あのAAの……」

アスキーアート

「ボス、いい加減そのネタは止めましょうか」

「シヨボーン……」

- ? -

その頃・・・別の場所では・・・

「ねえ〜」・・・”クロウ”の帰り、遅すぎない？」

「リーダー・・・もしかして・・・」

「……かもしれんな」

ここは廃墟。

ここでは複数人の人間が生活をしている。

「それって・・・まさか・・・」

「嘘・・・！　だつて、あの”ルール”は・・・！」

「ああ・・・確かに”ルール”は、弱者は戦闘さえしなければ大丈夫だ」

「だけど・・・もし、”ガルディース”の奴らに無理やり戦わされていたら・・・」

「クソッ！　ただでさえ負ければ、収容所行きなのに・・・！」

「落ち着け皆！　まだクロウが収容所に行かされたつて決まったわけがないだろう！」

「だけど、リーダー・・・！」

リーダーと呼ばれている青年は険しい顔になる・・・

「おい！　みんな〜！」

すると・・・そこに聞き覚えのある声・・・クロウの声が！

「クロウ！　無事だった……？」

そこには、一人の男に抱っこされ後ろにもう一人女の人が居た。
「だ、誰？」

〔数分後〕

「へえ……」異端者」……」

「聞いた事がある。確か、別世界から来た者を言っただっけか・・・？」

「そうそう。そういう知識は俺得意よ？」

「あれ？　そういう説明とは苦手とか言いませんでしたっけ？」

「スラナ。少し黙ろうか」

「まあ兎に角・・・まずは礼を言わなければならないな。ありがとう。」

「俺達”スクールズ”は、とても弱小で人数が少ない。」

「表に出るのも一苦労なのさ」

「あー・・・何となく察して理解できるけども、答えあわせの為にこの世界の仕組みについて説明してくんない？」

「……良いだろう。どの道、この世界に来たのならばいずれかは知らなければならない事・・・教えよう。」

- ? -

俺達が住むこの世界。

まあ、この町なんだが・・・ここには”ルール”というモノが存在する。

ルール1：お金などは戦って稼げ。

ルール2：勝者には金を・・・敗者は収容所へ・・・

ルール3：歯向かえば、即処分。

ルール4：生きなければ戦え！

以上が、ルールの一部分だ。

以前までは、こんなルールなんて無かった。
とても平和に暮らしていたんだ・・・
だけど・・・

あいつが侵略をしたせいで・・・この町は一気に・・・
戦う意志が無い者は、一斉に処分され、収容所で働かされている毎日・・・

そして・・・残された奴は、こうして廃墟での生活を世に無くされているんだ・・・

- ? -

「残りの説明は、追々説明する・・・」

「突然だけでも頼みたいことがある・・・」

「引き受けてくれないことは承知だが・・・」

「別に良いよ？」

「そう・・・別に……えっ？」

「良いぜ？ 助けてくれてことだろ？ つまりは」

「あ、ああ・・・だけど、本当に・・・？」

「あんまりくどいと嫌われるぞぉ〜？」

「あ、ありがとう！ 微かにだが、希望の光が見えてきたよ！」
「微かになのね・・・」

「魔王！ 良いのですか!？」

「あつ！ 馬鹿ツ！」

スラナの台詞に一同は耳を疑った。

「ま、魔王・・・？」

「あちや〜〜・・・あれほど言っただろうに・・・」

「すみません・・・つい口が・・・」

「ど、ということだ？」

「あゝ・・・説明するとだな・・・」

ボスは、自分が人間だが・・・魔王の力を授かった事を説明した。
寅午との戦い。そして、今までに出会った人達や仲間の事を・

「成る程・・・一言『魔王』って聞いたからビックリしたよ・・・」

「悪いな。俺も好きで魔王になったわけじゃない」

「というか・・・もう魔王は辞めた身なのさ、俺は・・・」

「そうだったのか・・・」

「それで？ 俺を仲間にしたのは良いけど・・・どうするんだ？
これから」

「ああ、俺達の計画は、こうだ。まず・・・俺達を困らせている
奴らを黙らせる必要がある」

「奴ら？」

「ガルディーズさ」

そこへ一人の赤毛の女が歩いてくる。

「カルティ」

「まったく・・・今日は色々大変な一日だねえ・・・クロウは怪我をする。　異端者っていう訳の分からない奴が仲間になる」

「こら！　カルティ！」

「ああ、構わないよ。　こういう意地っ張りな女性は嫌いじゃない」

「へえ・・・あんた、意外と紳士的な性格してるんだね。　ちょっとは見直したよ」

「そりやどうも。　それで？　ガルディーズつつーのは？」

「意地汚い連中さ！　ウチの仲間は、殆どがあいつ等にやられたのさ！」

「そう・・・ガルディーズのメンバーは、どれも上級クラスの実力者・・・とても敵う相手じゃない・・・」

「あー・・・色々と王道な展開になってきているのは、分かるな。」

「まあつまりは、そのガルディーズの大将を討ち取れば早い話だろ？」

「簡単に言うね・・・あの大将の首を取るなんてのは、至難の業つてもんだよ？」

「あらま、そうなの？」

「ああ・・・ガルディーズのリーダーは、他のメンバーの2倍・・・いや、10倍は強い！」

「幾ら、異端者のキミでも・・・互角に戦えるか・・・」

「うーん・・・」

ボスは、腕を組み考える

「ああ、そうだ。」

そして何かを思いつく

「ならば、その大将の実力がどんなものか・・・試しに見てみたら早い話じゃねえか」

その言葉にメンバーは愕然とする。

「あんたねえ・・・相手は御山の大将だよ？　そう易々と自分の力を見せるもんですか！」

「ツツコむ所そこですか」

スラナは、大事な部分をツッコまないカルティにツッコんだ

「仮に相手リーダーの実力を見て把握しても、勝てるかどうか分からないぞ・・・」

「そこんところは任せないな。」

「先ほど申した通り。魔王は、こう見てもお強い方なんですよ」

「たかが雑魚リーダーなぞに負ける魔王ではありません。」

「スラナ。ハードル上げてくれる嬉しいけども、上げすぎないようにね」

「すみません、少し自重します。」

スラナは頭を下げて謝った。

「さて・・・ここには食料とかは……ありそうにないな・・・」

「すまない・・・今日は、クロウが食料を取ってくる係りだったんだけど・・・」

「うーん・・・よし。だったら、俺がその食料をたっぷり頂戴してこよう」

「えっ!?!」

ボスの発言にメンバー全員が驚く

「ちよつと! 幾らなんでも言い過ぎだよ!」

「大丈夫大丈夫。お試し期間と思ってくださいな」

「お試しって・・・! 本当に大丈夫なのか!?!」

「大丈夫だ、問題ない。」

そして、ボスは立ち上がり外へ出ようとした。

「スラナ。念のために、ここの警備を頼む。」

「了解しました。」

「ちよつと待て!」

リーダーが止めに入る。

「ここのMAPだ。これで何処に何があるかが分かるだろう・・・」

「

「それと携帯無線機だ。これで連絡を取ってくれ」

「まるでデットライジングだな。オティスるなよぉ？」

「ボス。いい加減に以下略。」

「とうとう以下略まで言い出したな」

「じゃ、行ってくるぜ」

ボスは、外へと出る。

1 Step:「ようこそ、汚れてしまった近未来へ・・・」(後書き)

？あきがき？

どうも、零式です。

前回は終わりだと思っていたか？ 違うんです。これからなんです。

第二部は、ガラツと世界観を変えて近未来風・・・まあSF風味にやっていこうと思います。

(ぶっちゃけ、SFファンタジーの方が書き慣れているというかなんというか・・・)

「こんな感じのファンタジーはいかが？」的な・・・(意味不)そんなこんなで・・・第二部。始まります。

しかし・・・第一部よりも内容ぎっしりの本文を書いたのは、別で書いてるポケスペ小説以来ですな。

どんどん妄想が膨らみ始める・・・(だから、意味不なんだって)まあ・・・実際、第一部よりも第二部が人気あるって漫画やアニメ、ゲームがあるしね。(デビルメイクライ等を除く・・・)
第一部もオチオチ編集していこうかしらっと思ってます。

それと・・・小説の書き方を変えてみました。

一般で発売されてる小説風味で良いかнаっと思ってます。(実際書きやすいし)

毎回毎回書き方を変えててすみません本当に・・・^^;

さて、気づけばユニークなんかがあ・・・？ 1000を突破あゝ！？

驚きです。

本当に驚いたよこれは・・・」「どういふことなの・・・」「とリア
ルで口に出ちゃったよ。

本当に皆さんのおかげです。 本当にありがとうございます・・・

これからも宜しくお願いします！

2 / Step:「ガルディーズ」(前書き)

？前回までのあらすじ？

魔王職を（一時的に）終えたボスは、元の世界・・・自分の家に帰ろうとした。

しかし、それと同じくしてスラナが同行することになった・・・そんな中・・・とある世界から「助けて」の声が聞こえるそれをいち早く察知したボスは、声がする場所へ向かう

そこには、クロウという少年が將軍と言われる謎の人物達に捕まっ
てしまいそうになっていた。

そこへ・・・！ ボス達が目の前に現れる！

「異端者」と言われてしまうボス達だったが・・・難なく將軍を逃
げられてしまうが撃破した。

そしてクロウの道案内の末。 とある廃墟へと辿り着く
そこでは、複数人の青年や青少年少女達が暮らしていた・・・

話によると、突然現れた謎の男により・・・町はゴーストタウンの
ように荒れ果ててしまったという・・・

そんな中で作られてた”ルール”という物。

聞かされる物は、全て無茶苦茶で理不尽なルールだった・・・。

そんな中・・・メンバー達の空腹が限界だという事に気がついたボ
スは食料を調達しに町へ出る。

2 / Step : 「ガルディーズ」

- ? -

ボスは、町の路地裏を歩いていた。

「うーん・・・MAPでは、確かにこの先に店があるんだけどなあ
」・・・」

ボスは先の道を見てみる

明らかに何かに襲われてもおかしくない獣道^{けものみち}だった。

「どうすんだよ・・・どの道、この道を通らなきゃ店にありつけねえし・・・」

「かと言って、この先を進めば・・・出来事^{イベント}が発生する。絶対発生する。」

ボスは、路地裏をジー・・・と見ていた

「ええい！ 行けば都！ 何でも試してみるもんだって、とある偉い人が言ってたし！ 行くぞう！ よし行くぞう！」

ボスは、自分に渴を入れながら獣道へと進んでいく・・・

その頃、スラナが警護する廃墟では・・・

「スラナさん、貴方は・・・彼のお側役つと聞きましたが・・・」
リーダーがスラナに質問をする

「ええ・・・彼のお傍に仕えるのが、私の役目ですので・・・」

「そうですね・・・失礼。 てつきり、彼の事を愛していると・・・」
「うーん・・・まあ、そんな感情は今でも少しだけありますかね」

スラナの台詞にリーダーは少し驚きの表情を見せた

「ですが、私はあくまで彼のお傍に仕える者。」

「それ以上のそれ以下でもありません」

スラナは、にっこりと笑顔を見せて答えた。

……しかし、その笑顔には・・・少し寂しい感情が見えた。

- ? -

「ハクシュン！ ヴァ〜〜・・・」

ボスはくしゃみをする。

「誰か・・・俺のうわさをしているな？ 予想的には、スラナだな」

「しかし・・・あれから数分ほど歩いてるけども・・・全然何も変化なし、というか・・・そろそろ出口だ」

「なんだ、案外簡単……」

ボスは、通りの出口寸前で止まった・・・殺気を感じる・・・敵は・・・ざっと3名。

（敵か・・・少し厄介な連中に目を付けられちまったか？）

ボスは警戒しながら前へと進む・・・

それと同時にしゃがみこみ、壁に攻撃態勢で待機していた敵の攻撃を見事にかわした！

しかし・・・！ もう一人がナイフを構えて突進してくる・・・！
「おっと。」

” ヒュパッ！ ”

ボスの触手がナイフを握っていた腕に絡みつき締め上げる

「ぐああああああ・・・！」

「何ッ！？」

「無駄無駄ア〜〜！！！」

”クンッ”

ボスは、触手を引くと・・・ナイフを握っていた男の腕にしがみつかまれた触手が、さらに締め上げる・・・！

「ぎゃあああああッ！！！」

「腕を落とされなくなかったら、そこを潔く退くんだな。」

「くっ・・・！」

「待ちな。」

影の中から一人の青年が現れる。

「……女性じゃないのが少しかかりだな。」

「悪かったな……”流離人”^{さすらい}が、こんな所に何のようだ？ ……いや、当ててやろう」

ボスは無言で青年を見る

「大方、お前はこの先にある店の食料を手に入れたくて勇気を振り絞って来た・・・そうだろう？」

「半分正解で半分外れだ。 答え合わせは・・・」俺は、お前らをぶっ潰して店に行く”だ。」

ボスの一撃が、青年の顔面に当たった かに思えた。 だが

……

「良い拳だ。 けども、甘いな」

「ほう・・・気配的に読んでいたが、防いじゃう？」

青年はギリギリ、ボスの拳を”素手”で掴んで攻撃の勢いを止めていた

「防いじゃいけないのか？」

青年の反撃がボスへ襲い掛かる・・・！ しかし、ボスは素早く手を離して回避した

「おっと、危ない危ない・・・」

「へえ・・・お前、改めてこうしてみると流離人っぽくないな・・・

「一体何者だ？」

「相手の素性を知る前に、まずは自分から教えるべきじゃないのか？」

「これは失礼。俺の名は”ケイン” ガルディーズの副総長ふくりーダーをしている者だ」

「ほう・・・お前がガルディーズの・・・」

「流石にガルディーズの名は知っているようだな。さあ・・・次はあんたの番だぜ？」

「OK、俺の名は”ボス” ……異端者つー分類に入るモンだ。宜しく哀愁」

それを聞いたケインの顔が少しだけ真面目な顔になる

（異端者・・・？ まさか・・・！ これは、結構やばい相手と出くわしたかもしれねえな・・・）

「そうか、異端者ねえ・・・」

ケインは、少し間を空けるも平然とした顔で答えた

「これはこれで面白い奴と出くわしたもんだな・・・いいぜ、店はこの先だ。好きに通りな」

「ケインさん！ 良いんですか！？」

後ろで下っぱらしき不良がケインに意見する

「まあ今回は、こいつの意気込みに免じて行かしてやろうじゃねえか・・・」

（それに・・・相手が異端者となると幾ら俺でも太刀打ち出来るかどうか・・・）

ケインの表情には余裕が見えているかに思えたが、実際はそうではない。

相手が異端者となると、自分の力が敵うかどうかとも分からない相手・・・ましてや、先ほどの戦闘で普通の流離人ならば平然と食らっていたであろう攻撃を防いだ・・・

それが分かってしまったら・・・ここは通すしかない。

「良いね、話が分かる相手ってのは・・・」

「それじゃ、ここは素直に通らしてもらおうよ」
ケインの横をボスは通り過ぎた……その時に感じた”寒気”　ゾ
ツとくるような恐ろしい冷たい感覚がケインに伝わった。
（こいつ……何て殺気なんだ……！？　この殺気が出せるのは・
・・）

”人を殺した奴でしか出せない者だけ……！”

「ああそうそう。　下手な真似はしない方が身の為だよ」

俺は平然と人を殺せちゃうから

冗談に聞こえなかった。

「殺せちゃう」　？　馬鹿な。　あいつは本当に俺達を殺せた。
なのに……殺意を出したというのに殺しにかからなかった……
何故だ？　何故、不気味でも無い……平然とした笑顔で言えるん
だ？
分からない……さっぱり分からない……

ボスは、奥へと進む……

「……正直、人を殺すのは……あの時だけで良かったんだよ。
本当は……」

その時、ボソッ……と呟いた一言。

（サラには……絶対見せたくないよな。　あんな姿。）

そして・・・暫らく薄暗い路地を通ると・・・その先に、一軒の店が建っていた。

『グルーディ』という名前が鉄板に白いテープで文字を書くようにして貼っただけの簡単な看板が目立っていた。

「ここか・・・本当に大丈夫なのか？ この店・・・」

ボスは、店の中に入っていく

「いらつしやい」

商品が並ぶ棚を挟んでヒゲを生やした男がレジに座りながら新聞を読んでいた。

そんな中、新聞から少しだけ目をそらしてボスの姿を見た瞬間、

「へえ・・・」と少し驚いた顔でボスを見る。

「珍しいな、ここいら辺はガルディーズの住処だったのに・・・よくケインの許しを取れたな」

「一発殴ってやったら通してくれたよ。 多少ビクビクしてたけどな」

「……こいつはさらにたまげたなあ・・・！ あのケインに一発ぶち込んでやるとあ・・・キモが座ってるというか・・・」

「結果的には防御されたんだよ。 けど何故か通してくれてね」

「ほお・・・普通は殴った後に強力な反撃食らうのにか？」

「強力？ ”あの程度”が？」

ボスの言葉に完璧にビクリし、啞然とする店主。

「お前・・・それ、マジで言ってるか？」

「大マジだが？」

「……ぷっ・・・ぶわっははははははは！！！」

店主は、高笑いをしながらボスの肩をパンパン叩く

「何か可笑しい事でも言ったか？」

「いやいや・・・マジで驚かされたぜえ・・・とうとうガルデーズ壊滅の危機かあ？」

（確か、ケインとかいう奴・・・副総長とか言ってたような・・・）
「いいか？ ケインは、ガルデーズの中でも総長の右手と言われる奴だ」

「それを負かすとはあ・・・あんたやるねえ・・・」

「負かす？ 引き分けの間違いだろ？」

「いんや、その勝負はあんたの勝ちだよ。 ケインの奴をビビらせ
たんだからな」

「へえ・・・」 （それなりに凄い奴だったんだな・・・ケインの奴）

「さて・・・ここに来たって事は、食料を取りに来たんだな？」

「ああ、”ニンジン”と”じゃがいも”、”肉”と”カレールーの素”無いか？」

「何だ？ カレー作るならカレー作りたいといえば良いじゃないか」
「カレー作りは、人それぞれ・・・俺が思っている材料を相手が間違わない為さ」

「成る程、よっしゃ後ろの棚から取りな！」

ボスは棚からニンジンとじゃがいも、肉とカレールーの素を手にした

「あつ・・・そういえば、金って要るんだよな？ 当然。」

「ああ、まさか・・・忘れたか？」

「……生憎・・・ね。」

「じゃあねえなあ・・・お代はツケにしてやるよ。 その代わりに・・・また来た時は面白い話してくれよ？」

「気前が良いね・・・そういうのは嫌いじゃないぜ？」

ボスは意気揚々と店を後にした。

- ? -

その帰り道……

「あれか」

『ターゲット” 異端者？”

確認完了。』

『観察モードから戦闘モードに移行。スタンバイOK……』

「よし、行くぞ！」

ビルの屋上から、ボスを監視している二人の影はボスの目の前に飛び降りた

「何だ？ 今度は、まーた変な輩が……」

「異端者？…… お前を拘束する。大人しく投降しろ」

降りてきたのは、以前戦った將軍とよく似た迷彩服を着た軍人らしき者と同じくベレー帽を被り、迷彩服を着た胸が大きい女性だった。

「やつと敵さんに花が出てきたな。 ナイスパイ乳。」

「むっ…… 何と破廉恥な……」

軍人は、ボスの発言にムツと睨みつける。

「軍人さんよ、あんたも男なら女とかに興味持ちなさいよ」

「卑猥だとか破廉恥だとか…… そんなの男の損と言っただぜ？」

「ええい！ 黙れ！」

後ろで立っていた女軍人が、男の指示と同時にホイスターから拳銃を取り出す！

「おいおい、それだから” 童貞” って聞かれるんだぜ？」

「…… ツ！ 撃て！」

『Yes , Sir!』

” バンッ”

銃声が一発鳴り響く・・・

「甘いね、甘い甘い。」

しかし、ボスの声が聞こえる・・・触手を盾に変え、銃撃を防いだのだ

「ほう・・・それが、將軍から聞かされた嚴重注意行動か・・・」

「随分と昭和を彷彿させる台詞だねえほうほう・・・昭和生まれの人？」

「昭和？　なんだそれは・・・？」

「あつ・・・今の無し。　俺の戯言だわ」

「……？　まあいい・・・　それ《・・・》を打ち砕く方法など、既に入手している」

「武装変換！　銃撃から杭打ちへ！」

『Yes, Boss!』

女軍人の両腕から巨大な銀杭シルバー・バールが出てくる！

「ワオ・・・お姉さんロボ系の人？」

「いいや、アンドロイドと言った方がベターかな？」

「戯言を・・・串刺しにされるが良い！！」

「おいおい、こっちは荷物持ちなんです……」

ボスは荷物を持ちながらも、突進してくる女軍人から逃げず・・・
どうどうと仁王立ちでいた。

そして、杭が盾とぶつかり合う！

「はい、馬鹿が掛かる～～」

「何！？」

なんと言うことか・・・杭は全然盾に敵わずして逆に打ち破られ砕けてしまった・・・！

『アタツチメント装備に異常発生。　MYマスター、早急なる指示を』

「くつ・・・！　すぐに武装変換！　通常モードに移行！」

女軍人の腕から出ていた杭は戻され、何時もの美人な女軍人に元通りになる。

「うんうん、そのモードが一番だな」

「己・・・！」

「それに比べて・・・あんたは、命令ばっか・・・つまんねえなあ
くそういうタイプの人間って」

「つま・・・！ クソッ！」

『マスター、ここは一旦撤収を要求します。』

「くう・・・分かった・・・今回の目的はあくまでデータ回収。
これで勝ち誇るなよ！」

そう言い残し、二人の軍人は嵐の如く去っていった・・・

「うわあ・・・久々に捨て台詞を聞いたような気がする・・・」

ボスは苦笑しながら皆が待つ廃墟へと戻っていく

- ? -

「ただいまあ～～・・・」

「おかえりなさいませ、魔王。」

「……そこはせめて『ご主人様』とか言って欲しかった」

「口が裂けても言いたくありません」

「ですよー」

「驚いた・・・まさか、本当に食料を手に入れてくるなんて・・・」

スクールズのメンバー全員は、ボスの帰還に驚いていた。

「へえ～あんた中々キモが座ってるじゃん」

「その台詞、店主の奴にも言われたぞ」

「あつ・・・そうそう、お金の話だが・・・」

「そうだ、それなんだ・・・金も無いのにどうして食料なんか？」

「いや・・・ツケてやるってさ。 気前のいい店主だねえ・・・
って、どうしたの？」

ボスの台詞に一同は哑然としていた。

「うつそ．．．あんた、あの店主に気に入られたの？」

「こりや．．．少し、やばい気がしてきた．．．」

「……？」

「まあ、そんな事よりも．．．手に入れた食料は？」

「ああ．．．折角の歓迎記念だ。俺が腕を振るってやるよ」

「ボス、私もお手伝いを．．．」

「おお、サンキュー」

二人は、台所へと向かう。

「……さて、クロウの様子はどうか？ ”クルミ”」

「もう大丈夫だよ、傷は打撲と肋骨の数箇所だけの骨折だから．．．」

クルミと呼ばれる女の子は、クロウの症状を言った

「そうか．．．それでも重症だな」

「まったく．．．許せない奴らだね！」

「落ちて着けカルティ。結果的には、彼らが助けてくれたんだ。

それだけでも良しとしようじゃないか」

「でも、リーダー．．．！」

「それに．．．今の俺達に彼らという強力な味方が就いてくれた」

「これで、奴らに反撃が出来るかもしれない．．．！」

「ああ．．．元の平和な退屈な日常を取り戻す！」

リーダーとカルティは互いに闘志を燃やしていた。

「うつ．．．ここは？」

「あつ！ クロウ！ やつと起きた！」

クルミの言葉に全メンバーが反応する

「皆？」

「うん！ 良かった．．．！ クロウが居なくなったらと思うと私．．．！」

クルミの瞳から一筋の涙が・・・

「クルミ・・・泣くなって・・・」

クロウは、ゆっくりとクルミの涙を拭き取る。

「心配したぞ、クロウ。」

「リーダー・・・」

「まったく・・・あの二人が助けに入らなかったら、今頃こんな事になっていないよ!？」

「すみません、カルティ姉さん・・・」

「たくっ・・・! あんたはアタイの大事な弟分なんだから、しっかりしなよ」

「すみません・・・本当に・・・すみません・・・」

クロウの目から涙がこぼれる

「あー・・・感動の涙まみれのシーン中・・・悪いんだが・・・飯の支度がジャストに出来ましたぞ」

「本当に狙ったかのようにですね、ボス。」

「本当にね・・・あるんだね、こんな事・・・」

その後・・・ファミリー皆でカレーをおいしく頂きました。

2 / Step:「ガルデイズ」(後書き)

？あとかき？

Heyどうも。 零式でおまつww

今回は、少々更新が遅れてしまったようで・・・(まあ、何時もの事だけだね。)

現在、私は色々生き延びてます。

就職探ししたり、職安で仕事探ししたり、アルバイト募集が無い
か一日中探し回ったり・・・

……クソツォ……マイケルの曲が心に染みて目から涙が……
(; ; ;)

マイケルは本当に最高の男であり、最高の歌手でもありました
本当に惜しい人を亡くしたよ……本当に……

さて、そんな天国の神様にスカウトされて毎日ライブをしているキ
ングオブポップの事は置いて……

今回は、ちょこつと恋愛(?)的な話でもしようかなと思っています。
す。

すっごいマイナーで定番な恋愛ネタです。

さてさて・・・次回は、果たしてどうなるのかしら・・・?
それを知りたいのは私です。

ああ、それと・・・やつと・・・やつとお気に入り件数で30件突
破したお!

やったねた ちゃん!(おいばかやめろ)

でも、色々減ったりするので土器土器テラキキです。

アクセス数も半端ないよ。本当にありがとうございます。

この小説+他の小説も含め・・・うp主は皆さんの温もりで強くなる奴です。

EX Step:「ぶっちゃけ第一部の奴は酷かったと思うんDA」(前書き)

上手く行くんじゃない。 上手く出来ないんだ。

(By 主)

EX Step:「ぶっちゃけ第一部の奴は酷かった

と思うんDA」

EX Step:「ぶっちゃけ第一部の奴は酷かったと思うんDA」

- ? -

うp主（以降”主”）「……えっと・・・？　今回は、何故こんな回なのか・・・」

「ご説明すればするほど尺とか伸びるから言いたくないような言いたいような・・・」

???「チエストオオオオオー！！！！」

主「うおう！？　な、何奴ツ！！」

ゆつくり（以降”ゆ”）「フッフッフ・・・我が名は『ユツクリーン』！！」

「ヌコア　クというブサイク猫とは違いますよ。　お饅頭ですよ」

」

主「てめえこの野郎。　てめえこの饅頭ヤロウが。」

ゆ「今回は第一部についての語りなんでしょう？」

主「うむ・・・スルーされて多少アレだが、まあ良ししよう・・・」

」

「そうです。　今回は総集編。　振り返り編。　反省編。　・・・

つーことになってますさかいに」

「決して”ネタが無いから総集編とかやつちまおう”とか・・・ぜーんぜん！　これっぽっちも考えておりませんのでご安心を・・・」

ゆ「嘘だ。　絶対嘘だ。」

主「さーでは張り切って行ってみましょうか」

ゆ「スルーしたな、こいつ。」

- ? -

第一部の出来について・・・

主「……正直にハッキリと言おう・・・」

(0w0)「何故アンナニモ高評価(?)」ガ出タンデイスカアアアアアアア!?!?」

主「もうね・・・正直驚いたよ。『どうせ人気出ずに終わるんだろうなあ』っと思いきや・・・いきなり沢山の評価が・・・」
「あの評価には全私が涙した。」

ゆ「本当に涙したの?」

主「えっ? 1mlも出なかったような気がするよ」

ゆ「ですよー」

主「まあ、兎に角驚いたわけだ。」

「それ以降からしつかりと連載をしてるんだよね」

ゆ「まあ、途中で手を止めたけどね」

主「その後に再び連載を再会したら急激にアクセス数が伸びた(x2)」

「でも、本当に皆さんには『面白い!』と思えたかは・・・分かりません。」

ゆ「感想とか貰えてたじゃない。」

主「それでもよく分からん物なのよ・・・これが・・・」

- ? -

このオリジナル小説の素となった奴は・・・

主「第一部は完璧にオリジナルです。何かをリスペクト・・・とまでいっておりません」

ゆ「ほう。それは関心だな」

主「ですが、第二部では、とある作品を題材にリスペクトしてたりします」

ゆ「うむ？ やっぱり『北斗の』辺りか？」

主「いいえ、『ペルナ』……『黒執』とか……色々……」

「

ゆ「……何処が！！？ 何処にその作品の要素があるんだい！？」

主「いや……雰囲気とか……ねえ？」

ゆ「ねえよ！！ 何処に雰囲気出てるの？ 馬鹿なの？ Fuck

Youなの？」

主「oh……Fuck man？」

ゆ「何、英語に英語で返して」

【收拾がつかないので寸止め。】

主「さて、色々のアレだが……まああくまでも”リスペクト”という形でネタを入れてるだけなのでね」

ゆ「その”リスペクト”という言葉が怪しすぎるがね……」

主「まあそんなこんなですが、一応ペルナ等の作品のネタをベースとして書いてるんですよ」

ゆ「変に×（しめ）たなこいつ。」

- ? -

キャラについて……

主「まずはボスから……」

ゆ「当然。何か設定があるんだろうね？」

主「ありますよ。主に裏設定。」

ゆ「ほう……その裏設定とは？」

主「それ言っちゃったら『裏』の意味が無いでしょう・・・」

ゆ「いや・・・そもそもそれを知らなかったら『裏』の意味が無いんじゃない・・・」

主「うゝむ・・・まあ良いでしょう。それでは特別に表・裏設定をババーン／と出しましょうか」

ゆ「何・・・そのババーン／・・・」

ボス：年齢20・性別

特徴：少し長めの黒い髪・腕にはピアノ線状の触手（ボスの意思で動く）

攻撃方法：触手での攻撃・触手で作り上げた武器での攻撃（主に刀など）

好きなモノ：サラ（恋人？）・家族

嫌いなモノ：鬱な事・トラウマ・親（アルカードを除く）

設定：“ただの人間”

普通の人間とは少しばかり違う部分があるが・・・一応ただの人間である。

殺人履歴があり、ボスが18の時にこれ以上の親からのストレスを持たないように

家を出て行こうとすると親からの一発の殴りにより奥深くに宿していた殺人本能と感情が爆発。

自分の本能のままに親を数秒足らずで殺害。

気が付いた時には左手にナイフを持ち、右手には親の首を持っていた。

それに恐れるかと思いきや・・・自分でも訳が分からない程の笑いが起きる。

一笑いしたその後。ボスは左手に握っていたナイフを自分の心臓目掛けて自害をしようとした。

だが、そんな時にアルカード・・・今の第二母が割り込んできてボスを助ける。

その後・・・アルカードが建てた組織の一員となる。

そして・・・その後は沢山の家族という名の仲間を集め、今では数十名の家族がボスの傍に居る。

しかし・・・未だにボス自身が親を殺害したという事実を口外出来ずに居る・・・

主「……こんなもんかな？」

ゆ「何か・・・すつげえ主人公に見えないんだけど・・・」

主「うん。書いてる私でも『これ・・・主役で良いのかな？』っと思う始末だよ」

ゆ「何故、こんなキャラにしたし」

主「私にもよく分からないのSA HAHHA」

「はい、続いてボスの恋人『サラ』の設定。」

ゆ「うわ。切り替え早・・・」

サラ：年齢不詳。（身体年齢は12ぐらい）・性別

特徴：ボスと同じ少し長めの黒い髪・小さなアホ毛・ローブを羽織っている

攻撃方法：一切不明。だが・・・兎に角強い。異常な程まで強い。

好きなモノ：ボス

嫌いなモノ：不明。

設定：ボスの恋人。

その正体はまったく不明。

ボスでさえも彼女の全てを知ってはおらず・・・謎に包まれた少女。いざ戦闘になると異常なまでの戦闘力を誇る。

大抵の雑魚敵ならば一撃で木っ端微塵に・・・

ボス自身も彼女の事が好きでいるが・・・サラ自身もボスの事が好きである。

その愛は色々と馬鹿ッル並みで・・・夜は一緒に布団で寝るなど・・・何時もボスとベッタリである。

ゆ「……おい、うp主」

主「私の趣味に決まってるじゃないかJK」

ゆ「やっぱりかー！ー！！ この野郎！！」

「ロリ好きで長門みたいな物静かなキャラ好きだからこんなキャラ作ったな！！」

主「良いじゃない！！ 私の小説なのだからさー！！」

【この後、数分もの口論によりカット。】

主「では、続いては……アルカード。」

アルカード：年齢不詳。（実際は100歳以上は生きてるとか……

）・性別

特徴：血のように真っ赤な長い髪・同じく血のように赤い眼

攻撃方法：様々ある。（主に物理系の攻撃をする）

好きなモノ：ブイ・ピカ・家族

嫌いなモノ：大切なモノを気づける輩

設定：（元）神を超えし者。

神を超えていた当時のアルカードは世界を軽く滅ぼせる程の力を持っていた

だが、自分の能力に飽きを見たアルカードは自ら神超えの称号を破棄する。

その後、ぶらりぶらりと世界を放浪し……一つの組織を築く
それと同時に彼女は己に『恋を果たすまで死ねない』呪いを自らに付ける

この呪いは詳しくいえば恋をしてその者が死ぬまで愛す……その
時初めて彼女は死を得るという呪いである

何故、彼女が自らにこの呪いを付けたかは本人しか分からない。

そして、その後……彼女は一つの恋をする。

ブイとピカ。 この二人の出会いにより彼女は己の人生というなの恋を果たせると思ったが・・・

二人の為に自らを犠牲にして二人と死に別れることに・・・
(当然、呪いの効果により死んでいない)

それ以降も二人の事を心配して流れる日常を過ごしている。

ゆ「これは・・・」

主「所謂、悲劇のヒロインって感じです。」

「ちなみに・・・アルカードは私が書いた別の作品でも登場しています。」

【「ラジアータ・マイ・ストーリーズ」など・・・】

ゆ「てか・・・後半部分の設定。 可哀そすぎね？」

主「だから、悲劇のヒロインなんですよ」

ゆ「いや・・・何処がヒロイ」

アルカード「何か？」

主「志村ーーーー！！！！ 後ろ！後ろ！」

ゆ「えっ？」

＼デーンノ

【数分後】

主「まあ、つーわけで残りのキャラの設定も書きたかったけども、かなーり長くなりすぎるのでまた今度の機会に・・・」

ゆ「仕方ないね」

- ? -

今後の展開。

主「実は・・・次の話は既に出来上がってるんですよ。……脳内に」

ゆ「脳内かよ。」

主「出来れば、すぐに書いて投稿したいです」

ゆ「まあ、途中でノートPCがご臨終しかけたアクシデントがあったせいでねえ・・・」

主「本当にねえ・・・」

NTPC【俺は悪くねえ!!】

主「良いからちゃんと機能しなさい。」

「……まあ、そんな訳で・・・次回はなるべく早く投稿できるように頑張りたいと思ったりする」

ゆ「フラグ乙。」

主「それじゃあ。今回はこれで終わりッ!!」

ゆ「メカたが雑・・・www」

EX'Step:」ぶっちゃけ第一部の奴は酷かったと思うんDA」(後書き)

終われ。

3 Step:「恋ってどんな感じですか？」（前書き）

？前回までのあらすじ？

二代目魔王（現在は辞めて”普通の”人間）であるボスは、自分が住む世界・・・家族が待つ家へと帰ろうとしていた
しかし、その最中・・・誰かの助けを呼ぶ声を聞きつけ、とある世界に舞い降りた

そこでは暴力が支配し・・・戦わなければ生きていけない世界へと成り果てた近未来の世界だった。

ボスとスラナは助けた男の子・・・『クロウ』が住む廃墟

そこに住むメンバー『スクールズ』と仲間という形で協定を結ぶ。

そんな中・・・ボスは食料を獲得するため『グルーディ』という店にへと向かう・・・

そこに『ガルディーズ』という悪どいジャンキー集団に絡まれる・・・
だが、平然とそれをなぎ倒したボス

そこで出会ったガルディーズの副総長・・・『ケイン』と出くわし、少しばかりの戦闘となる。

その後、見事食料を獲得したボスは帰還中に『捕獲者』と呼ばれる組織のメンバーが襲い掛かってきた！

しかしながらもあっさりそれを撃退したボス
だが、それはほんの小手調べ・・・ただのデータ収集にしかならなかったと敵は捨て台詞を吐きながら去っていった。

その後・・・スクールズのメンバー達でカレーをご馳走になった。
（By ボス）

「3 Step:」恋ってどんな感じですか？」

3 Step:「恋ってどんな感じですか？」

？前回までのあらすじ？

二代目魔王（現在は辞めて”普通の”人間）であるボスは、自分が住む世界・・・家族が待つ家へと帰ろうとしていた
しかし、その最中・・・誰かの助けを呼ぶ声を聞きつけ、とある世界に舞い降りた

そこでは暴力が支配し・・・戦わなければ生きていけない世界へと成り果てた近未来の世界だった。

ボスとスラナは助けた男の子・・・『クロウ』が住む廃墟

そこに住むメンバー『スクールズ』と仲間という形で協定を結ぶ。

そんな中・・・ボスは食料を獲得するため『グルーディ』という店にへと向かう・・・

そこに『ガルディーズ』という悪どいジャンキー集団に絡まれる・・・

．だが、平然とそれをなぎ倒したボス

そこで出会ったガルディーズの副総長・・・『ケイン』と出くわし、少しばかりの戦闘となる。

その後、見事食料を獲得したボスは帰還中に『捕獲者』と呼ばれる組織のメンバーが襲い掛かってきた！

しかしながらもあっさりとそれを撃退したボス

だが、それはほんの小手調べ・・・ただのデータ収集にしかならなかったと敵は捨て台詞を吐きながら去っていった。

その後・・・スクールズのメンバー達でカレーをご馳走になった。
(By ボス)

「3 Step:」恋ってどんな感じですか?」

「はぁ・・・」

クルミは椅子に座りながらため息を吐いていた

「どーしたの?」

その後ろでボスがひよつこりと顔を出す。

「ひゃあ!? ボ、ボス・・・さん」

クルミはいきなり出てきたボスにびつくりして慌てふためく

「その”さん”付けは止してくれないかなあ・・・恥ずかしいのもあるが、何よりもそれほど偉くないし・・・」

「で、でも・・・」

「いいのいいの。馴れ馴れしい方が俺は好きだな」

「じゃ・・・じゃあ・・・ボス。」

クルミは顔を少しウジウジしながらもボスの名前をあだ名で呼んでみる

「あいあいなんでしょーかあ?」

それに対してボスはニツコリと笑顔で返した

「”恋” ってした事ありますか?」

「ん? あるけど・・・クルミちゃん恋してますんか?」

ボスの言葉にクルミは頬を赤らめながら首をコクンツと縦に頷く

「おお・・・誰よ? もしかして、クロウとか?」

「なななな、何で、わわわ、分かったんですか!?」

ボスの言葉にクルミはさっきよりも激しく慌てふためいた

「クルミちゃん。反応が面白いけどテンパリすぎだよ」

数十秒間だけクルミは深呼吸して気持ちを落ち着かせた

「落ち着いた？」

「……はい。」

「それじゃあ、改めて聞くけども……クロウの事が好きなんだね？」

クルミは首を縦に振った

「でも、どうして分かったんですか……？」

「そりゃあ……前シ時の反応見りゃあ分かるさあ」

「前の時？」

「ほら、クロウが目を覚ました時。」

クルミは記憶を掘り起こしてあの時の事を思い出す……それと同時に頬が一気にボワツと赤くなる。

「あ、あれは……その……心配だったのもあるし……」

（なにこの子。すっげえ初々（ういうい）しくて可愛い……）
ボスはそんなクルミの様子を見ながら心の中でニヤついていた・

「それで……まあ、単調にまとめれば俺にその恋のキューピッドになってくれって事だろう？」

ボスの言葉を返せないのか……クルミは赤面で頷いた

「まっかせなさい　リア充よりも甘いカップルが大好きな私がサポートしてやりましょう？」

「ほ、本当ですか！？」

「イエース」

「や、やったー！」

クルミはボスからの承諾に喜んだ。　その喜びの仕草はとても可愛らしかった……

（　本当……お似合いのカップルになるな……こりゃ）

- ? -

その後、ボスとクルミは”男を落とす”にはどうしたら良いのか話し合っていた

「男を落とすには・・・」

「はい・・・」

クルミの瞳はキラキラと輝き、興味津々でボスの言葉を真剣に聞いていた

「それ相当なる可愛い仕草＋甘い言葉で攻める！　これ大事。」

「可愛い・・・仕草？」

「しかし・・・クロウのあの性格を見てなんとなく分かるが・・・」

「

何ですか？」

「相当な天然だと見た。」

「あー・・・確かにそれはありますね・・・クロウは昔頃から天然な感じが幾つかありますから・・・」

「……やっぱり、あるんだね・・・」

「はい・・・」

クルミは若干苦笑になる

「まあ・・・やってみるには越したことは無い・・・ちょっと俺で練習してみようか」

「は、はい！」

「まず、男性の胸元に密着する。」

「み、密着ですか・・・！？」

「イエース。さあ、私の胸に飛び込んでこーい」

「で・・・では！」

クルミは息を呑み、ボスの胸に飛びつくように体を密着させる。
（ボスさんの体、結構ガチガチだと思ったけども・・・至って普通なんだなあ・・・）

「H A H A H A、ガチムチじゃなくてごめんねー」

（よ、読まれてる！？）

「さて、次の行動は・・・自分の顔を上げて、相手の顔をジッと見つめる。」

「こ、こうですか・・・」

クルミはボスに向かって、”上見”をした。

クルミの瞳は若干潤んでおり、とても可愛らしい顔がボスの目に映る

「がふッ!!」

あまりの可愛らしさにボスは”吐血”しかけた・・・

しかし、そこは素早く口を押さえながら横に顔を向けた

「だ、大丈夫ですか!？」

「ダ・・・大丈夫ダ、問題ナイ・・・!」

「ボスさん! 片言! 片言になってます!」

――数分後――

「ふう・・・クルミちゃん、中々やるじゃないか・・・」

「は、はあ・・・ありがとうございます・・・」

「うゝむ・・・幾ら天然でも、これは流石に聞くだろう・・・」

「あんた等、何やってるんだい？」

そこへ、カルティがやってきた。

「カルティお姉ちゃん!」

「これまた厄介なのが・・・ゲフンゲフン。」

「ああ?」

ボスはカルティにクルミがクロウの事が好きだという事を言った
それを聞いたカルティは突然ニヤつき始めた。

「ハッハーン・・・薄々気づいてはいたが・・・クルミくあんた、
クロウの奴が好きだったんだねえ」

「お、おちよくらないでくださいよ！」

「悪い悪い・・・でも、嬉しいねえ、最近はずい出来事ばかり
でアレだったが・・・あんた等のおかげで明るくなりそうだし！」

「それに・・・あんた等の姉御あねことして、心から嬉しく思うよ」

そう言っているカルティの笑顔はとても明るく元気な笑顔だった。
・

こんな暗い世の中に微かに見えた笑顔・・・

「それだね！　ボス、あんた疲れただろう？　クルミはアタイに任
して少し休みな。」

「良いんかあ？」

「大丈夫さ、こう見えても・・・沢山の男を魅了してきたんだから
ね！」

「鬼カノ（鬼みたいな彼女）的な意味ですね、分かります。」

「五月蠅いね！」

- ? -

クルミの恋愛問題はカルティに任せ、ボスは以前に立ち寄
った店・・・『ブルーデイ』へやってきた。

「ちわーす。」

「おう！　あんたか、いらっしやい！」

店には相変わらず店主が椅子に座っていた
ただ、変わった所を上げるならば・・・新聞から本へと読む物が

変わったぐらいだ。

「前回のアレ以来・・・ガルディーズの連中が襲わなくなったよ」

「ああ、あれ以降からガルディーズではお前のウワサでてんこ盛りだからな」

「うえ・・・何か、敵を大勢回したみたいで複雑な気分・・・」

「まあまあ、そうマイナス思考な考えで行くなつて！ 人生、プラス思考が一番大事だぜえ？」

店主は笑いながらボスの肩を軽く叩いた

「……まあね、人生はどうなるか分かったもんじゃない方が楽しいつて言うしね」

「そーそー、人生てーのは楽しく、そして艶やかにド派手に生きるものさ！」

「さてと・・・今回は何の御用で？」

「いや、特にこれといった用件は無い。 まあ・・・ヒマだから来たようなもんだな」

「ならよお、暫らく俺と話でもしようぜ、例えばあゝ・・・」

「ああ、それなら今出来たてゴヤゴヤの話があるぜ？」

「ほほう、聞かせてくれよ。 まあ、ただ聞くだけじゃあつまらんだろつから梅酒でも飲みながら話そうぜ」

「いいね。 俺、こう見えて二十歳過ぎだからな、梅酒ぐらいは飲める」

二人は梅酒を交わしながら話を進める。

ボスが話した内容はクルミの恋についてだった

「成る程ね・・・恋のお悩みと・・・」

「そうなのよ、何か・・・良い提案ない？」

「あるにはあるぞ」

そういつと店主はゴソゴソと後ろの棚を漁る

そして・・・棚から酒を持ってきて、ドンツと机の上に置いた
「酒で酔わして、そのまま押し倒
」

「駄目だからあ！ それやつちゃ駄目だからあ！ 最終手段だから！！」

ボスは思わず席を立ち、店主に指で差す

店主は「ハッハッハッ」と笑っていた。

「冗談だよ冗談。 恋ってーのは他人がどうこうしてやるもんじゃなくて、己が果たさなきゃいけない義務って奴さ」

「……何だよ、俺と同じ考えじゃねえか」

「おおっ？ お前さん、恋した事が？」

「……してるよ。 十^との昔にな……」

（サラ……今頃、どうしてるかなあ……）

店主の質問にボスは少し暗く、辛い表情を見せながら答えた

（あつ……こいつは不味い事を聞いちゃったか？）

店主は、ボスの反応に逸早く気が付いた。

「……わりい、今日はこれで失礼するわ。」

ボスは席を立ち、出入り口へと向かう

「待ちな。」

そこに店主の呼び止める声が聞こえた

「何だ？」

「……あんたにもだが、その二人に言っておけ。」

「一度決めた相手は死ぬまで大事にしろよ」ってな。

「……ああ。」

ボスはニツコリと笑いながら店を後にした。

「……はあ……俺も恋とかしてみてえなあ……まっ、こんな25のおっさん相手にする奴なんていねえか」

- ? -

「ただいま」

ボスは帰ってくる・・・そこでは、クルミを押し倒しているクロウの姿があった。

周りではんや、はんやと二人を煽^{あお}っていた・・・

「あっ・・・」

「あっ・・・」

> i 2 5 3 7 2 — 2 3 6 9 <

「それは…ボスが帰ってくる数分前の事」

「いや、冷静に考えてみればだ。元はと言えばクロウの奴がずっと呆けだからいけないんじゃないか！」

突然カルティが立ち上がったかと思うと、いきなりとんでもない事を言い出した。

「えっ？」

「そうさ！ ちょっと待ってな、クロウ以外の皆連れてくるから！！」

「えっ・・・ちよっ・・・ちよっと!？」

そして一分後・・・

「何だ、カルティ？ 皆を呼び出したりして」

「まあ、リーダーも皆も聞いてくれよ！」

「クルミはクロウの事が好きなんだそうだ！」

「ちよつと！？カルティ姐さん！？」

カルティの爆弾発言とも言える発言は、メンバー全員を驚かせた

「クルミ、そうだったのか！？」

「は・・・はい・・・」

クルミはモジモジしながら顔を赤らめた

「それは良いが・・・どうしろというんだ？ カルティ。」

「ちよつと耳を貸しな」

カルティはクルミが聞こえないようにゴニョゴニョと何かを皆に話した

「ハア！？ そ、そんな事やらせるのか！？」

「良いから私のやる事に付き合いな！ ウチのメンバーは男組が多いんだから・・・男気見せな！」

「いや・・・それとこれは・・・」

メンバーがあせあせとまたつく様に話すと、カルティはダンツ！と床を強く踏んで大きな音を鳴らす

「い・い・か・ら・・・早くしなッ！！」

「は、はいいい！！」

リーダーとメンバー達は、準備に取り掛かった。

「クロウめ・・・今に見てろお・・・」

カルティはクックク・・・と笑っていた

「カルティさん、ドス黒い笑いは嫌われますよ？」

「五月蠅いね！」

数分後・・・

クロウは、クルミに呼ばれてやってきた。

「クルミ？ 何か用？」

「うん・・・ちよ、ちよつとこつち来てくれる？」

「……？ うん。」

そして、クロウはクルミの近くにへと近寄る。

”クンッ”

何かに引つかかった。

「えっ？」

クロウは床に仕掛けてあった紐^{ひも}トラップにより、コケそうになる。

「あつ、えっ！？ わ、わああああ！！？」

「きゃっ！！！」

「『そして…今に至る。』」

「いやああああ……！ ク、クロウがクルミちゃんを……ク

ルミちゃんを押し倒してるうう……！！？」

衝撃の光景にボスは、あたふたと慌てる。

「い……いや！ ち、違いますって！！」

「こ、これは事故で……！」

そこへ「カッカッカッ」と笑いながらカルティがやってくる

「いやいや、随分とお似合いのカップルだねえ」

「ね……姐さん！ これって、カルティ姐さんが！？」

「おうよ！ これぐらいしないと……あんた等はくつつかないと思っ
てね」

「ほうら、もつとギュギュツとくつつきな！ お幸せカップルさん

」

カルティに抱きしめながら、二人の距離は0に等しい距離感だっ
た……

そして、周りからのキスコールが流れる

「おーまーえーらーねー・・・」

そんなバカ騒ぎしている皆を見たボスは、先ほどの寂しい感じが馬鹿馬鹿しく感じた

スラナの方はというと、楽しそうにしている皆を見てクスクスと笑っていた。

「もう、ここまで来たんだから二人共キスでもしちゃいなって。」

「えっ、いや・・・恥ずかしい・・・」

「クロウ・・・」

「く、クルミ・・・？」

クルミは、ボスに教えてもらった事をやってのけた
クルミの行動にクロウは赤面を浮かべ、凄く照れていた

二人の唇が近づく・・・もはやゼロ距離、キス寸前。

二人の心臓がバクバクと鳴る。

苦しい・・・とても苦しい・・・胸がはち切れそうに・・・

唇と唇が触れた。

「大好き。」

3 Step:「恋ってどんな感じですか？」（後書き）

【THE・恥じらいタイム】

どうも、零式です。スマン・・・二次創作に力を入れすぎてた。（何時もの事）

はい、つーわけで・・・二章の第三話（EX回は論外）の投稿ですが・・・

正直、書いてる自分も恥ずかしい・・・ww

いや、マジでハズい、これはハズすぎる。

自分でやっついてなんだが、ガチでハズいです。（*・・・*）

……さて、次回の予定は無しです。

私が予定すると、全ての予定が崩壊し、消滅する可能性が大なので・・・

次回は何時になるか分かりません・・・随分と二次創作に力を入れてるので・・・

いっそ、二次創作の作品を「オリジナル」に変更しようか悩んでいます。

（もしかしたら・・・）

そんな感じですが、次回も見えて頂ければ幸いです。
それでは（・・・）ノシ

挿絵は、とある絵師の方からお借りしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5650o/>

「突然ですが、貴方は今から魔王です。」

2011年6月21日22時08分発行